

東大阪市下水道事業関係 発掘調査概要報告

— 1992年度 —



1994. 3

財団法人 東大阪市文化財協会

はしがき

東大阪市場で今までに知られている遺跡は、100箇所以上にもなります。本書はこれらの遺跡で行われた発掘調査のうち下水道工事に関係した調査の報告を収めたものです。

東大阪市の下水道は西地区にほぼ普及し、現在は中地区から東地区にかけての工事が急がれています。そのため、周知の遺跡内での工事計画も年毎に増加しています。このような状況の中で、平成2年10月29日に締結されました20年間におよぶ調査計画・体制に関する基本協定に基づいて、今年度も本書に収めた発掘調査をはじめ試掘・立会調査等を実施してまいりました。これらの調査は、幅1m前後の下水管理設部分、あるいは推進工法による立坑部分という限定した範囲で行われたものでしたが、これまで知られていなかった新たな事実が多く明らかになりました。

本市に下水道が普及し、またその工事に伴って発掘調査が行われることで、本市の歴史もさらに明らかになっていくものと確信しています。歴史は「未来を映し出す鏡」とも言われ、発掘調査で確認される遺構・遺物によって先人の歩みをたどることも、けっして無駄なことではないと思います。今回、これら発掘調査の貴重な成果を収めた本書を刊行いたしますとともに、この成果を今後の文化財行政に役立ててゆきたいと考えます。また、本書が広く市民の方々にも御利用いただきまして、郷土史理解の一助となり、埋蔵文化財の保護に役立つものとなれば、私どもにとって望外の喜びに存じます。

最後になりますが、調査を実施するにあたり御協力を賜りました関係各位に対しては、厚く御礼申し上げますとともに、今後いっそうの御支援をお願い申し上げます。

平成6年3月31日

財団法人東大阪市文化財協会
理事長 新庄 孝臣

例 言

1. 本書は財団法人東大阪市文化財協会が、東大阪市の委託を受け、平成4(1992)年度に実施した下水道管渠築造工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
2. 本書には西岩田遺跡・山賀遺跡・若江遺跡・池島遺跡・神並遺跡で実施した10件の発掘本調査の概要をおさめた。ひとつの調査回数でも報告の章が分かれるものや、3年度からの継続事業、5年度への繰り越し事業のため各年度報告にまたがるもの等があり、体裁として読みにくい点をご容赦願いたい。このほか下水道関係の調査参考資料として、若江第52次調査と若江第55次調査の調査概要を第12章と第13章として掲載し、第6章に下水道工事に際して出土した遺物の紹介を行った。なお、西岩田第14次調査・山賀第6次調査・若江北第5次調査は次の機会に概要を報告する。鬼虎川第34次調査は遺物量が大量であることから別途に報告する予定である。詳細は第1章の第1表を参照されたい。
3. 試掘・立会調査については第1章の第2表にまとめて掲載した。
4. 調査は以下の事務局体制によった。(1994年3月31日現在)
理 事 長 新 庄 孝 臣 (東大阪市教育委員会教育長)
常 務 理 事 西 脇 実
事 務 局 長 巽 信 二 (東大阪市教育委員会社会教育部次長)
庶 務 部 長 吉 川 正 光 (東大阪市教育委員会文化財課主幹)
調 査 部 長 原 田 修 (東大阪市教育委員会文化財課主幹)
調 査 副 部 長 松 田 順 一 郎
調 査 部 員 上 野 節 子
庶 務 部 員 朝 田 直 美
大 林 亨
村 田 周 亮
5. 各報告は調査主担当者が執筆し、分担は次のとおりである。編集は金村が行った。
第1・4・5・6・9・11・13章 金村浩一
第2・7・12章 木建正宏
第3章 井上伸一・三輪若葉(旧姓五井)
第8章 三輪若葉
第10章 松田順一郎
6. 遺構実測の基準には国土座標第VI系を使用し、図中の方位は特に表記のないかぎり、国土座標北を示す。水準高にはT.P.値を用いた。基準点には委託して設置したものがあつた。
7. 土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」に準じたが、夜間調査等には主観によって判断したものがある。

8. 本書に収録した遺構写真は各担当者が撮影し、遺物写真は株式会社GFプロに委託して撮影したものである。
9. 調査の実施にあたって東大阪市建設局下水道部の援助とともに、施工業者ならびに調査地市民各位の御協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。調査・整理事業は以下の方々のほかに多数の参加があった。

榎本雅則、太田裕樹、福瀬哲生、佐藤紀久、渡辺恵司、今西直毅、児玉兼、山下賢一郎、
 富士山明、森村誠一、山田幸生、石田知弘、太田典明、帆足友秀、杉田敦哉、浜 裕子、
 今井喬子、石塚広美、上牧香陽、熊倉明子、中村好美、岸田智子、藤本純子、藤田真子、
 藤井文子、常田 慈、宮本由美子、井上美夕紀、大久畑由美子、立崎しおり、金 弘美

本文目次

第1章	平成4年度調査の概要	1
1	経緯と経過	1
2	平成4年度調査の成果	3
第2章	西岩田遺跡第12・13次調査報告	7
1	はじめに	7
2	調査概要	7
1)	西岩田遺跡第12次調査	7
2)	西岩田遺跡第13次調査	9
3	まとめ	10
第3章	若江遺跡第47次・山賀遺跡第5次調査概要	11
1	はじめに	11
2	A地区の調査概要	11
3	A地区の出土遺物	15
4	C地区の調査概要	17
5	まとめ	19
第4章	若江遺跡第48-1次調査概要	21
1	はじめに	21
2	調査概要	23
3	まとめ	24
第5章	若江遺跡第48-2次調査報告	25
1	はじめに	25

2	調査概要	26
3	まとめ	26
第6章	若江遺跡第50-1次調査概要	29
1	はじめに	29
2	調査概要	30
1)	C地区	30
2)	D地区	31
3)	E地区	32
4)	F地区	34
5)	G地区	34
3	まとめ	35
4	付・資料紹介	35
第7章	若江遺跡第50-2次調査概要	37
1	はじめに	37
2	調査概要	37
3	まとめ	38
第8章	若江遺跡第51次調査概要	39
1	はじめに	39
2	調査概要	40
3	出土遺物	42
4	まとめ	44
第9章	若江遺跡第53次調査報告	45
1	はじめに	45
2	調査概要	46
3	まとめ	47
第10章	池島遺跡第11次調査報告	49
1	はじめに	49
2	調査概要	50
3	層序と遺構・遺物	51
3.1	岩質層序	51
3.2	文化層序	55
4	調査地で採集した砂	56
4.1	採集試料	56
4.2	粒度分析	57
4.3	鉱物組成の分析	57

4.3.1	砂礫の樹脂包埋・研磨	57
4.3.2	染色	57
4.3.3	鉱物粒・岩石粒の計数	58
4.3.4	鉱物粒・岩石粒の量比の表現	58
4.4	粒度分析の結果	58
4.5	鉱物組成の分析結果	60
5	堆積層CとFに含まれる砂礫堆積時の流況について	62
6	調査地点付近の堆積環境の変化と地形発達	64
7	まとめ	66
第11章	神並遺跡第16次調査報告	69
1	はじめに	69
2	調査概要	70
3	まとめ	71
第12章	参考資料・若江遺跡第52次調査報告	73
1	はじめに	73
2	調査概要	73
3	まとめ	78
第13章	参考資料・若江遺跡第55次調査報告	79
1	はじめに	79
2	調査概要	80
3	まとめ	80

挿図目次

第1図	池島遺跡夜間調査風景(池島第11次調査)	3
第2図	西岩田・山賀・若江遺跡位置図(S=1/25000)	4
第3図	池島遺跡位置図(S=1/25000)	5
第4図	神並遺跡位置図(S=1/25000)	6
第5図	調査地位位置図(S=1/2500)	7
第6図	12次調査区位置図(S=1/1600)	8
第7図	12-A区断面図(S=1/40)	9
第8図	12-B区断面図(S=1/40)	9
第9図	13次基本層序(S=1/40)	10
第10図	若江第47次・山賀第5次調査地位位置図(S=1/2500)	11

第11図	若江第47次・山賀第5次A地区土層断面図(S=1/60).....	13
第12図	若江第47次・山賀第5次A地区遺構平面図(S=1/100).....	14
第13図	若江第47次・山賀第5次A地区出土遺物実測図(S=1/4).....	16
第14図	若江第47次・山賀第5次C地区土層断面図(S=1/40).....	17
第15図	若江第47次・山賀第5次C地区遺構平面図1(S=1/150).....	18
第16図	若江第47次・山賀第5次C地区遺構平面図2(S=1/150).....	折込
第17図	若江第48-1次調査地位置図(S=1/2500).....	21
第18図	若江第48-1次調査区全体図(S=1/400).....	22
第19図	若江第48-1次土層断面図(S=1/50).....	23
第20図	若江第48-1次遺構平面図(S=1/100).....	折込
第21図	出土遺物(S=1/4).....	24
第22図	若江第48-2次調査地位置図(S=1/2500).....	25
第23図	若江第48-2次遺構断面図(S=1/40).....	26
第24図	若江第48-2次調査地全体図及び土層図(S=1/300・1/40).....	折込
第25図	若江第48-2次出土遺物(S=1/4).....	27
第26図	若江第50-1次調査地位置図(S=1/2500).....	29
第27図	若江第50-1次C地区土層図(S=1/40).....	30
第28図	若江第50-1次C・E・G地区平面図(S=1/200).....	折込
第29図	D地区土層図(S=1/40).....	31
第30図	D地区平面図(S=1/200).....	31
第31図	若江第50-1次E地区土層図(S=1/40).....	32
第32図	若江第50-1次F地区平面及び土層図(S=1/200・1/40).....	33
第33図	若江第50-1次G地区土層図(S=1/40).....	34
第34図	土器採集地点付近図(S=1/2500).....	35
第35図	採集された土器(S=1/4).....	36
第36図	若江第50-2次調査地位置図(S=1/2500).....	37
第37図	基本層序(S=1/40).....	38
第38図	若江第50-2次遺構平面図(S=1/80).....	38
第39図	若江第51次調査地位置図(S=1/2500).....	39
第40図	若江第51次A地区遺構平面図・土層断面図1(S=1/80).....	折込
第41図	若江第51次A地区遺構平面図・土層断面図2(S=1/80).....	折込
第42図	若江第51次B地区西壁上層断面図(S=1/40).....	41
第43図	B地区平面図.....	41
第44図	若江第51次C・D地区土層断面図(S=1/40).....	42
第45図	若江第51次A地区落ち込み2出土遺物実測図(S=1/4).....	43

第46図	若江第51次A地区第11層出土遺物(S=1/2).....	44
第47図	若江第53次調査地位位置図(S=1/2500).....	45
第48図	若江第53次A地区位置図(S=1/100).....	46
第49図	若江第53次A地区南壁土層図(S=1/100).....	46
第50図	B地区土層(S=1/100).....	47
第51図	土鍾穴測図.....	47
第52図	池島遺跡と第11次調査位置.....	49
第53図	池島第11次調査区.....	50
第54図	池島第11次土層断面図.....	52
第55図	池島遺跡第11次土層柱状図.....	54
第56図	中世畦畔遺構略図.....	56
第57図	池島第11次砂礫試料の粒径頻度分布と統計量の比較.....	59
第58図	池島第11次砂礫試料の岩石種組成.....	61
第59図	池島第11次調査地周辺の地形と土地利用(昭和17年当時).....	66
第60図	神並第16次調査地位位置図(S=1/2500).....	69
第61図	神並第16次土層断面図(S=1/100).....	70
第62図	神並第16次A地区第6層上面遺構平面図(S=1/100).....	71
第63図	谷状地形概念図(S=1/600).....	72
第64図	若江第52次調査地位位置図(S=1/2500).....	73
第65図	基本層序.....	74
第66図	若江第52次井戸1断面図(S=1/40).....	75
第67図	若江第52次出土遺物実測図(S=1/4).....	77
第68図	若江第52次堀断面図(S=1/40).....	折込
第69図	若江第55次調査地位位置図(S=1/2500).....	79
第70図	若江第55次土層断面図(S=1/100).....	折込
第71図	若江第55次SK01出土遺物(S=1/4).....	80
第72図	若江第55次SK02及び包含層出土遺物実測図(S=1/4).....	81
第73図	若江第55次包含層出土遺物実測図(S=1/4).....	82

表 目 次

第1表	平成4年度調査一覧表.....	1
第2表	平成4年度試掘・立会調査一覧表.....	2
第3表	若江第48-2次出土遺物一覧表.....	28

第4表	若江第55次出土遺物一覧表1	83
第5表	若江第55次出土遺物一覧表2	84

図版目次

図版第一	西岩田遺跡第12・13次調査	1. 12次A地区調査地近景 2. 12次A地区調査風景 3. 12次A地区土層断面
図版第二	西岩田遺跡第12・13次調査	1. 12次B地区上層断面 2. 13次調査風景 3. 13次土層断面
図版第三	山賀遺跡第5次・若江遺跡第47次調査	1. A地区調査風景 2. A地区ビット1 3. A地区南壁土層断面
図版第四	山賀遺跡第5次・若江遺跡第47次調査	1. C地区南壁土層断面 2. C地区土墳2 3. C地区土墳2断面
図版第五	山賀遺跡第5次・若江遺跡第47次調査	1. C地区溝2 2. C地区井戸2 3. C地区井戸2断面
図版第六	山賀遺跡第5次・若江遺跡第47次調査	1. A地区出土土器1 2. A地区出土土器2
図版第七	若江遺跡第48-1次調査	1. 調査風景 2. 立会地点土層 3. 遺構状況
図版第八	若江遺跡第48-1次調査	1. 調査区南部上層 2. 調査区南部遺構状況 3. 緑釉陶器出土状況
図版第九	若江遺跡第48-1次調査	1. 出土緑釉陶器 2. 出土黒書土器 3. 遺構検出状況
図版第十	若江遺跡第48-2次調査	1. 調査風景 2. 上層断面 3. ビット(SP01)

図版第十一	若江遺跡第48-2次調査	出土遺物
図版第十二	若江遺跡第50-1次調査	1. C地区遺構状況 2. C地区南北溝 3. C地区上層断面
図版第十三	若江遺跡第50-1次調査	1. D地区調査風景 2. D地区杭出土状況 3. D地区護岸施設
図版第十四	若江遺跡第50-1次調査	1. E地区東西溝 2. E地区堀西半 3. E地区堀東肩
図版第十五	若江遺跡第50-1次調査	1. F地区杭出土状況 2. F地区南北溝 3. F地区土器出土状況
図版第十六	若江遺跡第50-1次調査	1. D地区立会地点土層 2. F地区近世遺構検出状況 3. F地区上層断面
図版第十七	若江遺跡第50-1次調査	1. F地区調査風景 2. G地区東西溝断面 3. G地区近世落ち込み
図版第十八	若江遺跡第50-2次調査	1. H地区調査風景 2. H地区木樋検出状況 3. H地区土層断面
図版第十九	若江遺跡第51次調査	1. A地区調査風景 2. A地区北壁土層断面 3. A地区土器出土状況
図版第二十	若江遺跡第51次調査	1. A地区北壁土層断面 2. A地区井戸 3. B地区落ち込み1検出状況
図版第二十一	若江遺跡第51次調査	落ち込み2出土遺物1
図版第二十二	若江遺跡第51次調査	落ち込み2出土遺物2
図版第二十三	若江遺跡第51次調査	1. 落ち込み2出土遺物3 2. 落ち込み2出土遺物4
図版第二十四	若江遺跡第53次調査	1. A地区測量作業風景 2. A地区上層断面 3. 試掘時出土の土鏝

- | | | |
|--------|------------|--|
| 図版第二十五 | 池島遺跡第11次調査 | 1. 中世遺構——畦畔
2. 中世遺構——溝 |
| 図版第二十六 | 池島遺跡第11次調査 | 1. 中世遺構——溝
2. 東壁土層断面 |
| 図版第二十七 | 池島遺跡第11次調査 | 1. 東壁土層断面南端
2. 北壁土層断面中央 |
| 図版第二十八 | 池島遺跡第11次調査 | 1. 第18層上面足跡
2. 出土遺物 |
| 図版第二十九 | 神並遺跡第16次調査 | 1. A地区近景
2. A地区遺構状況
3. A地区北壁土層 |
| 図版第三十 | 神並遺跡第16次調査 | 1. B地区調査風景
2. B地区調査近景
3. B地区土層断面 |
| 図版第三十一 | 若江遺跡第52次調査 | 1. 調査地近景
2. 調査風景
3. 堀断面 |
| 図版第三十二 | 若江遺跡第55次調査 | 1. 調査風景
2. 土層断面 1
3. 土層断面 2 |
| 図版第三十三 | 若江遺跡第55次調査 | 1. 土層断面 3
2. 土層断面 4
3. 土層断面 5 |
| 図版第三十四 | 若江遺跡第55次調査 | 1. SK01出土遺物
2. 包含層出土遺物 |
| 図版第三十五 | 若江遺跡第55次調査 | 1. SK01・包含層出土遺物
2. SK02出土遺物 |
| 図版第三十六 | 若江遺跡第55次調査 | 包含層出土遺物 |
| 図版第三十七 | 若江遺跡第55次調査 | SK01・包含層出土遺物 |
| 図版第三十八 | 若江遺跡第55次調査 | 包含層出土遺物 |

第1章 平成4年度調査の概要

1 経緯と経過

平成4年度は東大阪市下水道管理者と東大阪市教育委員会および財団法人東大阪市文化財協会の三者による、平成2年10月に締結された基本協定にもとづく調査に入って3年目を迎える年度である。協定は、従来個々の工事ごとの単独事業として実施していた調査を、公共下水道管渠築造工事全体に伴う調査事業とすることとしたものである。ただし調査事業としてはひとつのものであるが、整理作業の都合で個々に調査回数数を附している。本年度は年度当初に工事計画に沿って半年度の委託契約を結び、結果として第1表に掲載する13件の発掘調査を実施した。なかには諸般の事情により前年度からの継続事業や次年度へ繰り越した事業もある。工事計画に並行して調査を実施しているため、ふたつの遺跡にまたがるもの（山賀第5次・若江第47次調査）や遺跡縁辺部から遺跡外に調査が及んだものがある（若江第48次調査）。

調査回数名	担当	面積	調査期間	備考
西岩田12次	木建	32㎡	H.4/11.07～H.4/12.04	2章に報告。
西岩田13次	木建	70㎡	H.4/11.07～H.4/12.04	2章に報告。
西岩田14次	上野・金村 ・五井	61㎡	H.5/01.20～H.5/04.26	次年度継続。次年度報告予定
山賀5次 ・若江47次	井上・五井	484㎡	H.3/12.02～H.4/07.16	年度継続事業。3章に報告。
山賀6次	金村	93㎡	H.4/11.13～H.5/02.16	次年度報告予定。
若江北5次	金村	331㎡	H.4/11.04～H.5/05.28	次年度継続。次年度報告予定
若江48次	金村	147㎡	H.3/11.18～H.4/05.07	年度継続事業。4・5章に報告
若江50次	金村・木建	330㎡	H.4/07.28～H.4/11.02	6・7章に報告。
若江51次	五井	475㎡	H.4/07.27～H.5/05.10	8章に報告。
若江52次	木建	30㎡	H.4/10.19～H.4/10.27	12章に報告。参考資料。
若江53次	上野・金村	20㎡	H.4/11.25～H.4/11.27	9章に報告。
若江55次	上野・金村	85㎡	H.4/11.05～H.4/11.19	13章に報告。参考資料。
鬼虎川34次	井上	170㎡	H.3/10.16～H.5/02.26	年度継続事業。別途報告予定
池島11次	松田・金村 ・井上	55㎡	H.4/10.12～H.4/10.29	10章に報告。
神並16次	上野・金村	14㎡	H.4/10.24～H.4/10.25	11章に報告。

第1表 平成4年度下水道関係発掘調査一覧表

遺跡名	調査地点	調査期間	担当	調査内容	備考
西岩田遺跡	西岩田4丁目	H.5/03.06	金村	試掘 遺構・遺物を検出せず。文化財に支障ないと思われる。	3年度事業
瓜生堂遺跡	若江西新町1丁目	H.4/07.03	上野	試掘 遺構・遺物を検出せず。文化財に支障ないと思われる。	
若江遺跡	若江本町2丁目他	H.4/07.22	金村	試掘 遺構・遺物を検出せず。文化財に支障ないと思われる。	
若江遺跡	若江本町4丁目	H.4/12.14	本建	試掘 遺構・遺物を検出せず。文化財に支障ないと思われる。	
池島遺跡 隣接地	玉串町東3丁目	H.4/04.23	金村	試掘 遺構・遺物を検出せず。文化財に支障ないと思われる。	
玉串遺跡 隣接地	玉串町東2丁目	H.4/04.19	金村	試掘 遺構・遺物を検出せず。文化財に支障ないと思われる。	
植附遺跡 ・塚山古墳	西石切町2丁目	H.5/02.18	上野	試掘 遺構・遺物を検出せず。塚山古墳に隣接するため立会調査が必要と思われる。	5年度予定 の試掘調査
瓜生堂遺跡	中小阪4丁目	H.5/02.19	金村	立会 遺構・遺物を検出せず。	
瓜生堂遺跡	若江西新町1丁目	H.5/03.18	金村	立会 遺構・遺物を検出せず。	
瓜生堂遺跡	瓜生堂3丁目	H.5/03.19	金村	立会 遺構・遺物を検出せず。	
水走遺跡	川中・水走	H.4/08.31~ H.4/12.01	井上	立会 土師器や瓦器が出た。遺構は検出せず。調査地付近では今後本調査が必要となろう。	
和泉遺跡	布市町2丁目他	H.4/10.15~ H.4/10.20	松田	立会 遺構・遺物を検出せず。河内湖から河内湖にかけての堆積層を確認。	

第2表 平成4年度下水道関係試掘・立会調査一覧表

東大阪市中部に位置する若江遺跡での調査が多いが、本管の築造が終了し、網目状に管を結ぶ枝管築造に比重が移ってきたためである。細い路地や袋小路での調査が多く面積に比して長期間にわたる調査となった。ことに遺跡北半部での調査が多い。この地区は現在では築造工事が完了し、平成5年度より下水道の供用が開始されている。今後は遺跡南半部でこのような調査が必要になるとと思われる。

本市東部は本管の築造を急いでいる状態である。本管は集水勾配の必要上深くに埋設されるため推進工法を取る場合が多い。したがって調査は小面積の立坑部分が対象となる。通常であれば鋼矢板による土留を行った四角い立坑で調査を行う。しかし、掘削時にライナープレートを順次設置して土留を図る工法では掘削範囲が直径3m以下の円形となり、あまりにも狭小なため土層観察を主とする調査を実施した(神並第16次調査他)。

発掘調査の有無は周辺での調査結果を参考に判断し、必要な場合は試掘調査を実施した。遺跡外であっても重要地点は試掘調査を行い、本調査を行ったものもある(池島第11次調査)。現

地表下2m以上の深さに埋もれている遺跡の場合は通常の試掘がおよばず、様相を把握できていないものが多い。このため推進立坑の掘削に際して、できるだけ本調査をあるいは立会調査を実施して遺跡の資料収集に努めた。なお今年度を実施した試掘・立会調査は12件あり第2表に内容を掲載した。

交通事情等によって夜間しか調査が行えない事例が増加した。今年度はいずれも短期の調査であったため、職員が交代で調査にあたる等の手段によって実施した。米年度以降には件数の増加とともに調査期間が長期にわたる場合が予測される。安全管理や調査体制、調査方法等で検討されるべき課題を残した。

公共下水道の整備に伴って私有地である私道に管を埋設する工事が遺跡内で行われる事例も増加してきた。多くは現地地表下1m前後の掘削にとどまるため立会調査で文化財に対する影響の有無を確認し、影響のある場合は上層の観察と遺物の採集に努めた。今年度は若江遺跡において1件の本調査を実施している。若江遺跡の場合は遺構面が現地表近くに存在するため本調査となったものである(第1表中若江第55次調査)。また、建築物に付随して下水管を埋設する工事を行う場合もある。これについても若江遺跡で1件の本調査がある(第1表中若江第52次調査)。これは下水道関係の事業であるため本書に参考資料として報告を行うものである。



第1図 夜間調査風景(池島第11次調査)

2 平成4年度調査の成果

発掘調査の報告は第2章以下の各章のとおりであるが、ここでは簡単に各遺跡について概要を述べることにしたい。

西若田遺跡や若江遺跡、山賀遺跡は河内平野のほぼ中央にひろがる縄文時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。遺跡は楠根川などによって形成された自然堤防上の微高地や後背湿地等に位置し、現在は田畑・工場・住宅の混在した市街地となっている(第2図)。

西若田遺跡は近畿自動車道建設に伴う調査等で弥生時代後期の鋤などの木製品や古墳時代前期の山陽地方の土器が出上している。弥生時代から古墳時代が中心となる遺跡である。今年度は大阪中央環状線の東側で2件の調査を行ったが、遺構や遺物が確認されなかった。古墳時代の集落は環状線より東側にはおよんでいないものと思われる。集落の規模を明らかにすることが今後の課題となろう。

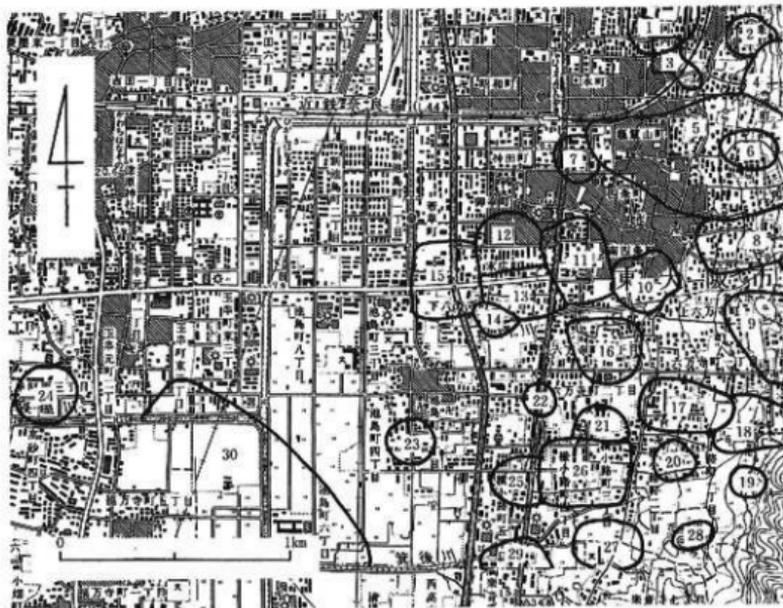
弥生時代前期の大集落として著名な山賀遺跡はほとんどが八尾市内に位置する。遺跡北部の若江中学校建設に伴う調査等では古墳時代前期の建物が発見され、弥生時代前期の土器も出土

している。今年度の調査では弥生や古墳時代の明確な遺構は検出されなかった。東大阪市の部分と八尾市域の部分との集落の連続性が問題となろう。

若江遺跡では今日までの調査で室町時代から織豊期にかけての城郭遺構である若江城の堀や建物が検出され、先行する鎌倉時代頃の集落の様相も明らかになりつつある。また、遺構は確認されていないが瓦等が出土することから古代の若江鹿寺や若江郡衙の存在が推定されていた。さらに下層では弥生時代の水田や方形周溝墓が検出され、周辺遺跡との関連が注目されている。とくに若江城は中世後半期の大規模城郭として羽曳野市の高屋城とともに城郭研究史上重要な



第2図 西堀田・山賀・若江遺跡位置図(S=1/25000)



- | | | | | |
|----------|------------|-------------|-----------|-----------|
| 1. 圃池遺跡 | 7. 市原遺跡 | 13. 段上遺跡 | 19. 浄土寺跡 | 25. 西代遺跡 |
| 2. 水土氏館跡 | 8. 花巻山古墳群 | 14. 下六方寺遺跡 | 20. 貝花遺跡 | 26. 馬場川遺跡 |
| 3. 河内寺跡 | 9. 若瀬山遺跡 | 15. 北島池遺跡 | 21. 北塚敷遺跡 | 27. 西の口遺跡 |
| 4. 寄坊山遺跡 | 10. 十六方寺遺跡 | 16. 船山遺跡 | 22. コキ田遺跡 | 28. 飯山古墳 |
| 5. 山畑古墳群 | 11. 縄子遺跡 | 17. 平堂遺跡 | 23. 池島東遺跡 | 29. 栗吉寺遺跡 |
| 6. 山畑遺跡 | 12. 五合田遺跡 | 18. 浄土寺谷古墳群 | 24. 玉串遺跡 | 30. 池島遺跡 |

第3図 池島遺跡位置図(S=1/25000)

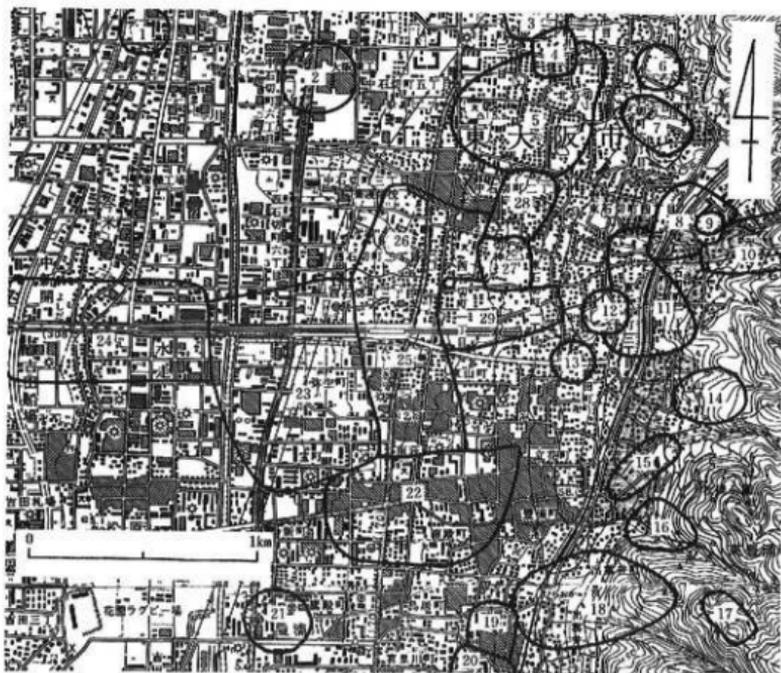
もので、構造の解明が期待されているものである。今年度の調査では遺跡北半部の調査がおもに実施され、若江城の堀の状況を知る資料を得ることができた。今後、南半分の状況が明らかとなれば城の構造を復原することも可能となろう。先行する中世集落については予想以上に広範囲にひろがることが明らかにされ、遺跡がより北部にひろがることが確認された。古代の遺構が確認されたことも大きな成果といえよう。これまでの成果を含め遺跡全体を解明することが今後の急務といえる。

平野部の東端に位置する池島遺跡は八尾市域において治水緑地建設に伴う調査が財団法人大阪文化財センターによって大規模に進められ、弥生時代から江戸時代までの耕作形態の変遷がたどれる成果をあげている(第3図)。今年度の調査は第二寝犀川の右岸で実施したもので遺跡の範囲外であった。調査の結果、中世の耕作地がひろがっていることが明らかとなった。中世の耕作面が右岸のように広がっているか確認することが課題である。

神並遺跡は近畿日本鉄道東大阪線建設に伴う調査で発見された、縄文から近世にかけての複合遺跡である(第4図)。生駒山西麓の扇状地にあり、縄文時代の集落や古墳、平安時代頃の集

落等が発出されている。遺跡内に所在する石切剣箭神社はオアキを治す神様として大阪で信仰を集めている。この神社は古代には法通寺と呼ばれる寺院であった。神社境内で行われた調査では基壇を検出し、白鳳時代からの瓦が大量に出上している。今年度の調査では遺構や遺物を検出せず、法通寺南面には谷状地形が存在する可能性がある。

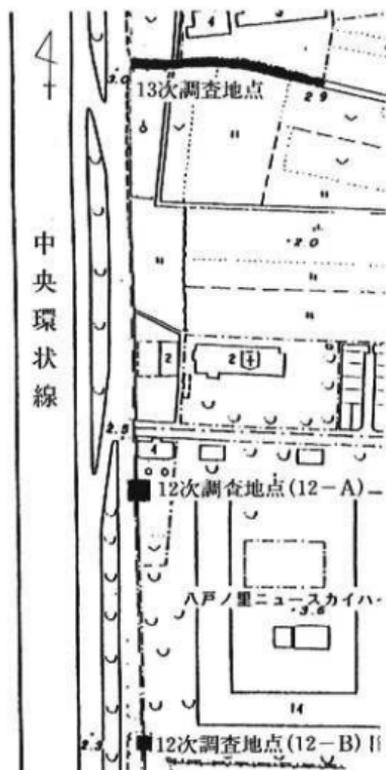
いずれも交通事情等の条件下での調査であった。期間や費やす労力は通常の調査に比べ倍以上といえよう。しかし試掘調査より本調査で得られる情報量も倍以上である。地表深く扇状地や沖積地に埋没した遺跡が多い本市では下水道管渠築造工事に伴う調査は遺跡をかいま見る絶好の機会である。市内全域の地下を点と線によって結び過去を復原し現在に活かすとともに市民生活の基盤である公共下水道が一刻も早く整備されることが今後の最大の課題である。



- | | | | |
|--------------|-------------|-------------|-----------|
| 1. 加納遺跡 | 9. 富尾古墳群 | 17. 神津坂祭祀遺跡 | 25. 西ノ辻遺跡 |
| 2. 和泉遺跡 | 10. 辻子谷古墳群 | 18. 出雲井遺跡群 | 26. 植田遺跡 |
| 3. 日下遺跡 | 11. 神堂古墳群 | 19. 狐塚遺跡 | 27. 法通寺跡 |
| 4. 石蔵寺跡・馬場遺跡 | 12. 正興寺山遺跡 | 20. 狐塚遺跡 | 28. 辻子谷遺跡 |
| 5. 芝ヶ丘遺跡 | 13. 若宮古墳群 | 21. 鶴立遺跡 | 29. 神堂遺跡 |
| 6. 正法寺山遺跡 | 14. 龍田山古墳群 | 22. 鬼塚遺跡 | |
| 7. 芝坊主山遺跡 | 15. みかん山古墳群 | 23. 鬼虎川遺跡 | |
| 8. 千手寺山遺跡 | 16. 豊浦谷古墳群 | 24. 水先遺跡 | |

第4図 神並遺跡位置図(S=1/25000)

第2章 西岩田遺跡第12・13次調査報告



第5図 調査地位位置図(S=1/2500)

を機械で、以下の遺物包含層についても機械によって掘削した。掘削によって掘り上げられた土は、舗装・盛土・攪乱層と遺物包含層を別に置き、遺物包含層については遺物の採集をおこなった。以下各地区別にその成果を述べてゆくことにしたい。

2 調査概要

1) 西岩田遺跡第12次発掘調査

・12-A区

：層序(第7図)

1 はじめに

西岩田遺跡の発掘調査は、昭和46年の第1次調査にはじまり、今年度で13次を数える。ここに報告する第12・13次調査は、東大阪市の下水道整備工事に伴い、同時に並行しておこなった発掘調査である(第5図)。

第12次調査は、大阪中央環状線東側歩道地下において、下水管を推進工法で埋設する工事に伴い、その推進坑南北2箇所(合計約32㎡)について発掘調査を実施した。便宜上北側を12-A区(約5m×4m)、南側を12-B区(約4m×3m)とした(第6図)。

掘削は、アスファルト舗装・盛土・攪乱層を機械で、以下の遺物包含層は人力によった。

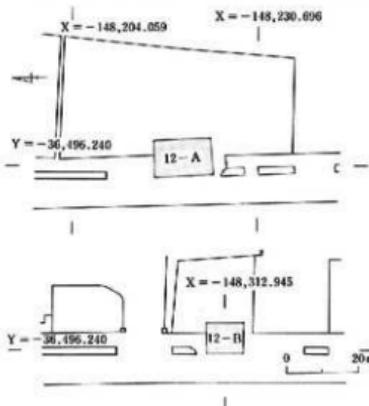
第13次調査は、大阪中央環状線意岐部東交差点の南東約200mに所在する東西方向の道路下において、下水管を開削工法で埋設する工事(幅約1m・長さ約70m・管底までの深さ約1.6m)に伴い発掘調査を実施した。

調査の方法は、下水管2本分(約8m)ごとに東から西に向かって13-A～J区として地区別し、各地区の北壁断面の精査をおこない、遺構・遺物・土層の堆積状況を確認した。掘削方法については、アスファルト舗装・盛土・攪乱層

盛土・攪乱層

第1層 青灰色(5BG5/1)粗粒砂混中粒砂(水分を多量に含む)

第2層 暗緑灰色(10GY4/1)極細粒砂混シルト(植物遺体を多く含む)



第6図 12次調査区位置図(S=1/1600)

・12-B区

12-B区は、上述の12-A区の南方 105mに位置する。調査の方法・掘削の方法などについては、12-A区と同様である。層序については、12-A区のような大規模な攪乱は受けておらず、ほぼ旧状をとどめている。しかし、遺構についてはこれを認める事はできず、また遺物の出土もなかった。以下各項目に分けて述べてゆく。

：層序(第8図)

盛土・攪乱層

第1層 灰黄褐色(10YR5/2)粘土混シルト(赤褐色の粒子を少し含む)

第2層 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト混粘土(赤褐色の粒子を多く含む)

第3層 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂混細粒砂(赤褐色の粒子を多く含む)

第4層 灰色(5Y4/1)シルト

第5層 灰色(7.5Y4/1)シルト混粘土(植物遺体を多く含む)12-A区の第2層に相当。

第6層 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト混粘土

：遺構

今回の調査では、遺構を確認できなかった。

：遺物

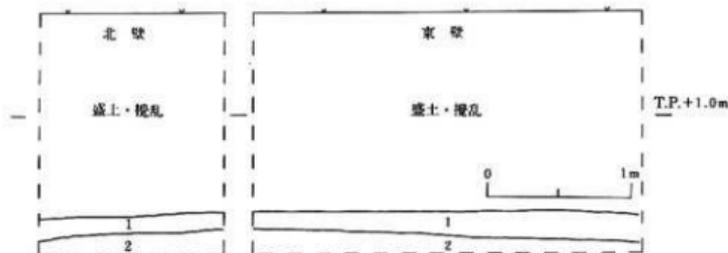
遺物の出土はない。

：遺構

上層は、大規模な攪乱を受けており、また下層でも遺構を確認することはできなかった。

：遺物

第1層中より弥生土器小片・土師器小片の2点が出土した。いずれも摩滅が著しい小片であり、時期を特定することは難しい。また図化することもできなかった。これらの遺物は河道内に堆積したと思われる砂層に含まれており、別の地点より流入したものと考えられる。



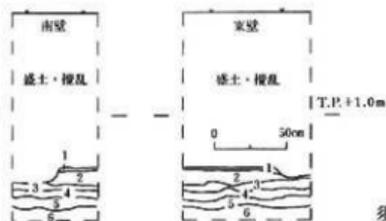
第7図 12-A区断面図(S=1/40)

2) 西岩田遺跡第13次発掘調査

: 基本層序(第9図)

盛土・擾乱層

- 第1層 暗緑灰色(10GY4/1)シルト(細粒砂を少し含む)
- 第2層 緑灰色(7.5GY5/1)シルト(極細粒砂を少し含む)
- 第3層 暗緑灰色(10GY4/1)極細粒砂
- 第4層 緑灰色(10GY5/1)シルト混極細粒砂
- 第5層 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト混極細粒砂
- 第6層 灰色(10Y5/1)細粒砂
- 第7層 灰色(10Y5/1)中粒砂混細粒砂
- 第8層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)細粒砂
- 第9層 灰色(7.5Y5/1)細粒砂混中粒砂
- 第10層 褐色(10YR4/6)中粒砂(粗粒砂を少し含む)
- 第11層 灰色(7.5Y6/1)極細粒砂混細粒砂(赤褐色の粒子を多く含む)
- 第12層 灰色(7.5Y6/1)シルト混極細粒砂(赤褐色の粒子を多く含む)
- 第13層 暗緑灰色(10GY4/1)極細粒砂混シルト



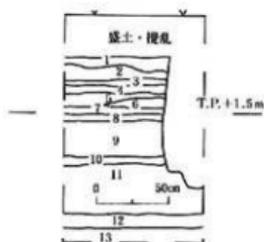
第8図 12-B区断面図(S=1/40)

: 遺構

遺構は確認できなかった。

: 遺物

今回の調査で出土した遺物には、土師器4点・須恵器2点があるが、摩滅が著しい小片で、図化できなかった。時期を特定することも難しい。



第9図 13次基本層序(S=1/40)

3 まとめ

今回の調査において、遺構を確認することはできなかった。しかし、第12次調査については、A区において認められた河道内堆積層と考えられる粗粒砂混中粒砂層が、わずかに北東から南西方向に傾斜しているにもかかわらず、B区においては認められず、下層のシルト混粘土層が両地区において認められたこと、また第13次調査における第13層も、この河道内堆積層に対応するものと考えられることから、この河川は、北東から南西方向へ流れていたと考えられ、その南東岸は、A区とB区の間には存在するものと推定できる。このことにより、調査地点周辺には、一時期比較的大規模な河川が存在したものと考えられる。

第3章 若江遺跡第47次・山賀遺跡第5次調査概要

1 はじめに

今回実施の調査は、東大阪市域の南限にあたる若江南町4から5丁目地内にA地区、C地区を設定している。また、C地区においては前年度からの継続の調査である。

また、若江遺跡と山賀遺跡は隣接しておりA地区は山賀遺跡の最北部に位置し、C地区の範囲は2遺跡にまたがっている。

なお、B地区は前年度の調査であり、詳細は前年度の報告を参照されたい。⁽¹⁾

2 A地区の調査概要

A地区の調査地は若江南町5丁目地内の東西方向にのびる市道で、総延長約86m、幅約2m、



第10図 若江第47次・山賀第5次調査地位置図(S=1/2500)

調査面積約140㎡である(第10図)。現場調査は1992(平成4)年6月3日から7月16日までおこない、現地表下約3mまで調査をおこなった。

また、A地区の調査地は大阪から十三峠を越えて大和に通じる十三街道にあたる。なお、若江遺跡第26次発掘調査においては旧街道の確認はされていない。²⁾

発掘は機械により舗装及び盛土部分を除去した後、人力により堆積層内に含まれる遺物を採取し、併せて遺構の有無を調べながら工事最深部までを掘削した。

層位は以下に示すとおりで、12層に分層できた(第11図)。

基本層位

第1層 盛土

第2層 褐色(7.5YR4/4)砂質上層が東端において堆積していたが徐々に薄くなっていき、暗緑灰色(7.5GY4/1)粘土層となる。近世の水路の埋土と思われる。

第3層 黄褐色(10YR5/6)中粒砂～粗粒砂層。細礫を少量含む。陶磁器片、土師器片等が出土している。ビットを検出しており、瓦が出土している。

第4層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)細粒砂～中粒砂層。無遺物。

第5層 濃い黄褐色(10YR5/4)粘質細粒砂～中粒砂層。土師器片、瓦器片が出土している。

第6層 オリーブ黒色(10Y3/1)シルト混粘土層。第6層上面で河道を検出した。なお、この第6層は西側では消滅する。無遺物。

第7層 西側のみに存在する。オリーブ灰色(5GY3/1)シルト～極細粒砂混粘土層。西端はシルト～細粒砂となる。無遺物。

第8層 東側と西側で様相が異なるため第8層を二分した。暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)極細粒砂～中粒砂層。部分的に粘土と砂の互層が見られる。無遺物。

第8層 オリーブ黄色(7.5Y6/3)粗粒砂層。弥生土器や庄内～布留にかけての上器が出土している。

第9層 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)細粒砂層。無遺物。

第10層 黒色(2.5GY2/1)粘土層。無遺物。

第11層 暗緑灰色(7.5GY4/1)中粒砂～粗粒砂層。弥生土器が出土している。

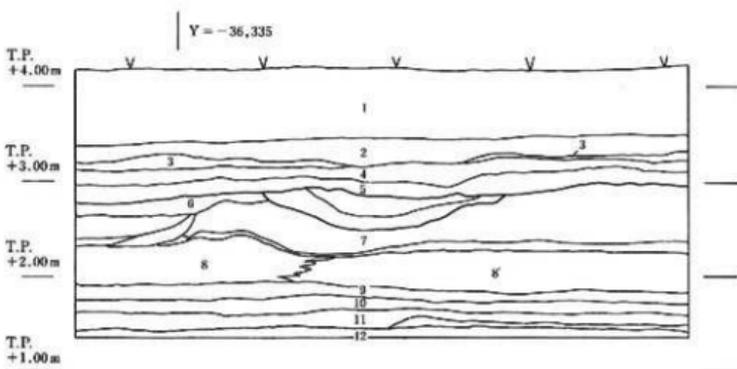
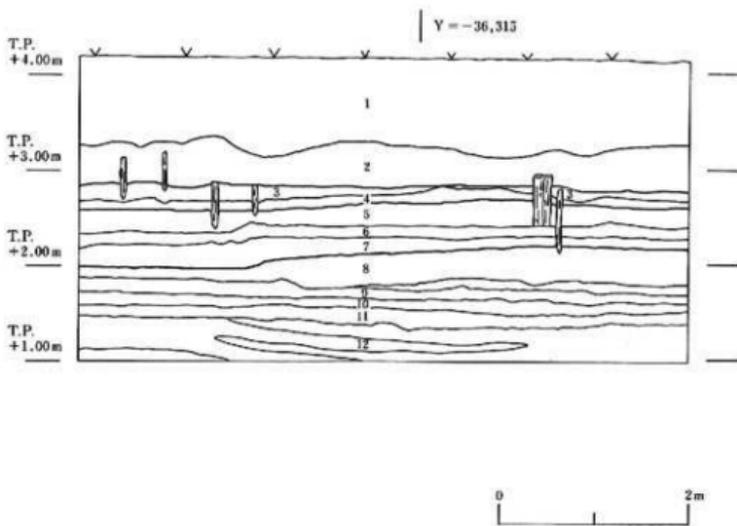
第12層 暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト層。無遺物。

以上が各層の概略である。遺構面は以下に示すとおりで3面確認できた(第12図)。

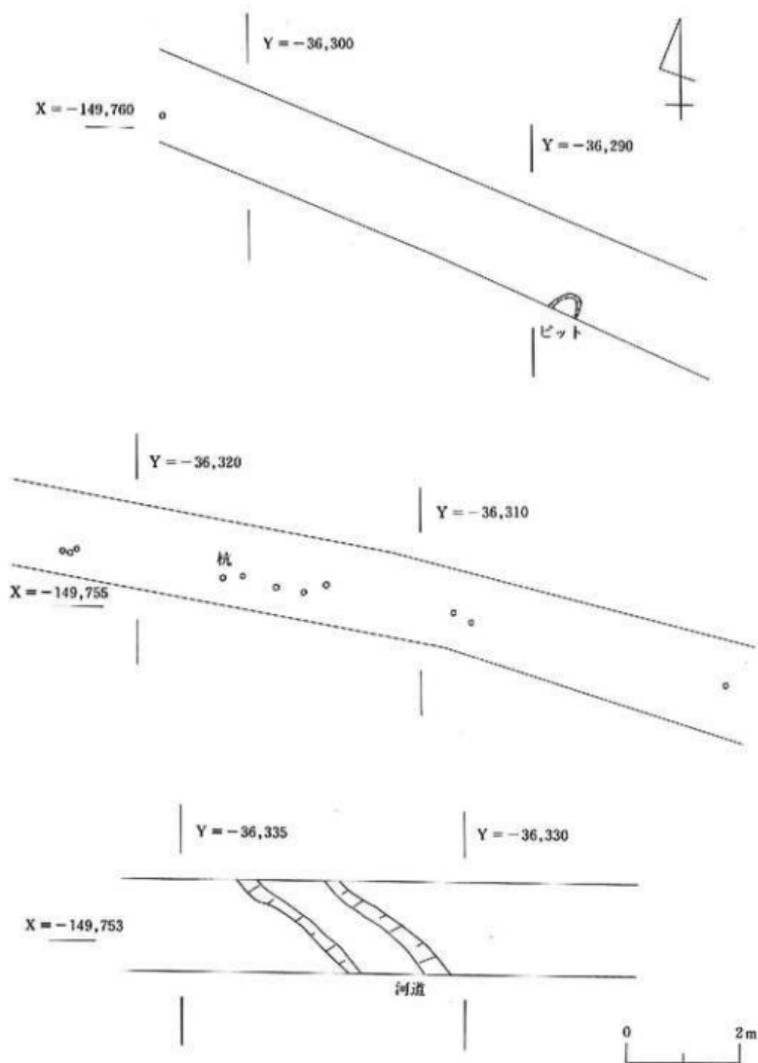
遺構は第2層中から杭列が認められている。近世の水路に伴うものと考えられる。検出した杭は杭と杭の間が30～50cm程度の比較的等間隔に打たれている個所もあり、直径10～20cm、長さ50～55cmのものが多い。

第3層からは直径約60cmのビットが検出され、瓦が出土した。時期は近世である。

また、第6層をきりこんでいる河道を検出している。幅2.0m、深さ0.4mを測り、南北方向に走る。河道内の堆積は大きく2層に分かれ、下層が濃い黄褐色(10Y5/3)シルト混粘土、上



第11图 若江第47次・山賀第5次A地区土层断面图(S=1/60)



第12図 若江第47次・山賀第5次A地区遺構平面図(S=1/100)

層が灰オリーブ色(5Y5/2)極細粒砂～細粒砂混粘土である。遺物は認められず詳細な時期は不明であるが、第5層より土師器片、瓦器片が出土しているため、中世のものと考えられる。

3 A地区の出土遺物

今回の調査では弥生時代から近世までの遺物が出土している。全体の遺物量は少なく細片が多いが、図化し得るものの全てを掲載している。以下にそれぞれについて述べていきたい(第13図)。

中世の遺物としては石鎚1、土師器羽釜2、摺鉢3がある。

1は滑石製の石鎚である。口縁部はやや内傾して立ちあがり、端部は平坦な面を持つ。内外面とも磨きが顕著である。外面には全体的にすずが付着しており、内面は灰白色(2.5Y8/1)を呈する。

2は土師器羽釜の胴部の破片で、灰色(7.5Y8/1)を呈し、胎土には長石、角閃石、石英を含む。

3は備前焼の摺鉢の破片である。口縁部はやや内傾して立ちあがり、端部は丸く終わる。口縁部には沈線が1本施され、内面に3本の摺り目が確認できる。

弥生時代の遺物は前期、中期、後期の土器が出土している。器種としては甕、壺、台付鉢、高環などがある。

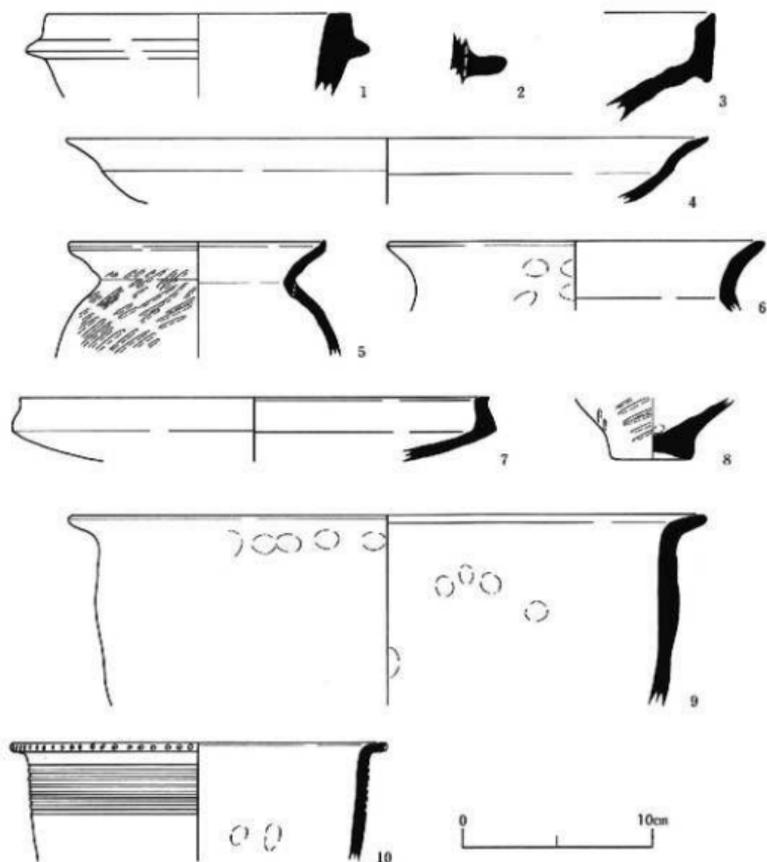
4は高環の環部で口縁部はゆるやかに外反し、端部はやや丸く終わる。時期は後期と考えられる。外面は灰黄褐色(10YR6/2)、内面はにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。胎土には長石、角閃石を含む。調整は摩滅しているが、ナデ調整と思われる。口径33cmを測り、大型のものと推測できる。

5は後期の甕である。口縁部は「く」の字形に屈曲し、あまり肩の張らない胴部が続く。内面にははっきりした稜をもつ。端部は尖り気味に終わり、口縁部外端には1本の沈線文が施されている。頸部から胴部外面には右上がりの細いタタキメが残るが、口縁部外面はヨコナデによりタタキメがナデ消されている。特に端部のナデは顕著である。内面はナデ調整をおこなっているが、口縁部をつけあわせた時のあわせ目の線を残している。外面はにぶい黄褐色(10YR4/3)、内面は灰黄褐色(10YR5/2)を呈し、胎土には長石、角閃石を含む。

6は後期の甕で口縁部は外反し端部は丸く終わる。外面はにぶい黄褐色(7.5YR5/3)、内面は褐色(10YR4/4)を呈し、胎土には長石、角閃石を含む。ユビオサエがわずかに認められる。ナデ調整がおこなわれているが摩滅が著しい。

7は中期の台付鉢の上半部である。段状の口縁部をもち、やや内傾して立ちあがる。腰にはっきりした稜をもつ。口径は24cm以上を測り、やや大型である。内外面とも褐色(7.5YR4/3)を呈し、胎土には長石、角閃石、雲母を含む。調整は若干摩滅しているが、内外面ともナデをおこなっている。

8は後期の甕の底部である。やや上げ底で外面に右上がりのやや粗いタタキメを施すが摩滅が著しい。外面はにぶい赤褐色(5YR4/3)、内面は暗褐色(7.5YR5/4)を呈する。胎土には長石、角閃石を含む。



第13図 若江第47次・山賀第5次A地区出土遺物実測図(S=1/4)

9は中期の甕である。口縁部は外反し端部は丸く終わる。器体はやや扁平である。外面は、にぶい橙色(7.5YR6/4)、内面はにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈し、胎土には石英、長石、角閃石を含む。わずかにユビオサエが認められる。内外面ともナデがおこなわれているが摩滅している。10は前期の甕で「逆し字形」の短い口縁部を有し、端部に刻み目、頸部以下に7条の篋描き沈線文をもつ。外面は明黄褐色(10YR6/6)、内面は明褐色(7.5YR5/8)を呈している。胎土には長石、角閃石を含む。摩滅が著しく調整は不明瞭であるが、内外面ともナデがおこなわれていると思われる。また、頸部にはユビオサエがわずかに認められる。

弥生土器はいずれも角閃石を含んでおり、生駒西麓産の胎土と思われる。

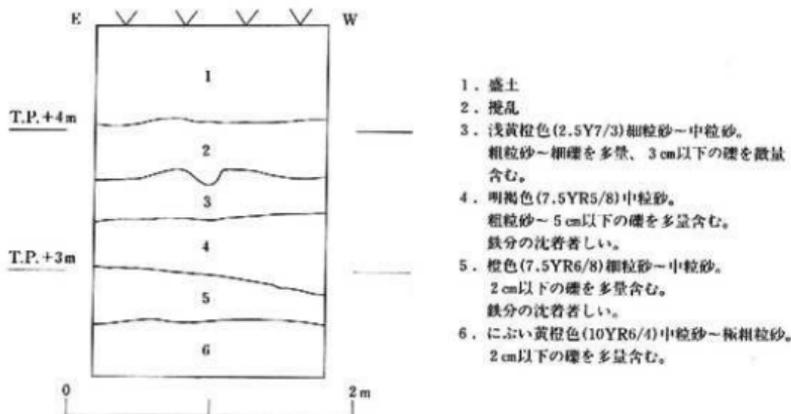
4 C地区の調査概要

東大阪市域の南限にあたる若江南町4丁目地内を幅1.5m前後で延長156m、面積236㎡についてC地区の調査を実施した。調査地は十三街道と第2寝屋川に挟まれた地域であり、南北方向に細長く延びるため、若江遺跡から山賀遺跡にまたがっている。十三街道から南へ30mまでの部分については、その調査概要を昨年度報告済みのため、ここではそこから調査地南端までについて報告する。¹³⁾

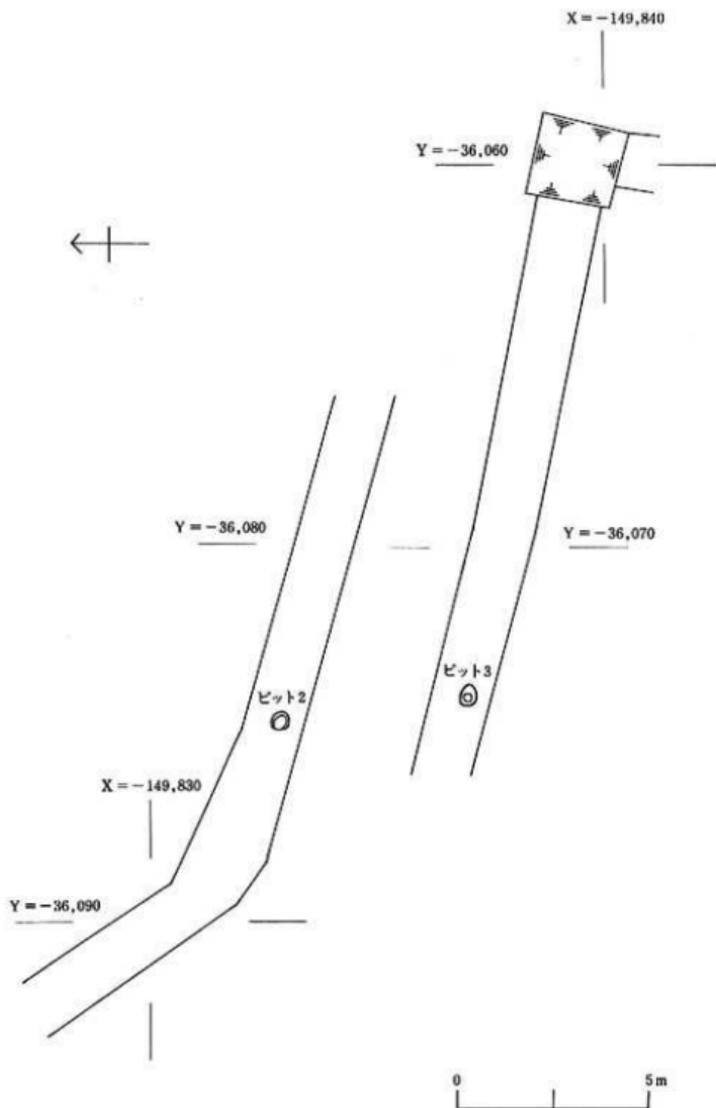
現地表はT.P.4.5~4.8mであり、南の第2寝屋川の堤防に近づくに従い高くなる。調査は下水道管底の地表下2.7m前後まで行なった。地表下0.7~1.5mまでは上水道、下水道、ガス管の地下埋設に伴う攪乱が著しく、このため中世以後の遺物包含層及び遺構面はほとんど削平されている(第14図)。

X=-149890付近より南側では盛土の下のT.P.4.4~3.8mの位置に、ふい黄褐色(10YR4/3)中粒砂~粗粒砂混り粘土層が残存しており、この層の上面で井戸2を検出した。これ以外の遺構は全て、T.P.3.8m以下に堆積する砂礫層の上面で検出した。この砂礫層は調査地全域に分布し、人孔設置部はT.P.2.0mまで調査を行なったが、砂礫層の堆積はさらに下方に続いており、層厚は1.9m以上に達する。この砂礫層は4層に細分できるが、各層から布留式土器が出土するため古墳時代前期に堆積したと考えられ、ローリングを受けた弥生土器I様式から庄内式土器も混入していた。しかし、対応する古墳時代前期の遺構は検出されなかった。

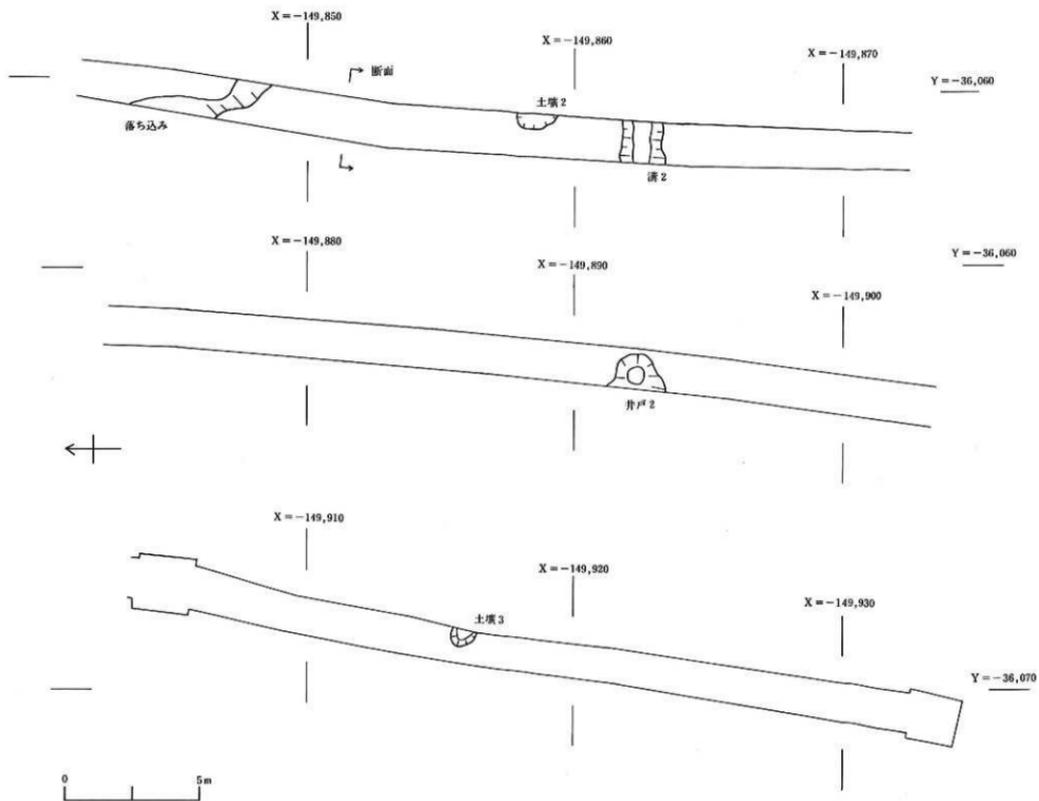
遺構の時期は全て中世で、ピット3基、上墳3基、溝2条、井戸2基、落ち込みを検出した。井戸1、溝1、ピット1、上墳1は昨年度既報告のため省略する(第15・16図)。地下埋設物に伴う攪乱を受けているため検出し得た遺構の数は少なく、いずれも上部を削平された形で残存していた。従って各遺構の深さは検出した残存長であり、本来はこれよりも深いものである。



第14図 若江第47次・山賀第5次C地区土層断面図(S=1/40)



第15図 若江第47次・山賀第5次C地区遺構平面図1 (S=1/150)



第16図 若江第47次・山賀第5次C地区遺構平面図2 (S=1/150)

ビット2は直径45cmの円形を呈し、深さ7cm。埋土は褐灰色(5YR5/1)細礫混り細粒砂～極粗粒砂である。土師器皿・羽釜の細片出土。

ビット3は長径50cm、短径40cmの楕円形を呈し、深さ17cm。埋土は暗褐色(10YR3/4)細礫混り中粒砂～粗粒砂である。土師器、須恵器、瓦の細片出土。

落ち込みは南北6mの範囲に広がっていた。南肩は北西から南東方向に延びるが北肩は擾乱のため確認できなかった。深さは56cm。埋土は褐色(10YR4/4)細礫混りシルトである。土師器、陶器の細片出土。

土壌2は直径約150cmの円形を呈するものと思われ、西側半分が調査地内で検出された。深さは30cm。土壌内には拳大から一片30cm程度までの礫が、およそ40個集積していた。これらの礫には、加工されたものや焼成を受けた痕跡のみられるものはひとつもなかった。砂礫層に掘り込まれた遺構であるため、土留めの役割を果たしたものと思われるが、検出した状態では人為的に整然と配石された様子はなく、詳細は不明である。埋土はにぶい黄色(2.5Y6/3)中粒砂混りシルトであり、細礫を少量含んでいる。備前焼播鉢、土師器、瓦の細片が出土。

溝2は東西方向に延びるもので、調査地とは直交する。幅145～160cm、深さ81cm。断面は開いたJ字形を呈する。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)中粒砂～極粗粒砂混り粘土で、細礫を少量含んでいる。遺物は土師器皿の完形品、備前焼播鉢、瓦器播鉢、弥生土器甕、瓦、砥石が出土。

井戸2は内径56cmの円形に瓦を巡らす。堀方は一部が調査地外へ広がるが、直径150cm程度と思われる。井戸の深さは95cm。上方の58cmには瓦が積み上げられ、下方の37cmには井戸枠は残存していなかった。しかし断面には、板材を枠として用いたと思われる痕跡が観察され、腐朽したか抜き取られたものと思われる。本来この井戸は、上段に瓦積み、下段に木組みもしくは桶組みの枠を持っていたものと考えられる。埋土は井戸内が褐灰色(10YR5/1)細粒砂～中粒砂混りシルトで細礫を少量含んでおり、堀方内は暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂～粗粒砂で2cm以下の礫を多量含んでいる。井戸内からは多量の瓦と土師器皿・羽釜、瓦器椀、白磁碗の細片が出土。

土壌3は短径約80cmの楕円形を呈するものと思われるが、東側のおよそ半分は調査地外へ広がっている。深さは15.5cm。埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂～中粒砂混り粘土で、細礫を少量含んでいる。土師器、須恵器、瓦の細片出土。

5 まとめ

A地区の調査地は十三街道上に位置しているが今回の調査において田街道を確認することはできなかった。調査範囲が狭く、トレンチが道路上に平行しているためと思われる。

また、前述したように遺構、遺物とも少なく、山賀遺跡の北限と考えられる。

C地区の調査では中世以後の遺物包含層、中世の遺構、古墳時代前期の遺物包含層を検出した。中世以後の包含層の削平は著しく、中世の遺構も井戸2を除いては、上部を削平された状態で検出した。遺構は砂礫層を掘り込んでいるため、井戸2は瓦積みの枠を持つ強固な構造であった。土壌2から出土した多量の礫も同様に構造強化のための土留めの役割を果たしたものと

考えられる。

古墳時代前期の包含層は層厚1.9mを超える砂礫層で弥生土器も混入していたが、対応する遺構は検出されなかった。出上遺物は現在も整理作業中であり、その報告は後日に譲りたい。

註)

- (1) 財団法人東大阪市文化財協会「第9章 若江遺跡第47次・山賀遺跡第5次調査」「東大阪市下水道関係発掘調査概要報告—1991年度—」1992
- (2) 財団法人東大阪市文化財協会「瓜生堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報Ⅲ調査の概要2、若江遺跡」『(財)東大阪市文化財協会年報1983年度』1984
- (3) 註1)に同じ

第4章 若江遺跡第48-1次調査概要

1 はじめに

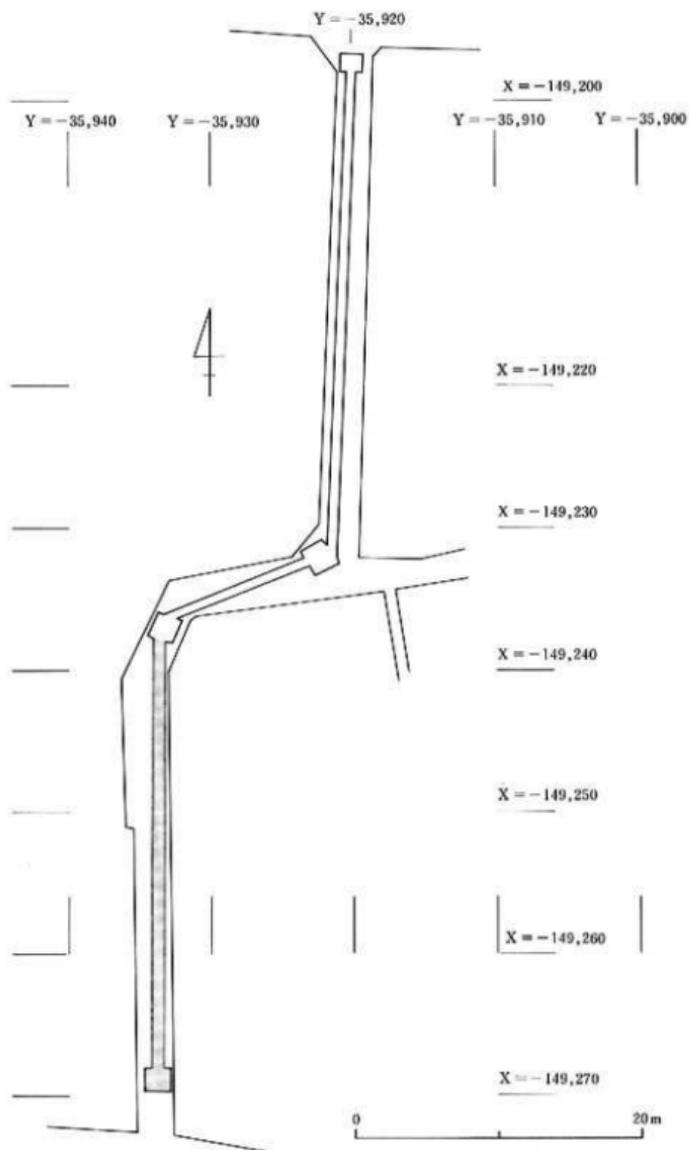
本調査は第109工区下水管渠築造工事に伴うものである。工区は若江遺跡中央部と北端部の2路線に分かれる。このため前者を48-1次、後者を48-2次と仮称し、ここでは48-1次について報告する。整理作業が未了であるが、調査結果の一部を略述するものである。

調査地は東大阪市若江本町4丁目地内の市道である(第17図)。平成2年度に実施した試掘調査では南半部で、表土(アスファルト)直下から約1mにわたり中世遺物包含層と遺構面が確認されていた。しかし北半部には包含層等が確認されなかった。これを受けて北半部は立会調査を、南半部では本調査を実施することとなった。総延長は約80m、幅約80cm、現地表下約2mまでの開削工事に並行して実施した(第18図)。現場調査は中断を含め1992(平成4)年1月18日から3月27日まで行い、本調査面積は約62㎡である。

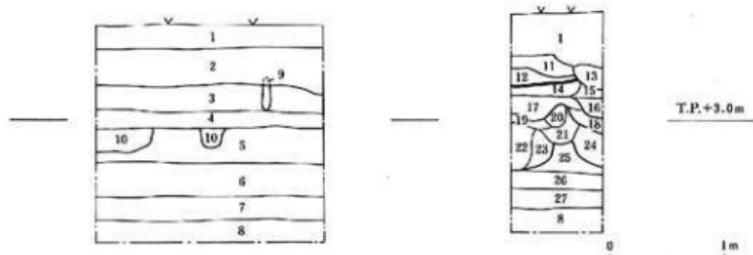
調査単位を長さ約5mとし、調査終了区間ごとに本管の埋設を行う方法をとった。上留めを施しても壁面倒壊のおそれがあるため現場は2日間以内に終了させる必要があり、調査精度を落とさざるをえなかった。掘削には一部重機を用い、中世遺構面以深は土層図を作成したほか平面的な調査は断念した。



第17図 若江第48-1次調査地位置図(S=1/2500)



第18图 若江第48-1次調査区全体图(S=1/400)



1. アスファルト・粘土・旧粘土・擾乱
2. 7.5YR6/4にふい橙色砂混砂質シルト
3. 7.5YR2/1黒色砂混砂質シルト～シルト
4. 10YR3/1黒褐色細砂～砂質シルト
5. 2.5Y8/8黄色シルト質細砂
6. 2.5Y8/8黄色シルト質中粒砂
7. 灰白色細砂～中粒砂
8. 2.5Y8/6黄色中粒砂～砂礫
9. 5YR2/3暗赤色シルト
10. 3層と5層の混合土
11. 2.5Y5/3黄褐色砂混粘質シルト
12. 2.5Y6/6明黄褐色砂混粘質シルト
13. 5Y5/6オリーブ色砂混泥シルト～細砂質シルト
14. 5Y5/3灰オリーブ色砂混粘質シルト～シルト

15. 5Y4/1灰色細砂～シルト
16. 灰と5Y3/1オリーブ灰色灰色シルトの混合土
17. 2.5Y5/6黄褐色シルト混中粒砂
18. 5Y4/1灰色砂混中粒砂～シルト(炭含)
19. 17層に腐植するものしりまじりなし
20. 6Y4/1灰色細砂～中粒砂
21. 5Y5/1灰色砂混粘土
22. 5Y5/2灰オリーブ色砂混粘質シルト
23. 5Y4/1灰色砂混細砂～シルト
24. 2.5Y5/1黄灰色砂混シルト(炭含)
25. 7.5Y5/1灰色砂混中粒砂～砂礫
26. 10Y5/2オリーブ灰色細砂(6層相当)
27. 10YR3/1黒灰色粘土(7層相当)

第19図 若江第48-1次土層断面図(S=1/50)

なお実測の基準には国土座標第VI系を用い、測量作業は国際航業株式会社に委託した。

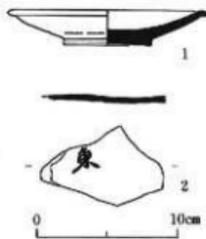
2 調査概要

調査区の北部は近世以降に埋められた溝もしくは落ち込み、あるいは湿地と思われる。底は工事深度より深く明かではない。本管理設後の工事に際して、唐土焼と思われる陶片が採集された。その存在は中世までさかのぼる可能性がある。

調査区中央部の層序は上から、表土(アスファルト)、にふい橙色砂混砂質シルト(近世遺物包含層)、黒色砂混砂質シルト～シルト(中世遺物包含層)、黒褐色細砂～砂質シルト(中世遺物包含層)、黄褐色細砂～砂質シルト(中世遺物包含層)、黄褐色シルト～砂礫層、青灰色粘土～細砂層の順である(第19図)。遺物包含層の層境はそれぞれ遺構面をなし、東西溝、土壇、柱穴等を検出した(第20図)。黒褐色細砂～砂質シルト層上面に遺構が最も多く、柱穴群の深さは8～35cmを測る。柱そのものが残っているものはなかった。遺構から出土した遺物には瓦器、土師皿、黒色土器A類、須恵器、緑軸陶器、墨書土器等がある。瓦類は少なく、軒瓦は軒平瓦が1点出土した。黄褐色細砂～砂質シルト層の下面に凸凹を検出した。遺構とはとらえにくく、本層は整地層と考えられる。黄褐色シルト～砂礫層上面に掘り込まれた土壇から古墳時代前期の高環が出土している。古墳時代の遺構はこの土壇ひとつである。黄褐色シルト～砂礫層からは弥生時代後期から古墳時代前期にかけての上器が出土している。青灰色粘土～細砂層からは遺物の出土をみず、遺構も確認できなかった。中世の遺構や包含層の時期は13世紀頃が中心であろう。

南部の様相は中央部とは異なり、古代、中世の遺物を包含する層から近世陶磁器が出土する。

このことから、本来は中央部と同様な堆積状況であったと考えられる(第19図)。包含層は数層に分層され、それぞれ層境は遺構面をなす。遺構は南北方向の溝のみで、最下面では2条の溝を検出した(第20図)。調査範囲が狭いため疑問は残るが、検出した「溝」は水田の耕作部分に相当し、平坦部は畦畔と思われる。畦畔の肩部からは緑釉陶器皿が出土した。出土した個所は



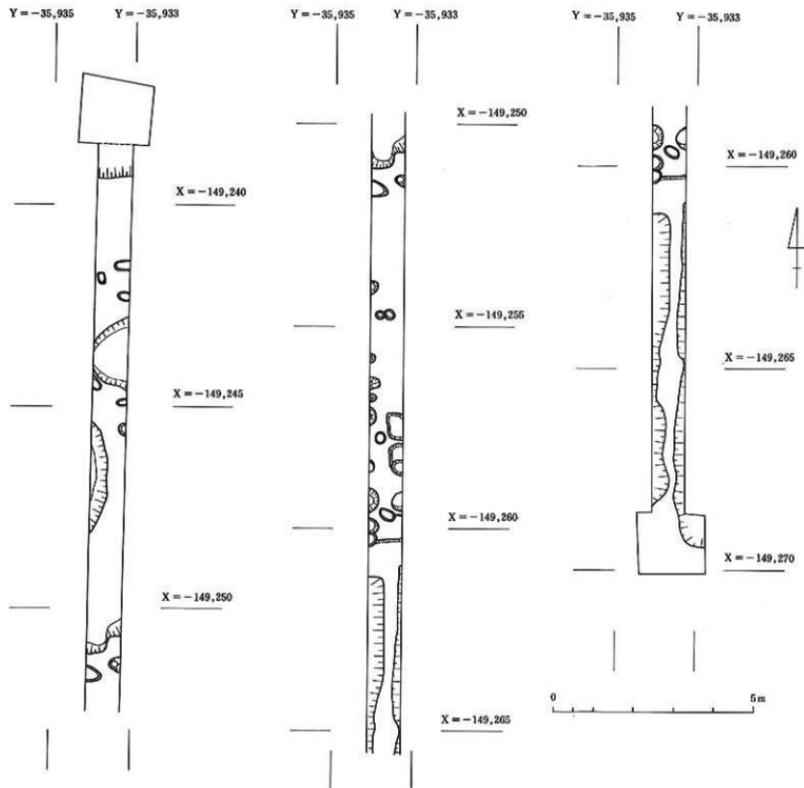
第21図 出土遺物(S=1/4)

以上の石英や長石を含み、やや黄色がかつた灰白色を呈する。いわゆるサクサクとしたものである。釉はうすい黄緑色で、焼成はやや軟質である。美濃産であろうか。墨書土器は土師器の底部外面に「東」と書かれている。おそらく坏であろう。底部片のため法量は不明である。色調はにぶい橙色を呈し、内面はナデ調整、外面には指押さえが残る。焼成等から奈良時代頃のものと思われる。

3 まとめ

今回の調査では良好な中世遺物包含層と遺構面を確認し溝や柱穴、井戸状遺構等を検出した。遺跡の北東辺部に位置する地点であるにもかかわらず、柱穴が多く検出されたことは注目される。若江の中世集落は想定されている範囲よりも北東に広がっていると思われる。

また、後世の遺構にまじった状態であるが緑釉陶器皿や墨書土器等が出土した。実態が不明である若江郡衙や若江寺に関連する遺物であろう。出土した古代の遺物は摩滅が少なく、付近に当該期の遺構が存在すると思われる。これまで突然と郡衙や寺は遺跡の南部に存在すると推定されていたが、北部に所在していた可能性がでてきたといえよう。



第20图 若江第48-1次遺構平面図(S=1/100)

第5章 若江遺跡第48-2次調査報告

1 はじめに

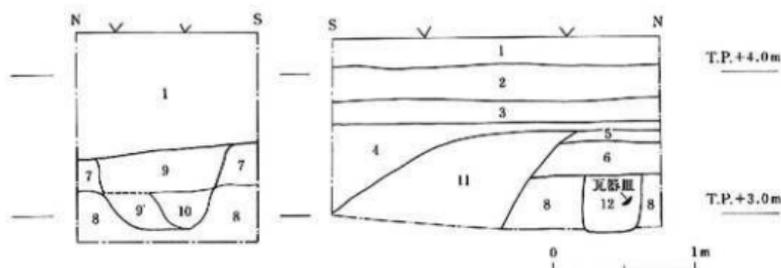
本調査は第109工区下水道管渠築造工事に伴うものである。工区は若江遺跡中央部と北端部の2路線に分かれる。このため前者を48-1次、後者を48-2次と仮称し、ここでは48-2次について報告する。調査地は東大阪市瓜生堂2丁目地内の市道で(第22図)総延長約105m、幅約80cm、現地表下約1.5mまでの開削工事に並行して実施した。現場調査は中断を含め1991(平成4)年2月29日から5月7日まで行い、調査面積は約85㎡である。

調査区は彎状を呈し、東西方向は軽自動車がかろうじて通行できる狭い道路で、本格的調査が不可能であった。南北道路は交通事情のため十分な調査が行えなかった。このため工事掘削に立会い、土層観察を行うとともに遺物採集に努めた。したがって検出した遺構は断面で確認したもので、平面図は断面から作成したものである。

なお本調査は第4章の第48-1次調査と共に平成3年度事業であるが、年度をまたがるため本書に報告するものである。



第22図 若江第48-2次調査地位置図(S=1/2500)



- | | |
|------------------------------------|-------------------------------|
| 1. アスファルト・盛土・旧耕土・攪乱
2. 黄灰色砂質シルト | 7. 2.5Y8/6黄色細砂-砂質シルト |
| 3. 10B/C5/1青灰色砂混砂質シルト | 8. 2.5Y8/6黄色中粒砂-砂礫 |
| 4. 10YR6/3に赤い黄褐色粘質シルト | 9. 7.5YR3/2黄色細砂ブロック混黒褐色粘質シルト |
| 5. 2.5Y5/9黄褐色砂混砂質シルト | 10. 7.5YR2/2黄色細砂ブロック混黒褐色粘質シルト |
| 6. 7.5YR3/1黒褐色粘質シルト | 11. 7.5YR2/2黒色炭混粘土 |
| 7. 2.5Y8/6黄色細砂-砂質シルト | 12. 2.5Y5/4黄褐色砂混砂質シルト |
| | 12. 10YR4/1褐色細砂混砂質シルト-細砂 |

第23図 若江第48-2次遺構断面図(S=1/40)

2 調査概要

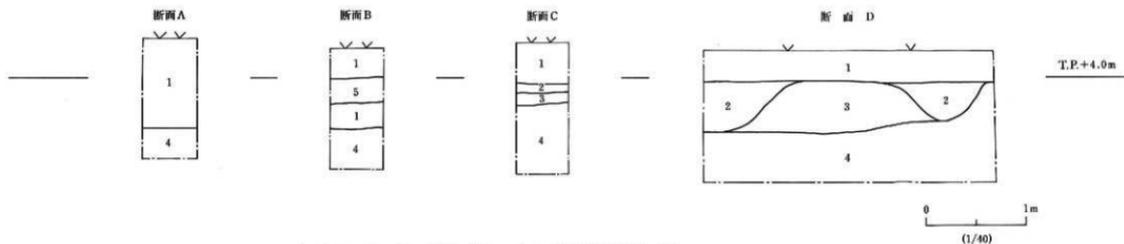
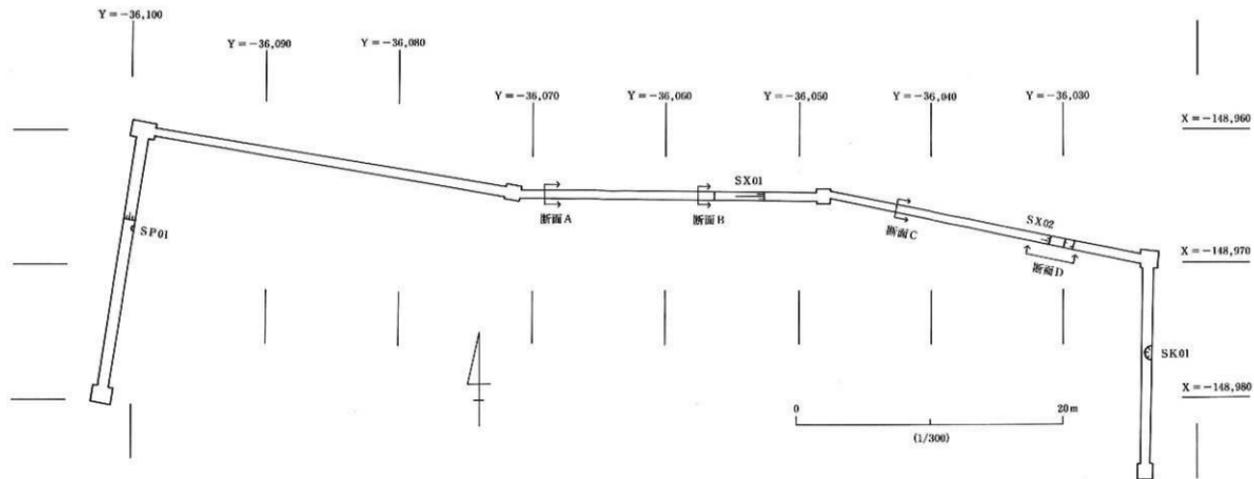
調査区内の基本的な層序は上層からアスファルト、盛土・旧耕土層、灰色細砂～細砂質シルト層、黒褐色シルト混中粒砂層、明黄褐色砂層の順である(第24図)。灰色細砂～細砂質シルト層は攪拌された状況がみられ、一部に鉄分が沈着する。耕作土か床土であったと思われる。遺物は出土しなかった。灰黒褐色シルト混中粒砂層は土師質皿細片を含み、西南部以外では削平されたと思われる。明黄褐色砂層の上部は粒径が小さく、下部では大きい。地点によっては明瞭に細砂層と砂礫層に分けられる。朝顔型埴輪片と須恵器片が出土し(第25図)、古墳時代後半の流水による堆積と考えられる。上面で遺構を検出した。

検出した遺構には土壇、ピット、落ち込み等がある(第23・24・25図)。土壇(SK01)は南北約90cm、深さ約60cmを測るもので12世紀中頃の和泉型瓦器碗⁽¹⁾と土師質皿が出土した。瓦器碗は完形で、土壇下部に口縁部を上に向けて埋置してあったと思われる。機械によって掘削したために破損したものである。ピット(SP01)は径約40cm、深さ約80cmを測る。大和型瓦器碗、瓦器皿、土師質皿が出土している。12世紀後半から13世紀前半頃に埋まったと思われる。埋土に柱痕跡のような土質の違いはみられなかった。落ち込み(SX01・02)から遺物は出土しなかったが、旧耕土直下にあるため近世以降の遺構と思われる。河内平野中心部で現在も見られる掻き上げ田の一部とも考えられる。

遺物は図示したほかに近世から近代にかけての瓦や伊万里焼が出土した。いずれも盛土層や攪乱層から採集したものである。図示した遺物については表を参照されたい。

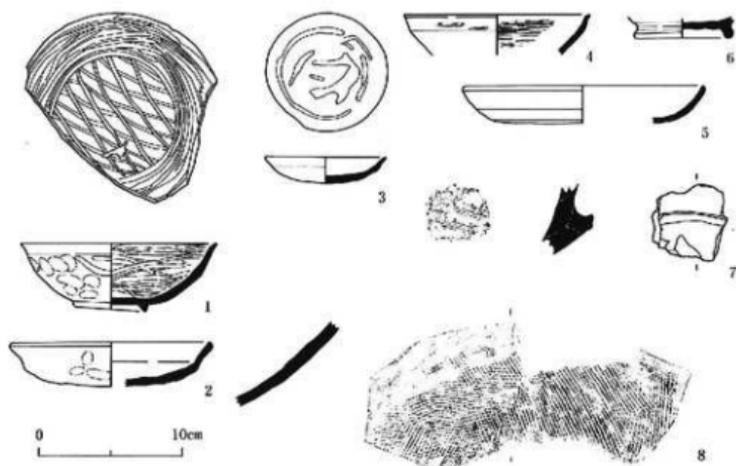
3 まとめ

調査地点付近は遺物包含層がほとんど確認されない地域であった。今回の調査で遺物包含層



1. アスファルト・盛土・田耕土・境乱
2. 7.5Y4/1灰色砂混シルト
3. 5Y6/1灰色細砂-細砂質シルト
4. 2.5Y6/6明黄褐色細砂-砂礫
5. 10YR4/1褐灰色砂混砂質シルト

第24図 若江第48-2次調査地全体図及び土層図(S=1/300・1/40)



第25図 若江第48-2次出土遺物(S=1/4)

が本来は存在しており、遺構も遺存していることが明らかとなった。検出された遺構は中世前半のもので若江遺跡の中世集落はこれまで考えられていたよりも北方に範囲が広がるものと思われる。

ピットから大和型の瓦器碗が出土した。西ノ辻遺跡などの生駒山西麓部の遺跡ではめずらしいものではないが、平野部の遺跡からの出土は多くない。若江遺跡での出土例も少なく、これまでの調査で出土したものをすべてあわせても整理箱2箱程度であろう。量としては少ないが、大和型瓦器碗の流通した範囲に含まれることは疑いない。平野部の遺跡群のなかで大和国と河内国を結ぶ十三街道が通る若江遺跡にのみ大和型が多く出土する現象であるか早急に検討する必要がある。

一方、若江城に関する遺構や遺物は確認できなかった。南へ約120m離れた第28次調査でも建物跡等の城関係の遺構が検出されていない。このため当地点までは城域(居住域)が及んでいなかったと推定される。

以上のように立会調査というべき小さな調査であった。通常の発掘調査に較べると面積に対する時間や手間、経費等の面でマイナス的な要素が目立つように思われる。しかし、遺跡に関する重要な資料を得ることができた。本書に納められている他の調査成果等を併せ検討を加えることにより、総合的に若江遺跡を解明する基礎的な資料となると思われる。今後の発掘調査や整理調査の進展を期待したい。

図	番品	種類・器種	口径×器高	凶化	色調(外面)	出土位置	備考
25	1	瓦器碗	13.2×4.8	合成	暗青灰色	SK01	和泉型
25	2	土師質皿	13.6×・	反転	にぶい黄橙色	SK01	
25	3	瓦器皿	8.6×1.9	完形	暗灰色	SP01	内面摩耗顕著
25	4	瓦器碗	12.8×・	反転	灰色	SP01	大和型
25	5	土師質皿	16.7×・	反転	にぶい橙色	SP01	口縁部煤付着
25	6	黒色土器	・×・	完形	浅黄橙色	盛土層	A類(内黒)
25	7	朝顔型埴輪	・×・	・	にぶい橙色	黄色砂層	外面に赤色顔料
25	8	須恵器甕	・×・	・	灰色	黄色砂層	

第3表 若江第48-2次出土遺物一覧表

※・は計測不可を表し、完形は凶化部分が遺存、合成は一部を反転復原し凶化したもの。

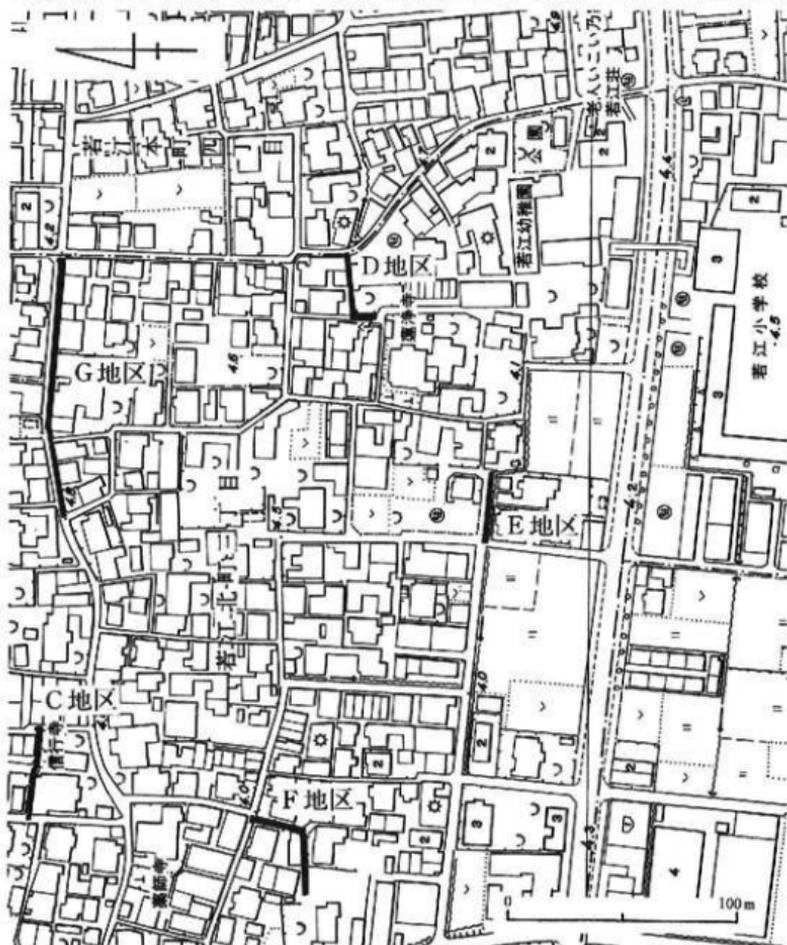
註)

- (1) 橋本久和「高槻市文化財調査報告書第13冊上牧遺跡発掘調査報告書」高槻市教育委員会 1980
- (2) 財団法人東大阪市文化財協会「若江遺跡第28次発掘調査概報」『(財)東大阪市文化財協会概報集 1988年度』1989

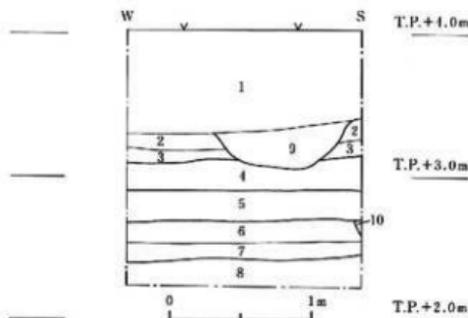
第6章 若江遺跡第50-1次調査概要

1 はじめに

本調査は第312工区下水管渠築造工事に伴うものである。工区は若江遺跡北半部の各所に分かれる。地点ごとにA地区、B地区、C地区、D地区、E地区、F地区、G地区、H地区と仮称



第26図 若江第50-1次調査地位置図(S=1/2500)



1. 表土・盛土
2. 5Y7/4浅黄色砂混砂質シルト
3. 2.5Y6/3にふい黄色砂混砂質シルト
4. 10YR6/3にふい黄色砂混砂質シルト
5. 2.5Y5/4黄褐色砂混粘質シルト
6. 5Y5/4オリーブ色細砂-粘質シルト
7. 7.5Y4/6灰色粘土
8. 2.5Y8/6黄色細砂-中粒砂
9. 遺構埋土
10. 汚れた6層(遺構埋土)

第27図 若江第50-1次C地区土層図(S=1/40)

方法をとった。近年の盛土層や攪乱層を機械によって掘削し、以下の各遺物包含層上面を精査し、層ごとに人力で掘削した。実測の基準には国土座標第VI系を用い、測量作業は国際航業株式会社へ委託した。

その結果、18世紀以降に埋められたと考えられる大規模な落ち込みや、堀をはじめとする15から16世紀にかけての若江城に関係すると思われる遺構、12から13世紀にかけての中世集落に関する遺構を検出することができた。遺物整理等の作業に入っていないため、今回は各地区の概要を記すにとどめ、次年度以降に改めて報告したい。なお平面図のうち国土座標値が記入されていない場合の方位は大まかな北を示すものである。

2 調査概要

1) C地区(第27・28図)

本地区は信行寺に北接する東西道路上に位置する。調査区の西の南北道路は近年に埋められた水路で、橋がかかっていたとのことである。調査区内の層位は地点によって色調や上質が異なるものの連続性によって基本的に以下の6層に分けられる。なお()内の番号は第27図の土層番号に対応する。

第1層 アスファルト、盛上層(1)。

第2層 黄色砂混砂質シルト(2・3)。近世の遺物を含み、上面で遺構を検出した。

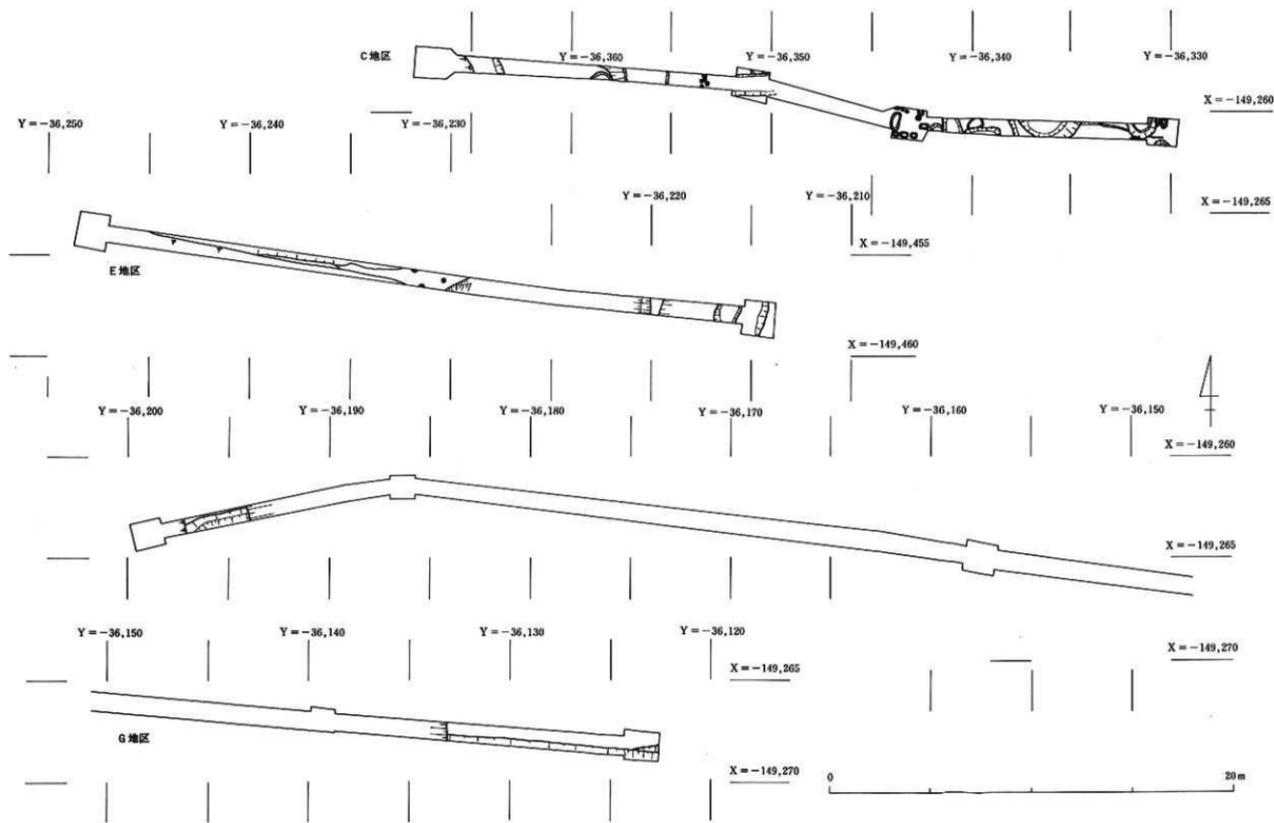
第3層 にふい黄褐色砂混砂質シルト(4)。中世の遺物を含み、上面で遺構を検出した。

第4層 黄褐色砂混粘質シルト(5)。中世の遺物を含む。遺構は検出なかったが、第3層と

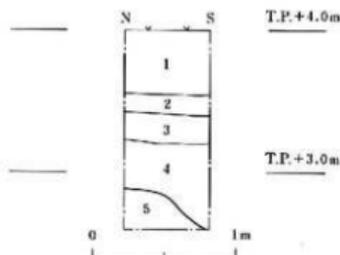
することとした。A地区とB地区は美女堂川の川底が埋設管底と同じ深さであったため、調査を必要としなかった。また、H地区は担当者が異なるため50-2次調査として次章に概要を報告する。

CからG地区は東大阪市若江北町3丁目地内の市道である(第26図)。総延長は約240m、幅約80cm、現地表下約2mまでの開削工事に並行して実施した。現場調査は中断を含め1992(平成4)年6月19日から10月29日まで行い、本調査面積は約240㎡である。

調査単位を長さ約5mとし、調査終了区間ごとに本管の埋設を行う方



第28图 若江第50-1次C·E·G地区平面图(S=1/200)



1. 表土・盛土・攪乱
2. 5YR1.7/1黒色砂泥結核シルト
3. 10G6/1緑灰色シルト混粘土(黒色粘土ブロック含)
4. 10G6/1緑灰色粘土-シルト
5. 10Y4/1灰色中粒砂

第29図 D地区土層図(S=1/40)

の層境は明瞭であった。

第5層 灰色細砂から粘土(6・7)。中世の遺物を含み、上面で遺構を検出した。

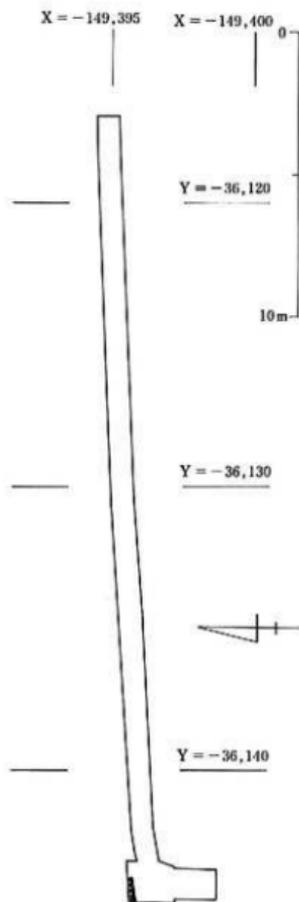
第6層 黄色細砂から中粒砂(8)。遺物は出土しなかったが、これまでの調査から古墳時代頃の流水による堆積層と考えられる。

第2層から第5層は主体となる上以外に粘土や砂のブロック、炭等を含み整地層と思われる。第4層と第6層の上面は遺構が存在する可能性がある。

検出された遺構には土壇や溝、ビット等がある。いずれも一部を確認したにすぎず、規模や性格を明らかにできるものはほとんどない。中央部の第5層上面で検出した東西溝は幅約1m、深さ約30cmを測り、なんらかを区画する溝とも想像される。

2) D地区(第29・30図)

本地区は瓦ダメ遺構が検出された第5次調査地から北へ約50m、若江道跡第39次調査区⁽¹⁾に接続する東西路線である。現在は道路となっているが、近年までは東西方向の水路であった。調査は東から西へむかって進め、蓮城寺の門前は既設管の入替えに立会調査を行った。



第30図 D地区平面図(S=1/200)

調査区内の層位は一律ではない。東半部では上から、近代の堆積と思われる黒色粘質シルト層、伊万里焼等の近世遺物を包含する青灰色シルトから粘土層、緑灰色から黒灰色の中粒砂層の順に堆積していた。中粒砂層は瓦器等の中世遺物を含む。中粒砂層上面で北から南へ落ちる傾斜を検出し、この傾斜が砂層をベースとした水路の肩部であろうと思われた。このため砂層上面を追いつつ東から西へ調査を進めていったが、中央部付近から面的にとらえることが不可能となった。中粒砂層はシルトや粘土が入り混じった状態に変化し、中世の包含層と思われた砂層からは大量の土師質火鉢や磁器、陶器が出土した。ボーリングステッキによれば調査の深度より1m以上続く。

以上のことから本調査区は近世の水路の中に全体が納まった形であることが推定される。東部でみられた層位は水路中の堆積の一部であり、水路底まで掘削するに至らなかったため遺構のように観察されたものと思われる。

なお西端部では杭と板で作られた護岸施設を検出した。板の下場が中粒砂層の上面付近までに据えられていることから、近世のある時期に改修を加えたものと考えられる。

3) E地区(第28・31図)

本地区は府道大阪東大阪線から北へ約50mの地点で若江遺跡第6次調査の第9ピットに接続する東西方向の路線である。



第31図 若江第50-1次E地区土層図(S=1/40)

層位は上からアスファルト、盛土、灰黄褐色砂混粘質シルト、黄色細砂層、粘土層、暗緑灰色砂層の順であった。

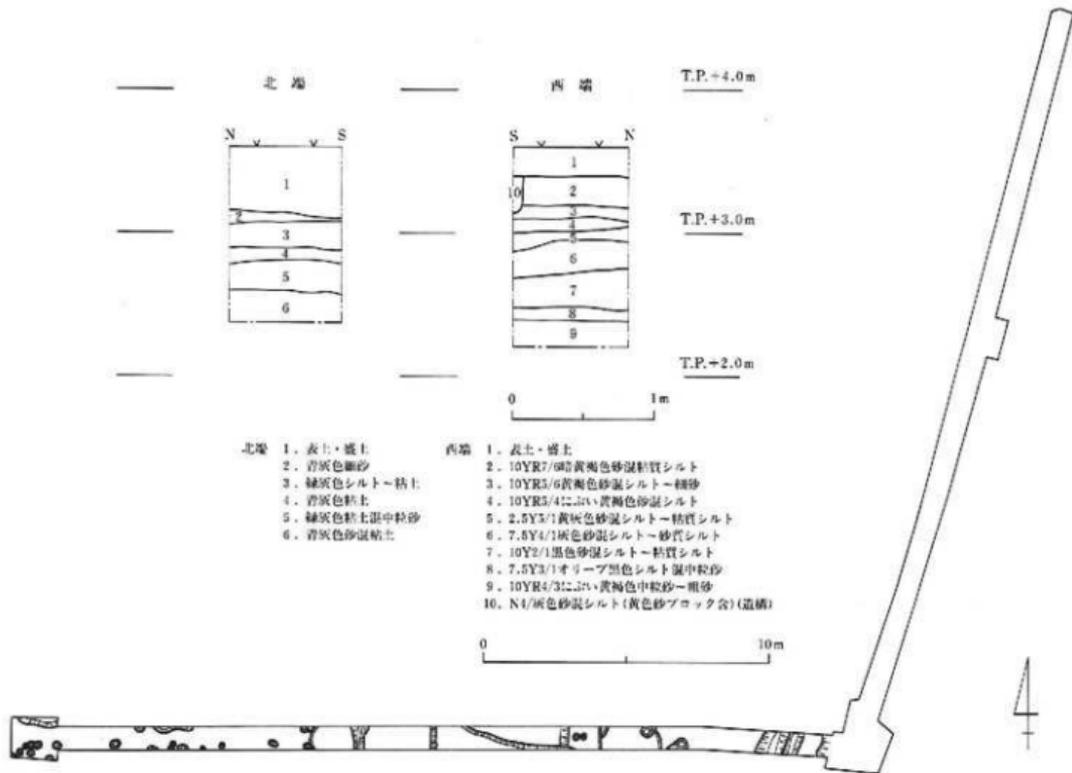
部分的に旧耕作土層や旧床上層と考えられる灰色褐色あるいは青灰色の粘質シルトや褐灰色砂質シルトがみられる。

灰黄褐色砂混粘質シルトは中世遺物を含む包含層であり、黄色細砂層上面で遺構を検出した。

黄色細砂層以下の各層は流水による堆積と思われる。遺物は出土しなかった。

遺構は溝や土壇、落ち込み等を検出した。調査区西部の東西溝は第9ピットで検出されている溝3の延長と思われる。

第32図 若江第50-1次F地区土層図及V平面図(S=1/40・1/200)



土師質皿細片等が出土した。調査区東部の南北溝は府道大阪東大阪線の拡幅に伴う調査等で確認されている若江城の堀の延長と考えられる。東肩上部から土師質皿が完形で出土している。

4) F地区(第32図)

本地区は信行寺の南約110mの地点である。調査区は逆L字状を呈し、南北道路は近代の水路を埋めたものであった。東西道路部分では中世から近世までの遺物包含層が遺存し、多くの遺構が検出された。基本的な層位は上層から以下のとおりであった。()内の番号は第32図中の土層番号に対応する。

第1層 アスファルト・盛土(1)。

第2層 暗黄褐色砂混粘質シルト(2)。近世の遺物を含み、上面で遺構を検出した。

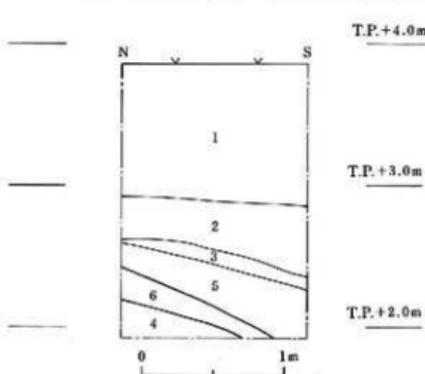
第3層 黄褐色砂混シルト～細砂(3・4)。中世の遺物を含む。第2層とともに東では薄く、西では厚く堆積している。近世の整地層である可能性がある。

第4層 黄灰色砂混シルト～粘質シルト(5・6)。中世の遺物を含み、上面で遺構を検出した。

第5層 黒色砂混シルト～粘質シルト(7)。中世の遺物を含み、上面で遺構を検出した。

第6層 オリブ黒色シルト混中粒砂(8)。中世の遺物を含み、上面で遺構を検出した。本層は上の第7層と下の第9層が混合した状態で、整地層と考えられる。

第7層 黄色中粒砂から粗砂(9)。遺物は出土しなかったが、これまでの調査から古墳時代頃の流水による堆積層と考えられる。上面で遺構を検出した。



1. 表土・盛土・擾乱
2. 7.5GY4/1暗緑灰色細砂～シルト
3. 10GY2/1緑黒色シルト～粘土
4. 10Y4/1灰色砂混粘土
5. 6GY1/1暗オリブ灰色細砂～中粒砂(遺構)
6. 7.5GY4/1暗オリブ砂混粘土(遺構)

第33図 若江第50-1次G地区土層図(S=1/40)

第4層以下で検出された遺構には溝や土壇、柱穴等がある。東部の南北溝のひとつは断面がV字状を呈する。幅約50cm、深さ約30cmを測る。

土壇のうちで全体の形状を知ることができたものはなく、性格等は不明である。柱穴のなかには柱が遺存しているものがあるが、建物に復原できたものはない。これらの遺構の埋上からは13世紀頃の瓦器や土師質皿が出土しており、中世前半のものと考えられる。

5) G地区(第33・28図)

本地区は若江遺跡第39次調査の北端に接続する東西路線である。既設の排水管のため深さ約1mは擾乱されていた。基本的な層位は上層から、アスファルト、

採集された土器は甕が1点である。口径約15.0cm、器高約16.7cm以上を測り、やや縦長の肩が張る球形の体部から外反する口縁部を持つ。底部は欠損している。おそらく小さな平底あるいは丸みを帯びた尖り底であろう。欠損部以外は完全に残っているが全体にやや摩耗している。岡の体部下半は反転合成している。外面下半に黒斑がみられ、内面には煤が付着している。

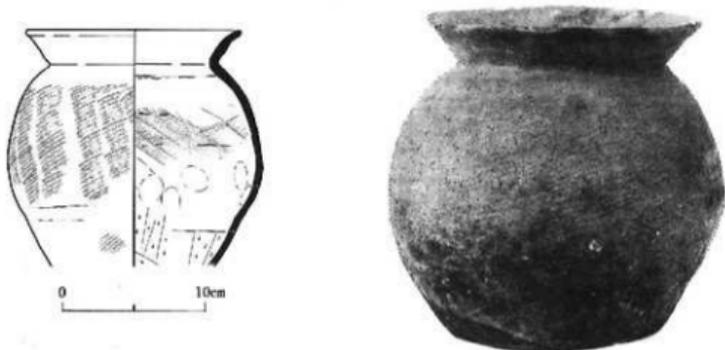
体部外面にはタタキ目を残し、下部と上半部は方向が異なる。内面は下部をけずりで、上半部はけずり後、細かなはけで調整している。口縁はナデによってしあげる。体部下部と上部、体部と口縁の接合痕は明瞭で、下部には指頭痕がみられる。底部製作後に約3cmの粘土を積み重ねて体部を製作したことがうかがわれる。胎土には1mm以下の石英、長石、雲母、角閃石等が多量に含まれる。色調は灰黄褐色を呈し、土師的に良好に焼かれている。以上の特徴から出土した土器は生駒山西麓産の弥生時代後期から古墳時代初頭のものと考えられる。

土器が出土した層は瓜生堂遺跡第34次調査で報告の第6層、暗灰色中・粗粒砂層と想像される⁹⁾。調査では堆積時期を知る資料が得られていなかった。今回採集された土器は砂層の時期を知る傍証となるものである。

本尾ではあるが土器を寄贈いただいた金鉄屎土木建設諸氏に記して謝意を表したい。

註)

- (1) 未報告
- (2) 東大阪市教育委員会『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報15若江寺跡・若江城跡』1975
- (3) 東大阪市遺跡保護調査会『若江遺跡・山賀遺跡発掘調査概報』『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集1980年度』1981
- (4) 東大阪市遺跡保護調査会『若江遺跡発掘調査報告書I遺構編』1982他
- (5) 財団法人東大阪市文化財協会『瓜生堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報田調査の概要1.瓜生堂遺跡9)第9トレンチ』(財)東大阪市文化財協会年報1983年度』1984



第35図 採集された土器(S=1/4)

第7章 若江遺跡第50-2次調査概要

1 はじめに

若江遺跡の第50次発掘調査で、便宜上H地区と称している地点は、若江北町3丁目にあたる。ちょうど若江小学校の正門から府道大阪東大阪線(四条長堂線)を隔てて北方へ約100mの地点で、蓮浄寺の西側の南北道と南側の東西道にあたる。今回の調査は、その道路下に下水管を埋設する工事に伴い埋蔵文化財の発掘調査を実施したものである(第36図)。

調査の方法は、下水管1本分(長さ約4m・幅約1m・深さ約1m)を1区画として、調査地をH-1からH-22までの22区画に地区割し、およそ1日1区画の工程で調査をおこなった。

調査に伴う掘削は、アスファルトおよび攪乱層を機械によって掘削し、それ以下の遺物包含層は人力によって掘削した。



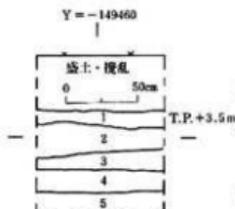
第36図 若江第50-2次調査地位置図(S=1/2500)

2 調査概要

1) 基本層序(第37図)

盛土・攪乱層

- 第1層 ぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂(細礫をやや含む)
- 第2層 灰色(5Y5/1)細粒砂混極細粒砂(極粗粒砂をやや含む)
- 第3層 暗青灰色(5BG4/1)細粒砂混極細粒砂(極粗粒砂をやや含む)
- 第4層 オリーブ黒色(10Y3/2)細粒砂混極細粒砂(中粒砂をやや含む)
- 第5層 緑灰色(5G5/1)細粒砂混極細粒砂



第37図 基本層序

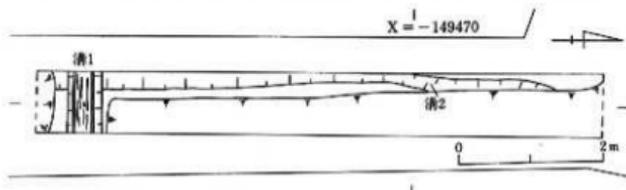
2) 遺構

遺構面は多いところで4面、少ないところでは1面を確認している。いずれも近世の遺構面である。遺構の密度は全体的な傾向として、北へゆくほど薄くなる。

主な遺構としては、H-4・H-5区第2層上面で木樋を検出した(第38図)。この木樋は、一本を半裁して中をくり抜いて設置したもので、幅約30cm、長さ80cm以上を測る。この木樋を埋設するための溝1

は、東西方向の溝でトレンチに直交し、幅50cm、長さは80cm以上を測る。

その他に柱穴1~25を検出した。いずれも直径10~20cm、深さ5~10cmである。



第38図 若江第50-2次遺構平面図(S=1/80)

3) 遺物

出土遺物については現在整理途中であり、次回にその概要を報告することにした。

3 まとめ

若江遺跡の調査も今回で50次を数える。今までの調査の成果によって、少しずつこの遺跡の全容も明らかになって来たと思われる。とくに今回の調査地点は、かつての若江城域の中と推定される重要な地域であった。しかし、今回の調査では、若江城関係の遺構を確認することは出来なかった。今後の調査成果に期待したい。

第8章 若江遺跡第51次調査概要

1 はじめに

今回発掘を実施した調査地は、若江本町4丁目地内に位置する市道上の下水管理設部分である。合計8本の市道を調査し、便宜上AからH地区まで地区割りをおこなった(第39図)。

今回おこなった調査地の総延長は約475mで、調査期間は1992(平成4)年7月27日から1993年(平成5)年5月11日までを要した。現地表面はT.P.+4.0m前後を測る。発掘は機械により舗装および盛上部分を除去した後、人力により堆積層内に含まれる遺物を採取し、併せて遺構の有無を調べながら工事最深部までを掘削した。

現在も遺物整理作業は継続中であるため、今回はA～D地区の概要のみを報告することとし、詳細は後日に譲りたい。



第39図 若江第51次調査地位位置図(S=1/2500)

2 調査概要

1) A地区

幅約1m、総長90mで、現地表面はT.P.+4.0m前後を測る。現地表面から1.6~2.0mまで掘削をおこなった。層位は大きく11層に分かれ、以下にその概略を述べることにする(第40・41図)。

第1層 盛上、攪乱。

第2層 暗褐色(10YR3/3)細粒砂。瓦、陶磁器が出土している。

第3層 ぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂。瓦、陶磁器、土師器等が出土している。

第4層 灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂。溝等を検出した。近世の遺構面と考えられる。

第5層 暗オリーブ灰色(5GY3/1)細粒砂。

第6層 暗褐色(10YR3/4)粘土混じり細粒砂。土師器、瓦質摺鉢等が出土している。

第7層 黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂。土師器、瓦器、羽釜等が出土している。

第8層 暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘質細粒砂。

第9層 褐色(10YR4/4)細粒砂~中粒砂。場所によりシルト層となる。溝等を検出しており、中世の遺構面と考えられる。

第10層 灰色(7.5Y4/1)細粒砂。

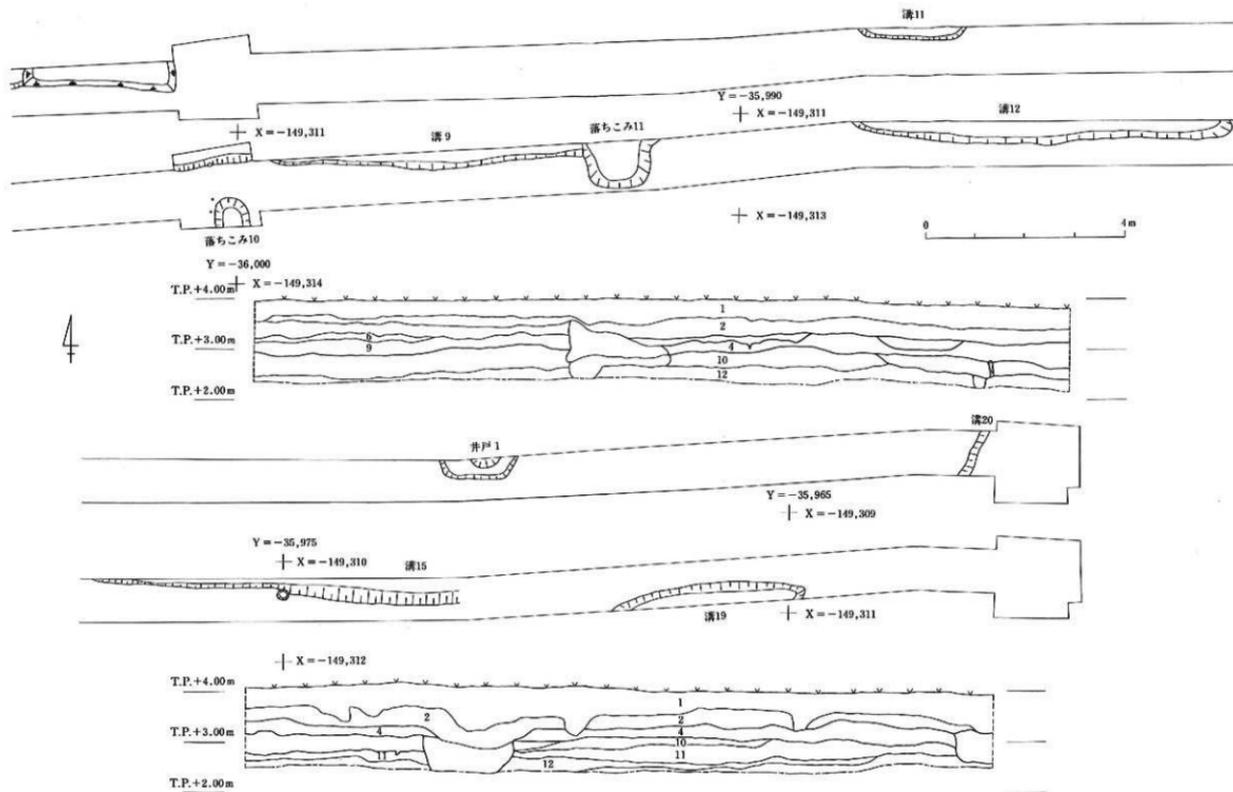
第11層 灰オリーブ色(7.5Y4/2)~暗緑灰色(7.5GY4/1)粘土。場所により、粘土と細粒砂の互層が見られ、またシルト層となるところもある。シルト層には植物遺体を含む個所が見られる。古墳時代の甕、壺、器台などが出土している。

以上が各層の概略であるが、遺構面は近世と中世の2面を確認することが出来た。なお、近世の遺構面は西端においては確認されていない。

近世の遺構は溝、井戸、落ち込みが検出されており、土師器、瓦、陶磁器等が出土している。溝11からは寛永通宝も出土している。また、井戸1は上段、下段とも幅8cm、長さ35cm前後の板材を枠組みしたものである。井戸を埋める際に多量の瓦や石を使用したようである。掘削の深さに限界があるため完掘できずそのため、遺物量は少量である。

中世の遺構は土壇、溝、落ち込み、ピット等が検出されている。土壇2からは土師器皿、瓦器碗が良好な状態で出土している。幅約1.2mを測り北側へ落ちている。溝2は調査区の西端で検出されており、確認できたものは溝の南肩である。幅は広いところで90cmを測るが攪乱および調査区の範囲等から全体の様相は不明である。落ち込み2・3からは羽釜、土師器、瓦器等が出土している。ピット1・2・3はいづれも直径10cm前後のもので土師器片が出土している。溝5は東西に走る溝の北肩で、段を持つものである。確認できた長さは8.9m、幅は最大で80cmを測る。溝6からは羽釜、瓦質摺鉢、土師皿が出土している。溝15は東西に走る溝の南肩で、確認できた長さは7.5m、幅は30~50cmである。土師器、瓦器等が出土している。

A地区においては溝の検出が比較的多くみられたが、狭小な調査区や攪乱等の理由から詳細は明らかではない。



第41図 若江第51次A地区遺構平面図・土層断面図2 (S=1/80)

2) B地区

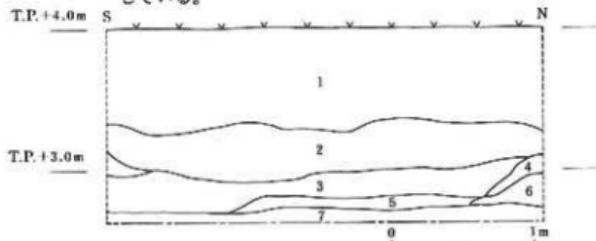
幅0.8m、総長60mで、現地表面はT.P.+4.0m前後を測る。現地表面から1.3mまで掘削をおこなったが、G.L.から1mまで水道管等の擾乱を受けている。また、地層の堆積は北部と南部では若干様相を異にする。以下に北部と南部に分けて層位の概略を述べる(第42図)。

北部

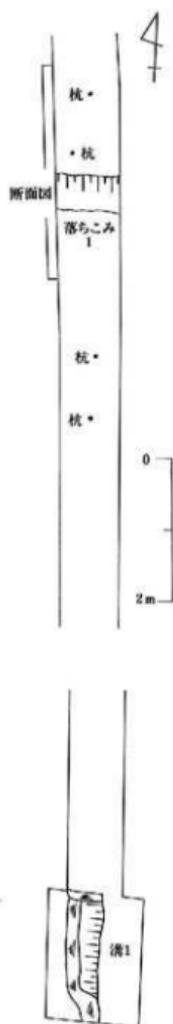
- 第1層 盛土、攪乱。
- 第2層 オリーブ黒色(10Y3/1)粘質細粒砂。瓦片、陶磁器片が出上している。
- 第3層 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)粘質極細粒砂。土師器片、瓦器片が出土している。
- 第4層 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)極細粒砂。
- 第5層 オリーブ黒色(10Y3/1)シルト混じり粘土。土師器片、須恵器片が出土している。杭列を伴う落ち込み1が検出されている。
- 第6層 暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土混じりシルト～細粒砂。

南部

- 第1層 盛土、攪乱。
- 第2層 暗褐色(10YR3/4)粘土混じり細粒砂～中粒砂。土師器片、瓦器片が出上している。溝の肩が検出された。
- 第3層 濃い黄褐色(10YR4/3)中粒砂。土師器片、瓦器片が出土している。
- 第4層 黄灰色(2.5Y5/1)中粒砂。土師器片、瓦器片が出土している。
- 第5層 灰オリーブ色(5Y5/2)粘土。
- 第6層 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト混じり細粒砂。
- 第7層 オリーブ黒色(5GY2/1)粘土。庄内～布留式の甕が出土している。



第42図 若江第51次B地区西壁土層断面図(S=1/40)



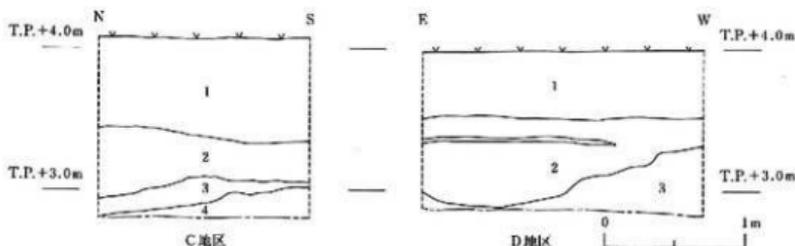
第43図 B地区平面図

遺構は北部において4層上面で杭列を伴う落ち込み1を検出した。杭は合計7本検出されている。また、南部は北部に比べて擾乱による削平を受けていないため、中世の遺構面が確認できた。しかし検出された溝の肩は既設管により削平されているため詳細は不明である(第43図)。

3) C地区・D地区

C地区、D地区ともに幅0.6m、総長30mで、現地表面はT.P.+4.0m前後を測る。現地表面から1.2mまで掘削をおこなったがG.L.から0.6m~0.7mまで既設管等の擾乱を受けている。調査地内の擾乱が激しいことからおもに断面の観察をおこなった。

C地区の擾乱の下層は青灰色粘土層、青灰色粘質細粒砂層、灰色粘土層が堆積している。またD地区の擾乱の下層も青灰色粘土層、青灰色極細粒砂が堆積しているため、ともに近世以降の水路と考えられる(第44図)。



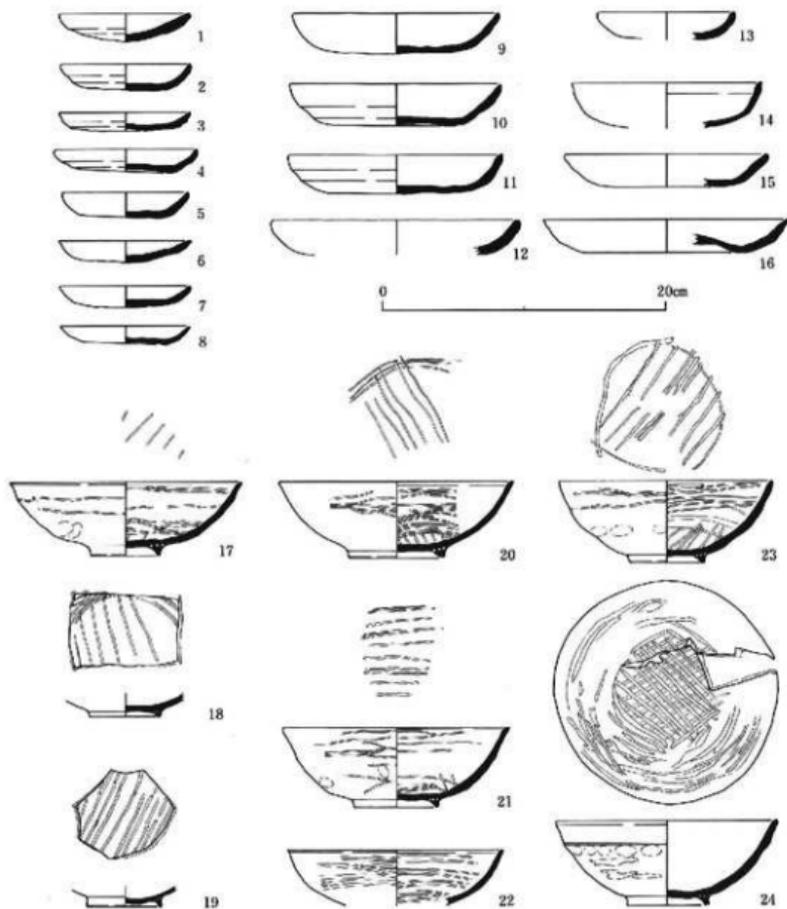
第44図 若江第51次C・D地区土層断面図(S=1/40)

3 出土遺物

今回の調査では、弥生時代から近世までの遺物が出土している。ここではA地区の落ち込み2の遺物について述べることにする。落ち込み2からは土師器、瓦器が出土している(第45図)。

1~16は土師器皿である。白色系統の土師皿は8のみでそれ以外は褐色系統である。6・13は中間色系と思われる。1は体部に施した2回のヨコナデによって2段に屈曲し、やや閉き気味に口縁部に至る。端部は丸くおさめる。口縁部には煤が付着しており燈明皿としての使用が考えられる。また、製作時の粘土の接合痕が顕著に残っており、製作技法を知る上で良い資料と思われる。2・3・4は体部に施した2回のヨコナデによって2段に屈曲し上段の屈曲からほぼ直立して口縁部に至るものである。11は口径15cmを測る大皿で体部に施した2回のヨコナデによって2段に屈曲するものである。5・7は2段の屈曲が不明瞭である。9は口径14.4cm、10は口径14.8cmを測る大皿で2段の屈曲が不明瞭なものである。2・5は製作時の粘土の接合痕が見られる。6はやや閉き気味に口縁部に至り、端部は外面に折り返して丸くおさめている。

17~24は瓦器碗で、いづれも和泉型である。17は外面のヘラミガキが簡略化され体部にはエビオサエが見られる。口縁部外面は強いナデ調整のため、やや外反している。端部はやや尖り気味である。内面は粗いヘラミガキを施し、並行線の暗文を有するが、見込み部分のほとんど

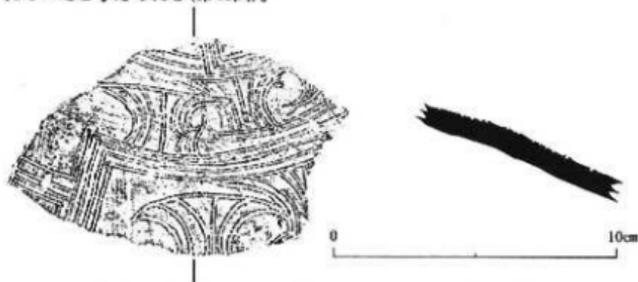


第45図 若江第51次A地区落ち込み2出土遺物実測図(S=1/4)

が欠落している。そのため後から高台をはりつけた製作工程が確認できる資料である。18・19は底部のみで、見込みに並行線の暗文を有す。19の高台は厚くしっかりしている。20は体部はゆるやかに立ち上がり、外面に粗いヘラミガキを施す。内面には密なヘラミガキを施し見込みに並行線の暗文を有す。高台はやや作りが甘くなる。21は口縁部外面に粗いヘラミガキを施している。体部にはユビオサエが見られる。内面のヘラミガキは密である。また見込みに細い並行線の暗文を施す。器形は若干歪み、断面三角形の高台をはりつけている。22は破片で、内外面ともヘラミガキは簡略化されている。また口縁部外面にはヨコナデが見られる。23は体部

はゆるやかに立ち上がり、器形は若干歪む。外面のヘラミガキは簡略化されているが内面のヘラミガキは密である。見込みには明瞭な並行線の暗文を有す。断面三角形の高台をはりつけている。24は均整のとれた器形で体部はゆるやかに立ち上がる。器壁も厚く、外面にはやや粗いが3単位のヘラミガキが施されている。口縁部外面は丁寧なナデ調整がおこなわれ、端部は丸くおさめている。見込みには太い斜め格子状の暗文を有す。断面三角形の高台をはりつけている。以上のことから考えると、これ以外の瓦器碗より時期が遡るようである。

また、A地区の11層からは古墳時代前期の壺の破片が出土している。出土した破片は壺の頸部から胴部にかけての部分と思われる。破片のため詳細は不明であるが、バチ形の文様が連続して描かれていたと考えられる(第46図)。



第46図 若江第51次A地区第11層出土遺物実測図(S=1/2)

4 まとめ

今回の調査では、古墳時代から江戸時代にかけての遺構・遺物を検出することができた。ことに遺存状態の良い遺物が多く出土している。整理作業の終了を待って、EからH地区の成果も含め、改めて報告することとしたい。

第9章 若江遺跡第53次調査報告

1 はじめに

今回の調査は公共下水道築造工事第313工区に伴うもので、工事箇所は若江本町3丁目の府道四条長堂線の歩道上である。本工区は若江遺跡の東限付近に位置するため、工事計画段階で試掘調査を行った(第47図)。

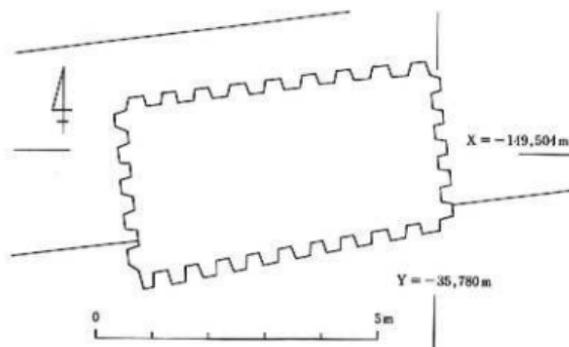
試掘調査は1992(平成4)年5月26日に実施し、土師器を含む遺物包含層を確認した。また、すぐ西では府道四条長堂線拡幅に伴う調査(若江遺跡第33次調査)が行われ、弥生時代中期の方形周溝墓や古墳時代の土壌、室町時代の溝等が検出されている⁴³⁾。以上のことから予定地には遺物や遺構が埋蔵されていることが予想され、本調査を実施することとなった。

築造工事が推進工法であるため、調査は約5.5×3mの発進坑(約16m²)1箇所と到達坑1箇所について実施した。発進坑は本調査を行い、到達坑については掘削に立ち会い、遺物採集に努めた。これは到達坑が径約2mの円形で、掘削することにライナープレートと呼ばれる軽量曲板をたてこんで土留めする工法のためである。あまりに狭小なためと、調査をするための安全が図れなかったことによる。発進坑の調査期間は1992年11月25日から11月27日である。発進坑をA地区、到達坑をB地区とし、以下に調査成果を略述する。

なお実測の基準には国土地産第VI系を用い、基準点の設置は国際航業株式会社に委託した。



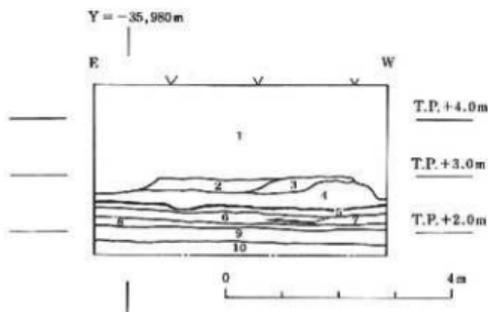
第47図 若江第53次調査地位置図(S=1/2500)



第48図 若江第53次A地区位置図(S=1/100)

m付近で弥生から古墳時代の遺構が検出されていたが、遺構面を確認することはできなかった。さらに下位層を人力によって精査したものの、遺物がまったく出土しないため、現地表下約3mで、調査を終了した。層位は上層から順に下記の通りであった。

- 第1層 アスファルト及び盛土、攪乱層。
- 第2層 5GY2/1オリブ黒色砂混粘土層。攪乱が激しく調査区南部に一部が存在する。
- 第3層 5Y5/3暗オリブ細砂層。第2層同様、ごくわずかな部分が残るのみである。
- 第4層 2.5GY4/1暗オリブ灰色粘土層。攪乱は本層まで達する。土師器細片が出土した。
- 第5層 5Y2/2オリブ黒色粘土層。本層以下、出土遺物はない。
- 第6層 5GY4/1暗オリブ灰色細砂層。
- 第7層 7.5GY4/1暗緑色粘土層。
- 第8層 N1.5/黒色粘土層。
- 第9層 10G8/1暗緑灰色粘土層。
- 第10層 5BG2/1青黒色粘土層。



第49図 若江第53次A地区南壁土層図(S=1/100)

2 調査概要

1) A地区(第48・49図)

本調査区は現地表から約1m下に厚いコンクリート基礎が存在していた。遺物包含層は遺存していたものの攪乱が著しく、調査区内ではごく一部にみられたにすぎない。遺構は検出できなかった。

第33次調査ではT.P.+2.5

第5層はT.P.+2.5m付近に位置し、レベルから第33次調査での弥生、古墳時代遺構面に相当するものと考えられる。しかし、前述のように遺構、遺物は確認できなかった。

遺物は第4層と攪乱層から出土したが、罔化しうるものはなかった。ほとんどが土師質皿の細片であり、量は少ない。

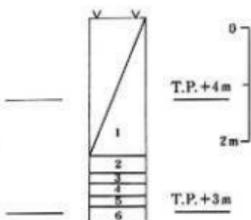
2) B地区(第50・51図)

本地区では工事掘削に立会い、遺物採集に努めたが、遺物の出土はなかった。試掘調査をほぼ同一地点で行っているため、ここではその結果を報告する。

層位は上層から順に下記のとおりで、遺構は確認されなかった。

- 第1層 アスファルト及び盛土、攪乱層。
- 第2層 暗緑灰色砂混シルト層。土師質皿細片を含む。
- 第3層 青灰色細砂〜シルト層。土師質皿細片を含む。
- 第4層 暗青灰色中粒砂層。土師質皿細片を含む。
- 第5層 黒灰色中粒砂〜細砂層。土師器、土錘が出土した。
- 第6層 緑灰色細砂〜粘土層。遺物は出土しなかった。

出土遺物の中で図示したものは、第5層出土の土錘1点のみである。土錘は長約6.5cm、最大幅約2.5cm、孔径約0.7cm、重量約45.1gを測る。胎上には角閃石が含まれ、焼成は土師質で、にふい赤褐色を呈する。共存する土師器が細片のため時期は不明である。が、形状等から中世以前のもと思われる。第1層から第3層にかけて出土した土師皿は細片のため、具体的な堆積時期を知る資料とはならなかった。

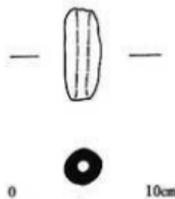


第50図 B地区土層図(S=1/100)

3 まとめ

今回の調査では攪乱が激しく、中世の遺構、遺物を検出することはできなかった。調査区が小さいため弥生、古墳時代のものも発見することができなかった。

若江遺跡の北半部では弥生時代後期から古墳時代前期の土器が、ほぼ全域で単独に完形品に近い形で出土する例が多い。これに対して、弥生時代中期や古墳時代後期の遺物は中世や近世の遺物包含層に混じって出土する例がほとんどである²⁾。弥生時代中期の遺構が検出されたのは第33次調査のほかにはない。これまでに付近で実施された第45〜1次調査や第46次調査³⁾でも、その時期の遺物は検出されていない。古墳時代後期の遺構は、その後の時代に削平されている可能性が高いと思われるが、弥生時代中期の遺構は遺跡内の狭い範囲にしか見られないと考えるほうがよさそうである。分布範囲を想定するならば、若江本町3丁目地内の南半部、安藤化成株式会社や河内ゴルフ倶楽部等の敷地内と考えられる。



第51図 土錘実測図

社)

- (1) 財団法人東大阪市文化財協会「若江遺跡第32・33次発掘調査報告」1990年
- (2) 財団法人東大阪市文化財協会「若江遺跡第27次発掘調査報告」1988年
財団法人東大阪市文化財協会「若江遺跡第35次発掘調査報告」1988年
などの報告を参照されたい。
- (3) 財団法人東大阪市文化財協会「東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告—1991年度—」1992年

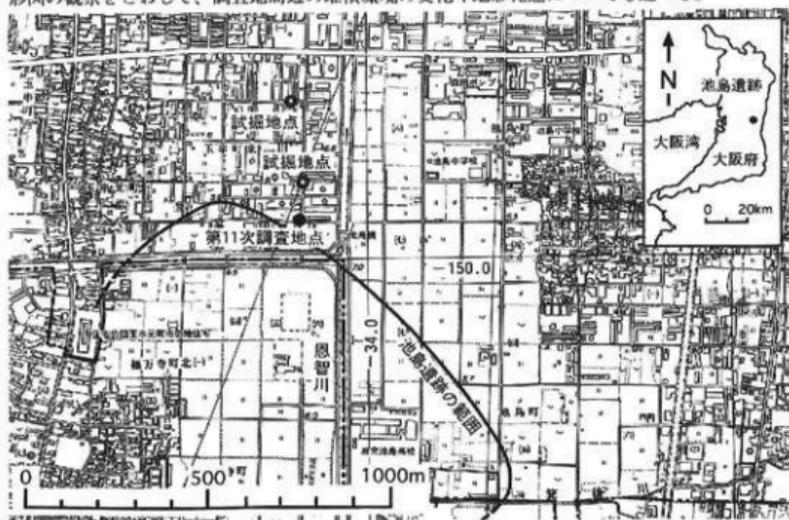
第10章 池島遺跡第11次発掘調査報告

1 はじめに

池島遺跡は、大阪府東大阪市の南西部、池島町5～7丁目、玉串町東2・3丁目にまたがって所在する。八尾市福万寺町北、福万寺町に拡がる福万寺遺跡は行政区画上異なる名称であるが、市境をこえて連続する遺跡範囲とみなされている。同遺跡は東方の生駒山地の谷口から発達した沖積扇状地の扇端部と、その前面に拡がる沖積低地にかけて立地している。この沖積低地は、遺跡の西方を南北にのびる玉串川自然堤防の後背湿地でもある。現地表面の標高は4～5mである。

これまでの調査で、東大阪市内では、現在の水田地割にも名残りをとどめる鎌倉時代以降の条里遺構(藤井ほか、1973)や、弥生時代中期から古墳時代の集落跡の遺構(阿部・上野、1981)などが検出された。八尾市域では、1981年から大阪府教育委員会や大阪文化財センターによって大規模な発掘調査が実施されており、弥生時代中期以降の耕作地跡、7～9世紀に始まる条里遺構および中・近世の耕作地跡、古墳時代の滑石製品製作跡などが検出されている(阪田、1986; 岸本、1986; 大阪文化財センター、1991)。

本報告では、東大阪市内において予想されている池島遺跡の範囲の隣接地で行った発掘調査の概要を述べる。また、調査地での土層断面観察、土層断面より採取した砂礫試料の分析・地形図の観察をとおして、調査地周辺の堆積環境の変化や地形発達についても述べる。

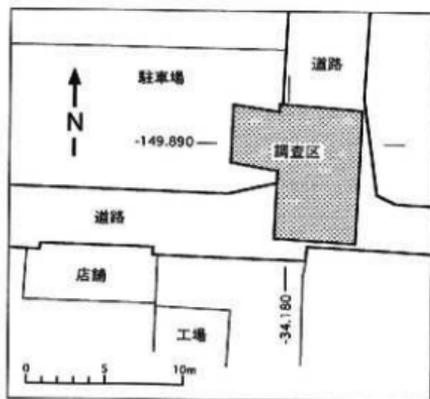


第52図 池島遺跡と第11次調査位置

2 調査概要

平成4年度の下水道整備事業の一つとして、玉串町東3丁目、推進工法による下水管理設工事が行われることになった。同地域は、これまで池島遺跡として推定されている範囲の北側に隣接しているため、遺構や遺物包含層が分布する可能性があり、これらが工事によって破壊されるおそれがあった。

推進工事の際に設置される堅坑は3か所であった。まず遺跡範囲から比較的離れた位置の2か所で、1992年4月に試掘調査を行った(第52図)。試掘調査は、現在の地表面下約2mまでを、小型のバックホウで掘削し、土層を観察するとともに、遺構・遺物包含層の有無を検討した。その結果いずれの地点でも、層厚1mあまりの盛土層の下に近・現代の遺物を含む耕作土層や、泥質砂層や砂層がみとめられた。しかし、地表面下約2m以深の状況は湧水のため判断できなかった。そのため工期との関係から、まず堅坑設置地点3か所のうち、遺跡範囲にもっとも近い地点で、堅坑掘削工事の掘削深度まで調査を行い、その結果によって他地点での調査の実施を決めることにした。結果的にはきわだった遺物包含層が検出されなかったため、他地点での調査は行わなかった。



第53図 池島第11次調査区

今回の調査地点は、池島遺跡範囲の北東辺に隣接し、北流する思智川から第二寝屋川が真西に分岐する地点の北西約100mに位置する。調査区域は、民間の駐車場から道路敷にまたがったため、通行の妨げにならない夜間の発掘調査となった。調査期間は1992年10月12日から10月29日であった。調査はバックホウで土層を徐々に掘り下げながら、必要に応じて人力掘削に切り換え、平面的に精査する方法で行った。調査対象となったのは、南北9.0m、東西8.5mのかぎ形をなす約57㎡の鋼矢板で囲われた堅坑設置区域であった(第53図)。

現地表面下約1.3m(T.P.3.8m)までは最近の盛土と近・現代の耕作土層で、これらはすべて機械で除去した。それより下方では、きわだった土層の変化がみとめられるまで人力で掘削し、各堆積層の上面を精査して遺構の有無を確かめた。その結果、地表面下約2.4m(T.P.2.7m)で13世紀代の遺物を伴う南北方向の畦畔が検出された。この遺構面と上下の堆積層については後述する。上記の遺構面より下方では、地表下約5m(T.P.0m)までを2・3回に分けて機械掘削した。この掘削深度までには、砂礫層と泥層が交互に現れた。泥層の上面には、ヒトの足跡と思われる凹みがしばしばみとめられたが、遺構はなかった。この砂泥互層の下方には、中粒砂

から細礫を主とする砂礫層がみとめられ、調査の掘削はこの上面付近で終了した。

3 層序と遺構・遺物

今回の調査地点における岩質層序(lithostratigraphy)と文化層序(ethnostratigraphy)について述べる。これらの層序は、考古学的な層序記載の習慣にしたがって、上方から下方に向かって付番・命名する。

掘削深度約5.5mまでの間に34の単層ないし単層群を確認した。上部の第1層～第11層上面(深度約2.5m)までには顕著な人間活動の痕跡がみとめられたが、第11層より下方では、第18層上面の足跡らしき凹み以外に人間活動の痕跡はなく、自然の堆積層が累重していた。これらの堆積層の累重において、現代の水田耕作上層以下、上位より次に述べる6つの堆積相(lithofacies)と4つの遺物・遺構帯(ethnozone)を認定した。なお、堆積相C・Fの堆積環境の推定に際しては、後節に述べる砂礫試料の粒度分析結果と堆積時の流況の推測結果を考慮した。

3.1 岩質層序

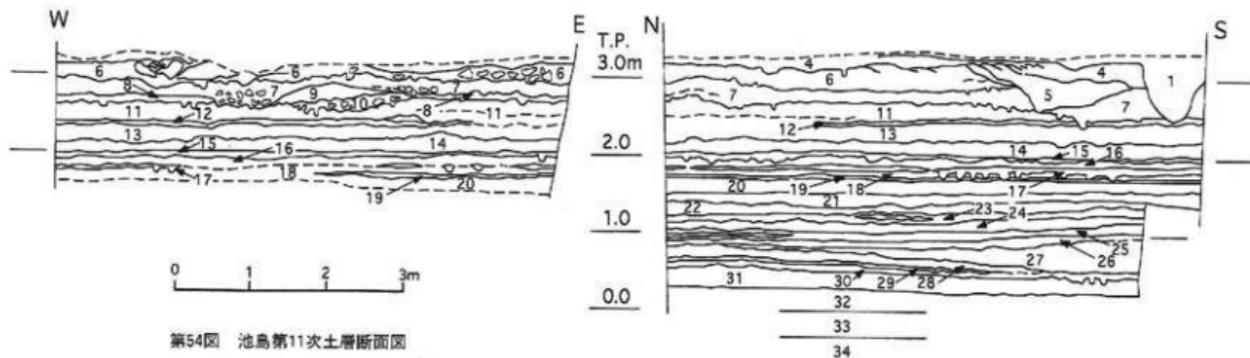
調査地点でみとめられた単層ないし単層群の区分による土層断面を第54図に示し、これを模式化した柱状図を第55図に示した。単層個々の特徴については上層断面図のキャプションを参照されたい。

堆積相A(第2層):塊状の砂質粘土質シルト。層厚約13cm。微細な有機物・有機質粘土を含む。現代の水田耕作土層。

堆積相B(第3層):不明瞭な平行葉理をなすシルト質砂礫。層厚約50cm。細礫・極粗粒砂～細粒砂からなり、上部に向かって細粒化する。しばしばマトリクスを欠く極粗粒砂～中粒砂の葉層および薄層がレンズ状にはさまれる。上部はほとんど塊状で、上位の水田土壌と第3層の下部にあった地下水の影響で生じた酸化鉄の斑紋が見られた。下部はグライ化した緑灰色を呈する。

本相にはレンズ状に砂の葉層・薄層が挟まれ、供給される砂が不十分で層理を形成するまでに運び去られたことを示している。このことから自然堤防間の後背湿地を流域とする排水河川近傍の排水良好な堆積環境が推定される。同時に、掃流物質と懸濁物質が混在することから、懸濁流によって河川砂が流入する後背湿地の堆積環境が推定される。さらに、下部から上部に向かって砂礫が減りシルトが増え、全体として上方細粒化することから、水流の影響がしだいに弱まり、この場所が埋積されたことを示している。これらのことから、後背湿地の中でも排水河川に近い、クレバススプレー縁辺の低地や、放棄河道の堆積環境(Allen(1965)によって論じられたchannel-fill depositsの堆積環境に類似する)が推定される。しかし、このような堆積物の形成には、河道の変更や水路の設置によって人為的に河川水を引き込んだり、排水するような水流の制御の影響も考えられる。

堆積相C(第4・5・9・15・17・21～24・27層):平行・トラフ型およびプラナー型斜交葉理・層理をなす砂。層厚は数cm～約45cm。しばしばシルト・粘土・植物遺体の葉層・薄層が挟まれ



第54図 池島第11次土層断面

1. 盛土・攪乱土層。
2. 粗粒砂から極細粒砂を含む砂質シルト層。近土直前の現代の水田耕作土層。
3. 新堆・極細粒砂～細粒砂を主とするシルト質砂層。しばしばマトリクスを欠く極細粒砂～中粒砂の点状の風が挟まれる。下部に砂礫多い。
4. トラフおよび平行層理をなす極細粒砂～細粒砂層。足跡を残す極細粒砂～シルトの層層が挟まれる。泥のブロック土が少量混入する。
5. トラフ歪斜交層理・層理をなすシルトとシルト質砂の互層。極細粒砂～中粒砂を含む。第7～11層を切って発達した流路内の堆積層。
6. 粗粒・極細粒砂～中粒砂をマトリクスとする砂質シルト・粘土質シルトのブロック土層。マトリクス部分には、シルト質砂・砂質シルトの層層がみられ、斜交層理をなす。下位の第7層に踏み込んだ足跡を充填する。
7. 粗粒砂から極細粒砂を含む砂質シルト層。下部に砂・シルトの平行層理の互層がみられる。断面中、第9層の西側に砂質シルトのブロック土が集中する。下位の第11・12層に踏み込んだ足跡を充填する。
8. 平行層理・トラフ歪斜交層理をなす極細粒砂～中粒砂層。第9層の西側に砂質シルトのブロック土が集中する。下位の第11層に踏み込んだ足跡を充填する。
9. トラフ歪・プラナー型斜交層理をなす極細粒砂～中粒砂層。シルト質砂の層層が多数挟まれる。南北方向に延びる層として割り出されている。
10. 粘土質シルトのブロック土を含む粗粒砂～極細粒砂層。部分的に平行層理をなす。下位の第11層に踏み込んだ足跡を充填する。
11. 粘土～シルト質粘土層。不明瞭な平行層理をなす。下部に有機物(植物遺体など)を含む層層が挟まれる。
12. 極細粒砂・シルト質粘土層の互層。
13. 砂まじり粘土層。不明瞭な平行層理をなす。
14. 平行層理をなす砂質(中粒砂～細粒砂)粘土層。
15. トラフ歪斜交層理・層理と不明瞭な平行層理をなす極細粒砂～中粒砂層。
16. ほごんど塊状のシルト質粘土層。
17. 平行層理をなす極細粒砂～中粒砂層。
18. 平行層理をなす粘土層。
19. 有機物(植物遺体など)を多く含む粘土層。
20. 平行層理をなす粘土層。
21. シルト質細粒砂～極細粒砂層。平行層理をなす。ところにより植物遺体を含む。
22. 平行層理・層理をなす極細粒砂～細粒砂層。分層がよい。わずかにシルト。植物遺体を含む。
23. トラフ歪・プラナー型斜交層理をなす粘土質シルトまじり中粒砂～細粒砂層。植物遺体を含む。第22層との境界不明瞭。
24. 中・上部はプラナー型・トラフ型斜交層理をなす極細粒砂～中粒砂層。最下部は平行層理をなすシルトまじり細粒砂～粗粒砂層。中位に植物遺体の層層が挟まれる。
25. 砂質シルトの層層を挟むシルト質粘土層。下部に泥炭質の粘土層層が挟まれる。平行層理をなす。
26. 中粒砂～極細粒砂の層層をはさむシルト質粘土層。平行層理をなす。
27. トラフ歪斜交層理・層理をなす極細粒砂～細粒砂層。植物遺体の層層が多数挟まれる。しばしば極細粒砂の層層が挟まれる。
28. 平行層理をなすシルト質粘土層。極細粒砂・植物遺体の層層が多数挟まれる。
29. 中粒砂～極細粒砂の層層。
30. 植物遺体(ヨシの茎)を含む泥炭質の粘土質シルト層。不明瞭な平行層理をなす。
31. 砂まじり泥炭質シルト質粘土層。植物遺体を含み平行層理をなす。
32. トラフ歪斜交層理をなす細粒～細粒砂層。最上部に植物遺体を多量に含む。
33. トラフ歪斜交層理・層理をなす細粒砂～中粒砂層。
34. トラフ歪斜交層理・層理をなす細粒の中粒(fine pebbles)～中粒砂層。

る。第5層などは泥質の葉層・薄層が発達し、上部では砂質シルト・シルト質となる。第27層は下位の堆積を侵食し、浅い流路を充填している。第22・23と24層は逆級化成層をなす。フォーセット葉理から推定される古流向は一定せず、第4・5層は北西から南東、第15・27層はほぼ真西から東、第9・23・24層は南西から北東であった。

以上のことと、後述する泥質の堆積相Eが本相の上に載り、上方に細粒化するサイクルが少なくとも3度みとめられることから、本相は近傍の河道の外水氾濫の洪水流によって後背湿地に運搬されたクレバス・スプレー堆積物(crevasse splay deposits)と考えられる。一部の層にみられる逆級化成層も洪水堆積物の示相構造と考えられる(伊勢屋, 1982)。

堆積相D(第6~8・10層): 砂質シルトないし粘土質シルトのブロック土(mud pebbles and cobbles)を含む砂~シルト。層厚約10~30cm。ブロック土はピンポン玉大から人頭大のものであり、角から亜角状を呈する。マトリクスの砂~シルトにはところにより平行葉理・トラフ型斜交葉理がみとめられるが、おおむね塊状である。しばしば下位の層に踏み込んだ足跡を充填する。

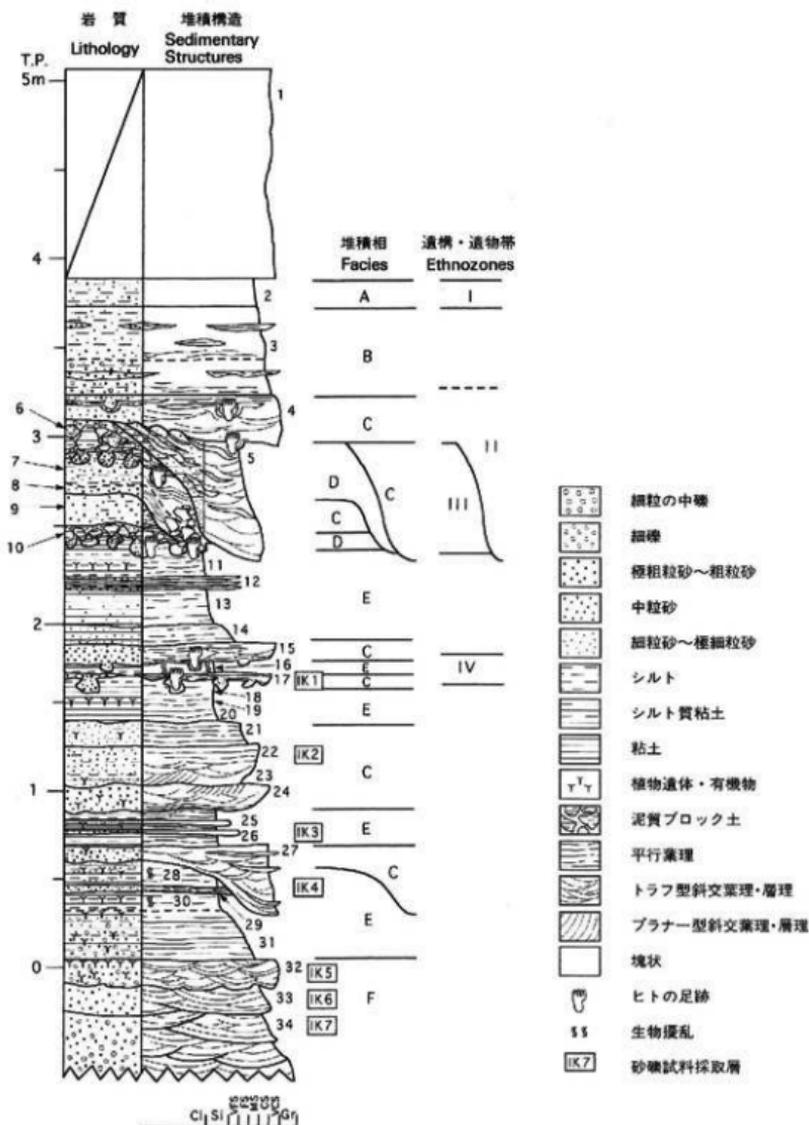
本相はマトリクスの砂~シルトに注目すれば、堆積相Cに類似し、河道内の堆積物とは考えられない。また、ラグ堆積物は河床の砂礫中に薄く散布するといわれるが(Reineck and Singh, 1980)、第6~8・10層、とくに第6・10層のブロック土は、クラストサポートで積み重なった堆積構造をなしている。このようなことから本相は、調査地付近で掘削されて生じたブロック土が流水中に投入され、自然の掃流物質とともに堆積した人為的なものと考えられる。マトリクスの砂はクレバススプレー堆積物であろう。第7層ではブロック土とマトリクスがより擾乱されており、盛上ともいふべき状態を呈する部分がある。

堆積相E(第11~14・16・18~20・24~26・28~31層): 平行葉理ないしは塊状をなすシルト。層厚約10~30cm。植物遺体が混じり、葉層をなすこともある。おおむね上方に向かって細粒化する。上部の平行葉理がとぎれたり、不明瞭になり、塊状を呈するのは生物擾乱(bioturbation)によるものと考えられる。ところにより、砂とシルト・粘土の葉層が互層(rhythmite)をなす部分がある。

以上のことと、本相が堆積相Cと交替してあらわれることから、本相は外水氾濫によってしばしば砂礫が流入した、後背湿地の静水域で形成されたと考えられる。乾裂を伴わないことや、土壌発達の痕跡がないことから堆積期間をつうじてほとんど水漬かりの状態であったと思われる。

なお、本相に挟まれる砂・泥葉層の互層中の砂は、後述する砂礫試料IK3の粒径頻度分布からも推測されるように、やや水深があり、おだやかな流れのもとで、懸濁流によって運搬され堆積したと考えられる。このような懸濁流は、堆積相Cを形成するような調査地近傍の河川の氾濫のほかに、自然堤防内の内水氾濫や、流域上部での外水氾濫によっても生じると思われる。

堆積相F(第32~34層): トラフ型斜交葉理・斜交層理をなす砂礫。第32・33層は、層厚約20cm。主として細粒の中礫(fine pebble)~中粒砂からなる。第3層の上部には多量の植物遺体が



第55図 池島第11次土層柱状図

含まれる。第34層は、調査した堆積相の最深部にあり、層厚は不明だが、ボーリングステッキで調べたところ、少なくとも70cm以上の層厚があった。

上記の粒径・堆積構造・層厚などから、本相はおおむね河道内の堆積環境下で形成されたと考えられる。堆積構造のスケールが上部に向かって小さくなることや、砂礫試料IKS5~7の粒径頻度分布が上方細粒化傾向を示すことから、本相はポイントバー・シーケンス上部の堆積相とも考えられる。しかし、最上部がやや泥質で、異地性の植物遺体を含むこと、上位の堆積相Eの第30・31層が砂礫に富み、泥質部が明瞭な葉理をなし、上方細粒化すると同時に、堆積相F最上部の第32層に漸移的に載ることから、本相は放棄河道の堆積物(channel-fill deposits)である可能性が高い(Reineck and Singh, 1980; Allen, 1965)。

以上の各堆積相は、下位より、F-E-C-E-C-E-C-E-D-C-D-C-C-B-Aの順で累重し、おおよそ(1)F、(2)C-Eの交替、(3)C-EへのDの挟在、(4)再びC、(5)B-Aの累重という変化ととらえることができる。以上の堆積相の累重から復元される堆積環境の変化と調査地点周辺の地形発達については第6節で述べる。

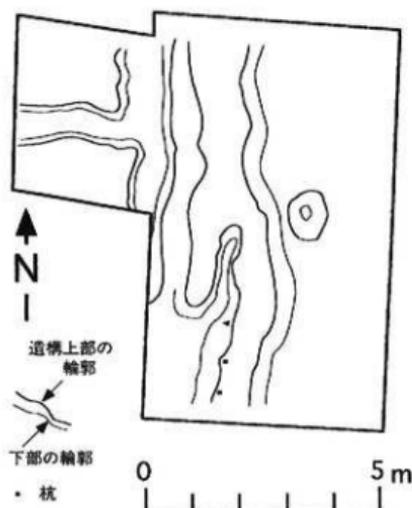
3.2 文化層序

遺構・遺物帯Ⅰ(第2層、堆積相A)：第2層は、現代の水田土壌で、プラスチック容器、ガラスびんの破片などが含まれていた。

遺構・遺物帯Ⅱ(第3層最下部~第5層、堆積相B・C)：近世の染め付け磁器の細片が2・3点出土した。第4層上部にはヒトの足跡がみとめられた。第5層は、南西から北東にのびる溝内の堆積層である。溝の幅120cm、深さ60cm。

遺構・遺物帯Ⅲ(第6~10層、堆積相D・C)：本帯の上部、第6層からは遺物は出土しなかったが、同層の基底でヒトの足跡がみられた。第7層から第9層までの間で、瓦器碗・土師器皿などの細片が出土した。瓦器碗は、口縁部の立ち上がりが弱く、暗紋は疎、高台は撫でつけたように低平であり、森島(1987)による瓦器碗の編年では、13世紀後半の遺物とされる。異地性の強い混入遺物であれば、本帯の年代を少し新しく14・15世紀と推定することもできる。

第9層は、調査区の東寄りを南北に延びる畦状の高まりとして検出された。この横断面には、トラフ型斜交葉理がみとめられるので、自然の堆積層を人工的に削り出して作られた畦とみなせる。畦の高さは20~30cm、幅60~80cm。調査区の南部では、舌状に途切れる部分と、調査区外に延びる部分とに分岐し、後者の西辺に沿って杭列が検出された。畦を形成する第9層は、若干のシルト分を含むが、砂層にしては固く締まった状態であった。踏み固めが原因かと思われる。この第9層上面の人工的な侵食面は、畦の東西両側の低い部分では、第10層の一部を掘り込み、さらに踏込(足跡)で擾乱するかたちで第11層の上面に続く。この面では、畦の西側に畦と平行して幅1.4mの浅い溝がみとめられた。調査区の北西部では、この溝からほぼ直角に分岐し、西に延びる幅70cmの他の溝が検出された。上記2条の溝の深さはともに10~15cmであった。畦の東側では、椀状にくぼむ、長径約70cm、深さ約20cmのピットが検出された。このピットの性格は不明である(第56図)。



第56図 中世の畦畔遺構略図

cmのくぼみを多数みとめた。ヒトの足跡と思われる。¹⁰⁾

上述した、掘り残して、あるいは削り出して作られた畦は、本遺跡の他の地点でも検出されており、岸本(1986)、阪田(1986)による報告がある。このような畦は、水田の水掛りを良くするため、地面を掘り下げて造成される、いわゆる「掻揚げ田」の遺構に伴うものと考えられる。なお、この畦の位置は、萩田(1977)によって復元された河内郡の条里地割における二条字「皮」の二ノ坪と十一ノ坪の境にあたる。

遺構・遺物帯Ⅳ(第16層上面～第18層上面、堆積相C・E):本帯では、顕著な遺構・遺物はみとめられなかったが、土層断面の観察において、泥質の第16・18層の上面で、それぞれ上位の第15・17層の砂質堆積物で充填された、深さ・幅ともに数cm～15

4 調査地で採集した砂礫の粒径頻度分布と鉱物組成

前節では調査地点においてみとめられた堆積相を列挙したが、本節ではその堆積環境を推定するにあたって参考にした砂礫の粒度分析について述べる。また、この砂礫の供給源を推定するために行った鉱物組成の分析についても述べる。ただし、調査地点の試料は、今回は計画的に採取しなかったために、おもに土層断面の下部にかたよっている。

4.1 採集試料

分析試料のうち、調査地点では堆積相Cにあたる砂礫層、堆積相Eの泥層に挟在する砂の葉層、堆積相Dの砂礫層から合計7点採取した。試料を採取した層率は第55図の柱状図に示した。試料は上位のものよりIK1～IK7と呼ぶ。堆積構造を構成する葉理1枚のなかでも砂礫の粒径頻度分布には変異があるが、今回の試料では、何枚かの葉理からまとめて砂礫を採取し、その層の全体的な粒径頻度分布をみることにした。

鉱物組成の比較試料としては、調査後以下の砂礫試料を採取した。

略称MG。東大阪市池島町6丁目、箕後川下流部(恩智川との合流点より150m上流)の河床より採取。

略称OJ。東大阪市六万寺町1丁目、往生院南側の谷壁斜面より採取。

略称IW。東大阪市六万寺町1丁目、往生院北側の谷底河床より採取。岩滝山遺跡範囲内。

略称GO。八尾市^{サカキ}楽音寺1丁目、貴島病院の北側を西流し、外環状線の西方で箕後川に合流する小河川の河床より採取。

略称KD。八尾市^{ウツノ}神立1丁目、八尾市立歴史民俗資料館の東方約500m、ガイ谷と呼ばれる小河川の河床より採取。

略称ON。八尾市恩智中町5丁目、恩智神社北側の谷底河床より採取。

略称IY。藤井寺市船橋町、大和川・石川合流点より約150m下流の河岸の砂堆より採取。

略称NT。東大阪市西岩田3丁目、西岩田遺跡内の試掘調査で検出された弥生時代後期頃の河道堆積層より採取。

いずれの試料も、現地では500~1000g採取し、室内でスプリッターを用い、粒径に応じて100~200gに減量した。

4.2 粒度分析

粒径頻度分布は、調査地で採取したIK1~7についてもとめた。おもに砂礫の粒径頻度分布を知る必要と簡便のため、シルト以細の粒度階については一括した。まず、風乾した試料を秤量し、乾重量をもとめた。この試料に35%の過酸化水素水と精製水を適宜加えて煮沸した。次に、試料を63 μ mの試験篩に受けて水洗し、これを風乾後、再び秤量して砂礫だけの重量をもとめた。最初の乾重量から水洗後の乾重量を差し引きシルト・粘土の重量とした。この試料を、4mm~63 μ mメッシュで1 ϕ 間隔の7個の試験篩を用い、ロータップ型篩振盪器で約20分間振盪し、各篩に残った砂礫を秤量した。このとき、4mmメッシュの篩に残った礫中に、礫の長軸に直交する幅が8mm以上の礫 (medium pebbles) が混じっていた場合、これを選び分け、別に秤量した。また、試験篩より下の受皿に落ちたシルトも秤量して、先のシルト・粘土の重量に加えた。以上の結果得られた各粒度階の重量の百分比を算出し、粒径頻度分布を得た。さらにこの粒径頻度分布から累積頻度曲線を描き、Fork and Ward(1957)の計算式にもとづいて、平均粒径、標準偏差(分級度)、歪度、尖度を算出した。

4.3 鉱物組成の分析

鉱物組成はおもに、石英、カリ長石、斜長石の量比をもとめ、砂礫の供給源の推定を試みた。以上の3種類の鉱物のほかに、角閃石の量比、カコウ岩・閃緑岩/ハンレイ岩類・堆積岩類の量比をもとめた。この分析は以下のような手順で行った。

4.3.1 砂礫の樹脂包埋・研磨

鉱物・岩石の観察に用いた試料は、すべて1 ϕ 間隔の粒度階に分別し、四分法で減量した。調査地で採集したIK1~7は粒度分析後の試料を用いた。比較のため採集したその他の試料は粒度分析と同じ方法で分別した。分別した試料をエポキシ樹脂で板状に包埋した後、800~1200番の砥石で研磨して、鉱物・岩石の新鮮な断面が観察できるようにした。

4.3.2 染色

染色方法については、吉松(1982)、Humphries(1992)を参考にして以下のように行った。55%フッ化水素酸を適量満たしたポリエチレン製の蓋付バットに、上述の包埋・研磨した粒度別

試料を約3分間浸し、研磨面を腐食させた後、水洗した。次に塩化バリウム5%の溶液に30秒間動かしながら浸した後、再び水洗した。次に、腐食された試料の研磨面に、コバルト亜硝酸ナトリウム飽和溶液を滴下、約1分間放置し、カリ長石を黄褐色に染色した後、水洗した。その後ロジソン酸ナトリウム0.25%溶液でカリウムに富む斜長石を赤褐色に染色したが、これらは後の集計からは除外した。染色後の試料は再び水洗・乾燥して、光の届かない場所で保管した。なお、極細粒砂クラスの試料で、フッ化水素酸の腐食の深度が粒径を上廻ってしまったものは廃棄した。

4.3.3 鉱物粒・岩石粒の計数

染色後の粒度別試料は、実体顕微鏡(10~100倍)下で観察し、石英・カリ長石・斜長石、角閃石、カコウ岩類・閃緑岩-ハンレイ岩類・堆積岩類をそれぞれ数えた。1採集地点の試料について数えた砂礫は2000~3000粒であった。この際、たとえば黒雲母・石英・カリ長石・斜長石からなる粗粒砂1粒は、粗粒砂クラスのカコウ岩1粒として数えると同時に、中粒砂ないし細粒砂クラスの鉱物1~3粒とも数えた。また、鉱物粒で岩石名を同定できないものは、岩石の数量から除外した。粒度別試料の計数結果の各鉱物粒・岩石粒の数にその粒度階の直径の中央値にもとづく面積を乗じたうえで、各試料ごとに集計した。

4.3.4 鉱物粒・岩石粒の量比の表現

石英・カリ長石・斜長石の量比は、これら3者の総量に対する各鉱物の百分比を算出し、三角ダイアグラムに示した(第7図a)。角閃石の量比と各岩石種の量比は、採集地点ごとで集計した砂礫の総量に対するそれぞれの百分比を算出した。

4.4 粒度分析の結果

試料IK1~7の粒径頻度分布を第57図aのヒストグラムに示す。また各試料の標準偏差/歪度、標準偏差/平均粒径をそれぞれ横軸/縦軸にとって描いた散布図を第57図b・cに示す。この散布図にはFriedman(1961)の海浜砂・砂丘砂・河川砂を区分する境界線を描き加えた。この結果から、IK1~7は、すべて河川砂であり、現地で観察された堆積構造からも風成砂を含まないと判断される。以下には、各試料の粒径頻度分布について述べる。

IK1(第17層)は細粒・極粗粒砂以細の砂および泥(シルト・粘土)からなり、粗粒砂クラスに最頻値がある。懸濁物質(ないしはウォッシュロード)と考えられる極細粒砂や泥を少し含む。やや分級が悪く、分析試料中もっとも粗粒側に寄る歪度を示している。

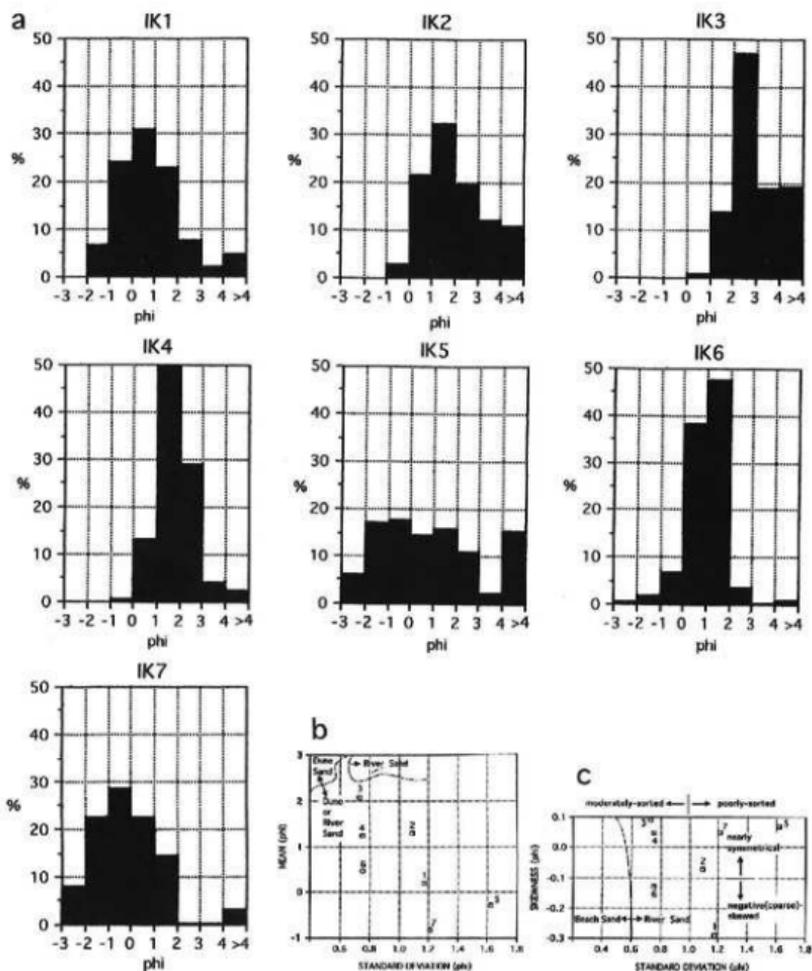
IK2(第22層)は極粗粒砂以細の砂および泥からなり、中粒砂クラスに最頻値がある。分級は悪く、粗粒側に寄る歪度を示す。約10%含まれる泥は斜交葉理の一部として挟まれたもので、ドレイブした懸濁物質と考えられる。

IK3(第26層)はおもに中粒砂以細の砂と泥からなり、細粒砂クラスに最頻値がある。分析試料中もっとも分級はよいが、懸濁物質をかなり含んでいる。これは1枚の薄層が級化構造をなしていたためである。

IK4(第27層)はおもに中粒砂以細の砂と泥からなる。中粒砂クラスに最頻値があり、シメント

リーに近い分布をしめしている。分級は比較的よい。

IK5(第32層)は細粒の中礫・細礫・極粗粒砂以細の砂および泥からなる。ヒストグラムで最頻値をしいてもとめるとすれば、細礫～極粗粒砂・中粒砂・泥の各クラスが挙げられる。分析試料中もっとも分級が悪く、平均粒径でもかなり粗粒傾向を示す。砂礫以外に多量の植物遺体を



第57図 池島第11次砂礫試料の粒径頻度分布と統計量の比較

含んでいた。

IK6(第33層)はおもに極粗粒砂～細粒砂からなるが、粗粒砂・中粒砂の占める割合が高い。分級は比較的良好、泥はほとんど含まない。

IK7(第34層)はおもに細粒の中礫・細礫・極粗粒砂～中粒砂からなり、分析試料中もっとも粗粒であるが、極粗粒砂クラスの最頻値を中心に、ほぼシメトリーな分布を示している。懸濁物質を少し含む。

今回採集した粒度分析試料の数は限られていたが、以上7試料についてみても、すべて河川砂とはいえ、それらの粒径頻度分布はたがいに異なる特徴をもっている。これらがどのような状況のもとで堆積したのかは、各層の堆積構造とこれらが収められる一連の累重様式のなかで解釈する必要がある。砂礫堆積時の流況については後節で論じる。

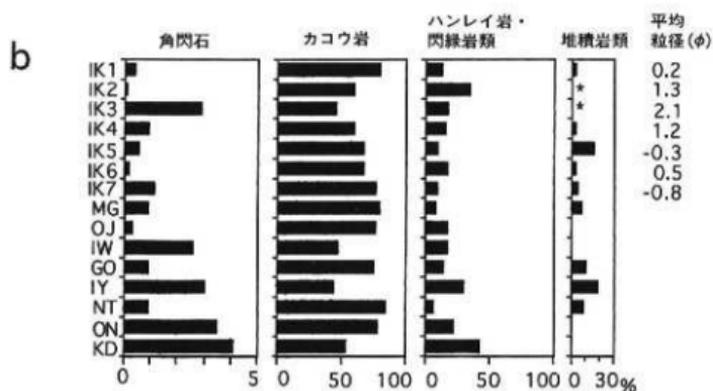
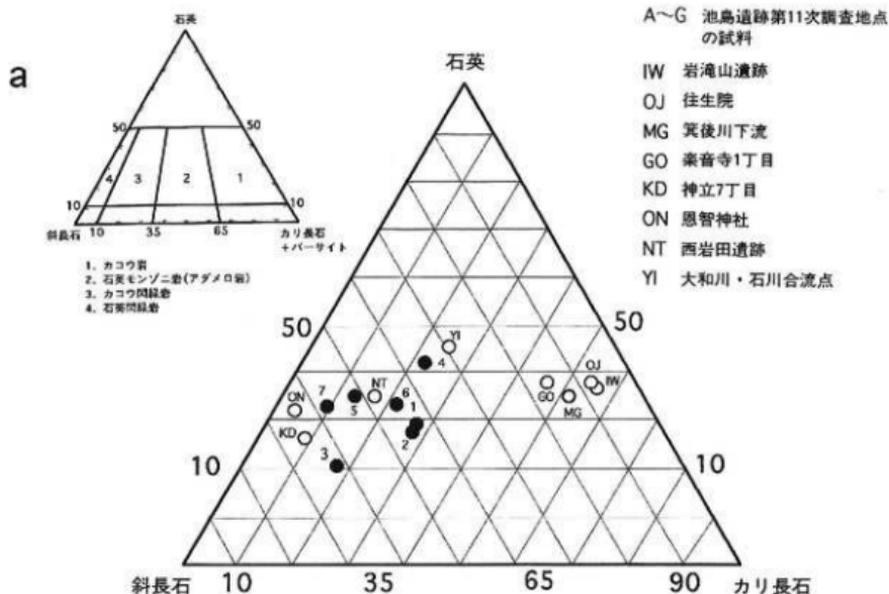
本節で示した粒度分析結果では、IK7からIK6へ上方細粒化していることが確認された。また、逆にIK4-2-1で上方粗粒化するきざしがあることにも注意したい。試料採取を怠ったが、IK1より上位の砂礫層(第15・10・9・8・6層)がおおむね上方粗粒化していることは、IK4-2-1の上方粗粒化から連続する傾向と考えられる。

4.5 鉱物組成の分析結果

カリ長石の染色によって識別した2種類の長石と石英の百分比を第58図aの三角ダイアグラムで検討する。ほとんどの試料で石英は20～50%の間にあり、顕著な差がみとめられない。これに対し、カリ長石と斜長石とは試料によってかなり差がある。調査地で採集した7試料(IK1～7)のカリ長石は10～30%、斜長石は35～65%の間にある。生駒山地から調査地近傍に流出する砂礫の供給源と考えられるOJ、IW、MG、GOの4試料は、カリ長石が45～55%で調査地の試料とは異なるグループをなしている。いっぽう、大和川水系の砂礫であるYI、NTは調査地の試料に近い百分比を示している。調査地の東側を北流する思智川の上流で生駒山地方面より合流する小河川の砂礫ONやKDのカリ長石は10%以下、斜長石は約65%で、大和川水系と調査地の試料からなるグループの右端に散布し、他の試料とは異なる傾向を示している。

以上の結果を、石英・カリ長石・斜長石の量比によるカコウ岩質深成岩類の分類基準(岡7-a 左上)(都城・久城、1975)によると、調査地東方の生駒山地から流出した砂礫はおもにカコウ岩、調査地で採集した砂礫と大和川水系の砂礫はおもにカコウ岩～カコウ閃緑岩、思智川の上流部で合流する河川の砂礫はおもに石英閃緑岩の範囲に散布することがわかる。沖積低地氾濫原の砂礫には、いくつかの供給源から運ばれてきた砂礫が混在すると考えられるので、上の結果からただちにそれぞれの試料の母岩となる岩石名や岩体の分布地帯を特定できない。しかし、調査地で採集した砂礫は、調査地東方の山地から直接供給されたものではないと考えられる。ただし、IK7は現在の思智川流域の砂礫と大和川水系の砂礫が混じったものとも考えられる。以上のことから調査地の砂礫のほとんどは、1704年の大和川付替までに河内平野一帯に発達していた旧大和川の分流によって運搬・堆積したものと考えられる。

次に、角閃石、カコウ岩、斑礫岩・閃緑岩類、堆積岩類の一試料全体に対する量比を検討す



*印は1%以下の割合で含まれることを示す。
カコウ岩、ハンレイ岩・閃緑岩類、堆積岩類の量は観察した砂礫の総量に対する百分比で、鉱物粒の量比を除いているため、三者の合計が100%にはなっていない。

第58図 池島第11次砂礫試料の鉱物・岩石種組成

る。細粒部分の多い試料には、角閃石や黒雲母のような有色鉱物が増える傾向がある。ただ、ON、KDの角閃石の量比が高いことと、これらが先の分析で石英閃緑岩の領域に散布することは調和的である。しかし、これらの試料ではハンレイ岩粒も比較的多いので、同岩の岩体が試料採取地点付近に分布する可能性もある。この角閃石は、透明感のある青緑色から褐色を呈し、微細な針状に砕ける特徴があった。他の試料に含まれる角閃石は、不透明の黒色かやや透明感のある褐色で、結晶は柱状をなし、上記2試料のものとは趣が異なる。

どの岩石に由来するか判別不可能な鉱物は岩石の数量に加えていないため、とくに細粒部分の多い試料では3種類の岩石の量比の合計が100%となっていないものがある。このことは、砂礫試料から直接母岩を推定することが困難であることを示している。また、カコウ岩、ハンレイ岩・閃緑岩の各試料での量比は、一見して砂礫の供給源の違いが判断できるような差を示していない。

堆積岩類に含まれるのは、おもにチャートと砂岩であるが、まれに頁岩や溶結凝灰岩（あるいは流紋岩）らしきものがみとめられた。採集試料中、MGとOGはチャート・砂岩などを含む大阪層群の分布地帯の流域の堆積物であり、堆積岩の量比によって砂礫の供給源を推定できなかった。また、粗粒な試料では、硬く容易に細粒化しないチャートが混じりやすいということも考えられる。一般に、碎屑性堆積物の鉱物・岩石組成は、供給源となる岩体の風化プロセス、風化後の運搬・堆積プロセスに強く影響される(Briggs, 1977)。そのため、サンプリングエラーの大きい少量の堆積物試料の鉱物・岩石の直接的な観察で、供給源を判断することはできないように思われる。

5 堆積相CとFに含まれる砂礫層堆積時の流況について

本節では、堆積相CとFに含まれる各単層の粒度、堆積構造から、各層の堆積時の流況を以下のように推測した。流況の推測にあたっては、Rubin and McCulloch(1980)の粒径・水深・流速および堆積構造の相関モデルとFritz and Moore(1988)の流況の推測手順を参照した。ただし、上記のモデルによると、水深の変化は他の変数にくらべて堆積構造に強く反映しないので、ここでは水深を1 m以下、数10cmの範囲と仮定し、単層堆積時の相対的な水深の変化を言及するにとどめる。

第4層は極粗粒砂～細粒砂からなり、下部は3～4 cmの厚みのトラフ型斜交層理、上部は平行葉理をなす。前者ではsmall ripplesが形成され、その後流速が弱まって平行葉理が形成された。このことから同層堆積時の流況は、流速50cm/sec以下の"lower" lower flow regimeであったと考えられる。また、同層の一部は下位の第5層が埋め残した流路上部の浅い凹みを埋積しているが、この部分でもあまり流況の変化はなかったようである。

第5層は深さ40～60cmの流路の下部を埋積している。流路内のトラフ型斜交層理の1層理の厚みは5～10cmであった。同層はシルトとシルト質砂(粗粒砂～中粒砂)の互層で、シルトは、large ripplesの上に凹欠的に載ったものであろう。このようなことから、同層の堆積時の流況

は、中粒砂クラスを基準すると、流速50~100cm/sec.の“upper” lower flow regimeであったと考えられる。これらの砂泥を運んだ水流は、西ないし北西方向から来て流路に流入し、北東に向きを変えたようである。

第9層は、シルト質砂の葉層を多数含む極粗粒砂~中粒砂からなり、トラフ型斜交層理をなす。一層理の厚みは3~4cmで、small ripplesを形成していた。これらのことから本層は、流速50cm/sec.以下の“lower” lower flow regimeのもとで堆積したと考えられる。

第15層は極粗粒砂~中粒砂からなり、下部には、2~4cmの厚みのトラフ型斜交層理が、上部には不明瞭な平行葉理がみとめられた。これらのことから、本層は50cm/sec.以下の“lower” lower flow regimeのもとで堆積したと考えられる。また、下部ではsmall ripplesが、上部ではさらに水流が衰え、lower plane bedを形成したのであろう。

第17層は極粗粒砂~中粒砂からなり、不明瞭な平行葉理をなす。本層は流速50cm/sec.以下の“lower” lower flow regimeのもとで堆積したと考えられる。

第21層は、シルト質の細粒砂~極細粒砂からなり、平行葉理をなす。この堆積構造はupper plane bedであり、本層は、水深が小さいか、流速約100cm/sec.以上のupper flow regimeのもとで堆積したと考えられる。

第22(砂礫試料IK2)・23層の層界は不明瞭で、これらを一層とすると、上方粗粒化ないし逆級化成層をなすと考えられる。第23層は粘土質シルト混じり中粒砂~細粒砂で、プラナー型・トラフ型斜交層理をなし、上位の第22層は粗粒砂~細粒砂で、平行葉理に変化している。第23層の一層理の厚みは5~8cmであり、large ripplesを形成するような、流速約50~100cm/sec.の“upper” lower flow regimeのもとで堆積したと考えられる。その後第22層では流速を減じ、50cm/sec.前後の“lower” lower flow regimeに変化したようである。

第24層はおもにシルト混じり細粒砂~極粗粒砂からなり、逆級化成層をなす。最下部に平行層理が、中・上部にトラフ型・プラナー型斜交層理がみとめられる。層厚10~15cmで、一層理の厚みは5~8cmであった。以上のことから、堆積初期には中粒砂以細の砂がupper plane bedを形成するような、流速100cm/sec.以上のupper flow regimeであり、その後、large ripplesを形成するような流速100~50cm/sec.の“upper” lower flow regimeに変化したと考えられる。同時に、この変化は水深が堆積初期に小さく、後に増大したことも示唆する。

以上の第21~24層の各層の間には泥層が挟まれないことから、これらは短時間に連続して堆積したと考えられる。

第27層(砂礫試料IK4)は、おもに粗粒砂~細粒砂からなる。トラフ型斜交層理の一層理の厚みは5~10cmで、large ripplesを形成していた。これらのことから本層は、流速50~100cm/sec.の“upper” lower flow regimeのもとで堆積したと考えられる。

第32層(砂礫試料IK5)は、おもに細礫~細粒砂からなり、厚み5cm未満のトラフ型斜交層理をなす。これらのことから、本層はsmall ripplesを形成するような、流速50cm/sec.前後の“lower” lower flow regimeのもとで堆積したと考えられる。

第33層(砂礫試料IK6)は、おもに粗粒砂～中粒砂、第34層(砂礫試料IK7)はおもに細粒の中礫～中粒砂からなる。ともに一層理の厚みが5～10cm以上のトラフ型斜交層理をなし、large ripplesを形成するような、流速50～100cm/sec.の"upper" lower flow regimeのもとで堆積したと考えられる。

堆積相CとFの砂礫層堆積時の流況について以上のように推測した。洪水流の流速に関しては、出水時の平均流速50～60cm/sec.、最大流速120～130cm/sec. (伊勢屋, 1982)や、平均流速1.6 ft/sec. (約48cm/sec.)、最大流速2.7ft/sec. (約81cm/sec.) (Wolman and Leopold, 1957)などの実測値がある。いっぽう、大河川では300cm/sec.を越える記録もある (Benson, 1973; 榎根(1980)による)が、堆積相Cについて推測した流速は、これらの例を考慮しても、さほどははずれてはいないと思われる。

土層断面でみとめられた堆積相Cは、流況の異なる2つの段階に区分される。第17層以上の新しい段階では、流路内の堆積物である第5層を除けば、おおむね"lower" lower flow regimeのもとで堆積した。いっぽう第21層から第27層までの古い段階には、おおむね"upper" lower～upper flow regimeのもとで堆積した。流速に関しても、前者では50cm/sec.以下の水流で堆積したと推測されるものが多く、後者では第22層以外は50～100cm/sec.あるいはそれ以上の流速で堆積したと考えられる。

なお、堆積相Cのうちで、第4・15・22・24層は、20cm以下の層厚のなかで流速が減少する流況の変化が推測された。これらの堆積時の洪水流は、後背湿地に流入した当初には、やや速く、その後遅くなり、砂を沈積した後ほぼ停止し、この上に水漬かりの状態で堆積相Eの泥や堆積相Bの泥質砂が載ったと想像される。第5層や第27層は流路内に堆積したため、やや高次の流況を示すのであろう。堆積相Fの第32～34層では、上位の層ほど低次の流況で、流速も小さい。このことは、河道が放棄される直前の流況を示すと思われる。

6 調査地点付近の堆積環境の変化と地形発達

本節では、調査地の年代層序(chronostratigraphy)を基本に、これまでに述べた堆積物の特徴から、同地点付近の堆積環境の変化とこれに関連する地形発達について考える。

弥生時代(堆積相F)：調査地点で観察した土層断面の最下部には、堆積相Fの河道堆積物が見とめられた。その年代は埋没深度から、弥生時代後半と思われる。この堆積相の上位には、ポイントバーや自然堤防の堆積物を伴わないことから、河道は埋積後、放棄されたと推定される。河床を構成する堆積物や河道の横断面が不明なため、河川の形成にかかわる地形的要因を推測できないが、おそらく後背湿地の泥層をいくぶんかは下刻して流下する後背湿地の排水河川であったと思われる。河道埋積後、調査地付近は堆積相Eの静水域の堆積環境に変化する。

古墳時代～鎌倉時代(堆積相C-Eの交替)：河道埋積後、静水域の堆積環境が、第11層まで続く。直上の遺構・遺物帯Ⅲの年代からみて、第11層は鎌倉時代頃の堆積層と考えられる。この後背湿地にはしばしば堆積相Cのクレバスプレー堆積物が流入した。第21層以下のクレバスプ

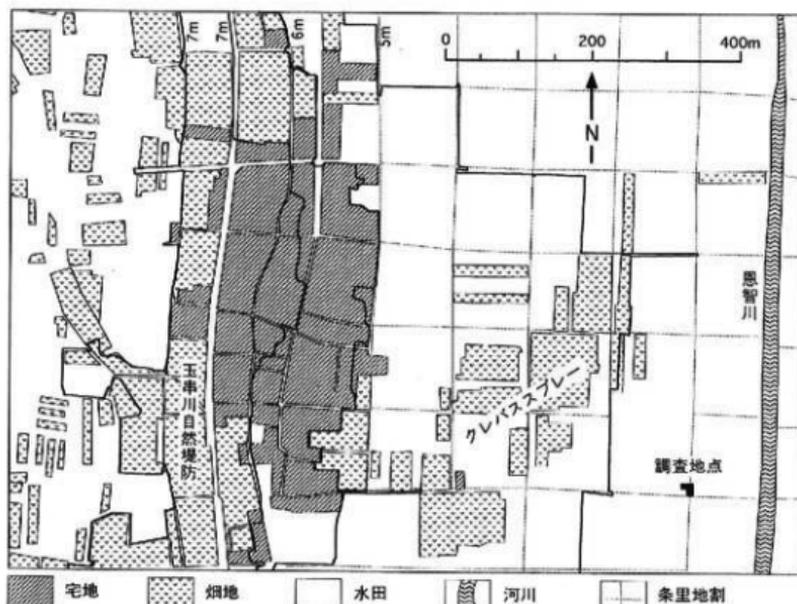
レー堆積物と、これより上位の堆積物とは堆積時の流況が異なり、前者の堆積作用のほうがより活発であった。その原因として、本川からの距離が短かったとも考えられるが、河内平野一帯の河川地形の変化とも考えられる。具体的には、旧大和川の土砂流出量の増大、より急速な自然堤防帯の発達、同川の流れ様式の変化などであるが、今後の課題としたい。上述した河道堆積物の年代を弥生時代後半とすると、第21層までの堆積相C-Eの交替の年代は古墳時代から奈良時代に相当すると思われる。

第20層から第11層までは、堆積相Eの泥層が厚くなり、堆積相Cの砂礫堆積時の流況も低次化し、相対的により静穏な後背湿地の堆積環境に変化した。調査地では、足跡のみであるが、この時期にはじめて人間活動がおよぶ(遺構・遺物帯Ⅲ)。この層は、上位の遺構・遺物帯の年代から、平安時代～鎌倉時代に相当すると思われる。

室町時代(堆積相C-EへのDの挟在)：堆積相Dの層は、室町時代の遺構・遺物帯Ⅲに対応する。調査地付近には耕作地(おそらく水田)が営まれるようになった。しかし、クレバスプレー堆積物が頻繁に堆積しており、耕作地はしばしばその下に埋没している。堆積相Dは堆積相Eの泥を材料とするブロック土と堆積相Cの砂礫が混じったものであろう。洪水流に対するなんらかの人間活動があったと考えられるが、その実態を明らかにするには、より広範囲な調査が必要である。

クレバスプレー堆積物の古流向から、これらの砂礫の供給源は調査地の西方にあると考えられる。昭和17年当時の等高線と土地利用を示す地形図(第59図)を参照すると、調査地の西方約450mの玉串川自然堤防の東縁から、北東に向かって拡がる畑地の分布域がみとめられる。畑地の間隙にあたる水田はいわゆる「掻上げ田」で、畑地は盛土によって造成されているはずである。ただし、周囲の水田とほぼ等しい高さにこの掻上げ田を掘削し、なお畑地を造成し得る土砂の絶対量が存在したということは、畑地の分布域が周辺よりも本来高かったことになる。分布域の位置や形も考慮して、この高まりは玉串川の自然堤防(当時あっては人為的な改変が加わっていた可能性もある)の破壊によって形成されたクレバスプレーと判断される。また、調査地の遺構・遺物帯に含まれる堆積相CとDの砂礫はその縁辺部の堆積物と考えられる。クレバスが発達すると、そこに本川が移動してしまうことがあるが、その過程でクレバスプレー堆積物は上方粗粒化するといわれる(Bridge, 1984; Farrell, 1987)。粒度分析を怠ったが、第55図に示したように、これらの砂礫は第10層から第6層にかけて上方粗粒化している。このことから、調査地西方のクレバスプレーは室町時代に急速に発達したのであろう。また、玉串川は遅くとも鎌倉時代、古く見積って平安時代には現在の位置に河道を形成していたと考えられる。

江戸時代(堆積相C)：第4・5層は遺構・遺物帯Ⅱに対応し、江戸時代頃の堆積層と考えられる。この時代にもクレバスプレーの堆積作用が継続したと思われるが、室町時代に比べて砂礫は細粒化し、懸濁物質も増加している。このことは、玉串川の堤防周辺の護岸や水路の設置といった土地改変が進み、クレバスプレーの発達が抑制されたことを示唆する。しかし、



第59図 池島第11次調査地周辺の地形と土地利用（昭和17年当時）

調査地付近は耕作地とはならず、玉串川からの洪水流が流入する低地であったと考えられる。調査の結果、溝が検出された。低地の排水のためかもしれないが、短期間で埋積されている。

江戸時代～現代（堆積相B-A）：堆積相Bの第3層は、上下の層準の年代から、江戸時代から近代までの堆積層と考えられる。同相の堆積環境については、排水河川近傍の低地で、ときには排水良好な状態になると考えた。この時代には大和川は付け替えられ、調査地西方のクレバススプレーの発達も停止した。また、調査地の東側を北流する思智川は後背湿地の排水河川として築堤・固定されていたはずである。ただ、洪水流は調査地付近の後背湿地に流入したであろう。思智川の堤防の内側に沿っては池のような排水路あるいは遊水池のようなものが広がっていたと想像される。調査地付近は、このような低地が埋積された後に再び耕作地となった。その年代は遺構・遺物帯Iが現代の遺物までを含むことから、古くても近代以降と考えられる。

7 まとめ

池島遺跡第11次発掘調査では地表下約5mまでを調査した。この結果、弥生時代後半から現代までの堆積層とともに、平安時代頃の足跡面、室町時代の畦畔・溝・杭列を伴う耕作地跡、江戸時代の溝などの遺構が検出され、若干の遺物が出土した。本報告では、その概要を述べ、自然堤防の後背湿地に位置する調査地付近における過去千数百年間の堆積環境の微細な変化を、

人為的な土地改変の影響も考慮しつつ検討した。その際、後背湿地に河川から流入する砂礫の堆積機構や供給源の推定が必要と思われたため、調査地とその周辺で採取した砂礫試料の粒度分析、鉱物・岩石種組成の分析を行った。また、砂礫層堆積時の流況についても推測した。この結果、(1)弥生時代には、おそらく後背湿地の泥層を下刻した河川が調査地を横切っていた、(2)その後古墳時代以降しばしばクレバースプリーの砂礫が流入しており、とくに宝町時代には調査地西方の下串川自然堤防から発達するクレバースプリーの砂礫が頻繁に耕作地を埋没させた、(3)江戸時代以降にはおそらく土地改変の影響を強くうけた土砂の流入があった、ということが推測された。これらのことについて今後、隣接地での調査結果とも照合し再検討を加えてゆきたい。

注

- (1) 後述する堆積相Bと思われる。
- (2) 水谷(1987)の定義による。外水氾濫は「河道の外へ河川水が氾濫する」ことで「越流」と「破堤」がある。内水氾濫は堤内地を流れてきた水やそこに降った雨水がはけきれないことによって、すなわち流入量が排水量を上回ることによって生ずるもの」と定義される。
- (3) Wentworth(1922)の粒径区分における中礫(pebbles)を、Friedman et al.(1992)に従い、極粗粒の中礫(very coarse pebbles, 直径64~32mm)、粗粒の中礫(coarse pebbles, 直径32~16mm)、中粒の中礫(medium pebbles, 直径16~8mm)、細粒の中礫(fine pebbles, 直径8~4mm)に細分した。ただし、極細粒の中礫(very fine pebbles, 直径4~2mm)は細礫(granules)と呼ぶ。
- (4) 考古遺跡で検出される足跡のほとんどは、泥層上面のくぼみに砂礫が充填されたものである。このなかには、ロードキャストを誤認しているものが含まれるのではないかと思われる。今回の調査で検出されたヒトの足跡も疑問を残す。
- (5) 岩石名の表記は都城・久城(1975)に従った。
- (6) 本図は、東大阪市下水道整備事業関連の発掘調査事業の一環として、㈱パスコに委託・作成した「東大阪市文化財基本地形図」の一部を改変したものである。同図は、大阪府が昭和36年に作成した地形図を標定基準にし、大阪市所有の昭和17年航空写真にもとづいて当時の地形を復原したものである。

文献

- 阿部嗣治・上野利明(1981)北島池遺跡・池島遺跡発掘調査概報。「東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集—1980年度」、東大阪市遺跡保護調査会、p.31-72。
- 伊勢屋ふじこ(1982)茨城県、桜川における逆グレーディングをした洪水堆積物の成因。地理学評論、55-9、597-613。
- 大阪文化財センター(1991)「池島・福万寺遺跡発掘調査概要 89—1—6調査区の概要」。
- 萩田昭二(1973)河内郡・若江郡糸里の復原。「池島町の糸里遺構—調査概報」、東大阪市遺跡保護調査会、p.17-38、PL.5。
- 岸本道昭(1986)「池島遺跡発掘調査概要II—思智川治水緑地建設に伴う発掘調査(越流堤部その1)」、大阪府教育委員会、p.23・25。

- 阪田育功(1986)「池島遺跡発掘調査概報Ⅰ—八尾福万寺地区」。大阪府教育委員会、p.49、50。
- 藤井直正・竹下賢・萩田昭二(1973)「池島町の条里遺構一調査概報」。東大阪市遺跡保護調査会。
- 水谷武司(1987)「防災地形(第2版)—災害危険度の判定と防災の手段」。今古書院、p.53-60。
- 都城秋穂・久城育夫(1975)「岩石学Ⅱ—岩石の性質と分類」。共立全書205、共立出版、p.8-9。
- 森島康雄(1987)西ノ辻遺跡における中世土器の編年。「神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概報Ⅳ」。大阪府教育委員会、p.152-163。
- 吉松敏隆(1982)染色による造岩鉱物の観察。地学団体研究会編「土と岩石」(自然をしらべる地学シリーズ3)。東海大学出版会、p.81-83。
- Allen, J.R.L. (1965) A Review of the Origin and Characteristics of Recent Alluvial Sediments. *Sedimentology*, 5, 89-191.
- Benson, M.A. (1973) Measurement and Estimation of Flood Discharges. In *Hydrometry*, Vol.1, Unesco-WMO-IAHS, Unesco, 355-360. (榎根勇(1980)「水文学」(自然地理学講座3)。大明堂、p.244。より引用)
- Briggs, D. (1977) *Sediments*. Butterworths, 22-54.
- Bridge, J.S. (1984) Large-scale Facies Sequences in Alluvial Overbank Environments. *Journal of Sedimentary Petrology*, 54, 583-588.
- Friedman, G.M. (1961) Distinction between Dune, Beach, and River Sands from Their Textual Characteristics. *Journal of Sedimentary Petrology*, 31, 514-529.
- Friedman, G.M., Sanders, J.E., and Kopaska-Merkel, D.C. (1992) *Principles of Sedimentary Deposits: Stratigraphy and Sedimentology*. Macmillan, 225-229.
- Farrell, K.M. (1987) Sedimentology and Facies Architecture of Overbank Deposits of the Mississippi River, False River Region, Louisiana. In F.G. Etridge, R.M. Flores, and M.D. Harvey(eds.) *Recent Developments in Fluvial Sedimentology—Contributions from the Third International Fluvial Sedimentology Conference*. SEPM Special Publication No. 39, pp. 111-120.
- Fritz, W.J. and Moore, J.N. (1988) *Basics of Physical Stratigraphy and Sedimentology*. Wiley, 183-203.
- Folk, R.L. and Ward, W.C. (1957) Brazos River: a Study in the Significance of Grain Size Parameters. *Journal of Sedimentary Petrology*, 27, 3-26.
- Humphries, D.W. (1992) *The Preparation of Thin Section of Rock, Minerals, and Ceramics*. Oxford Science Publications, p.58-59.
- Rubin, D.M. and McCulloch, D.S. (1980) Single and Superimposed Bedforms: a synthesis of San Francisco Bay and Flume Observations. *Sedimentary Geology*, 26, 201-231.
- Reineck, H.-E. and Singh, I.B. (1980) *Depositional Sedimentary Environments* (2nd ed.). Springer p.257-298.
- Wentworth, C.K. (1922) A Scale of Grade and Class Terms for Clastic Sediments. *The Journal of Geology*, 30, 377-92.
- Wolman, M.G. and Leopold, L.B. (1957) River Floodplains: Some Observations on their Formation. *U.S. Geological Survey Professional Papers*, 282c: 87-107.

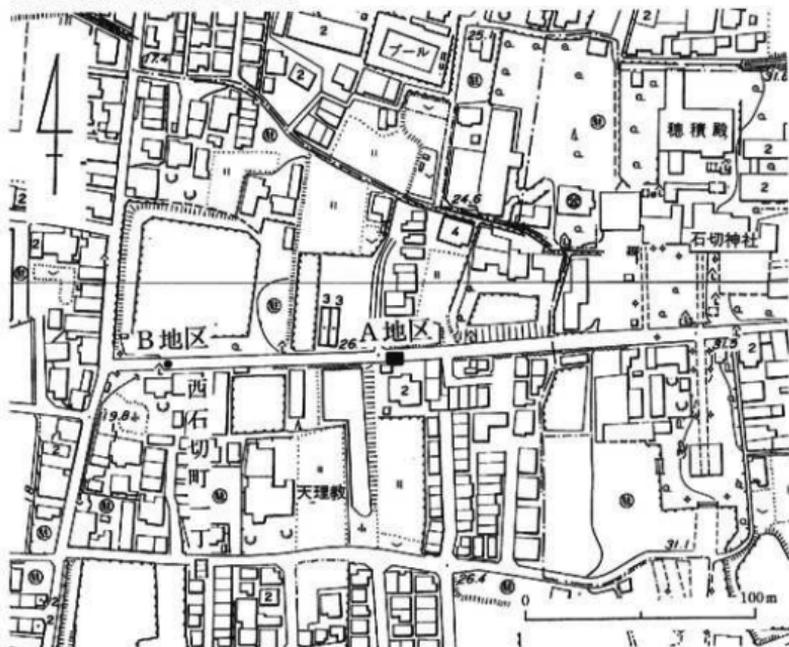
第11章 神並遺跡第16次調査報告

1 はじめに

今回の調査は公共下水道築造工事第34工区に伴うものである。築造工事が推進工法であるため、調査は約 6.4×4 mの発進坑(約 25.6m^2)1個所と到達坑1個所について実施した。ともに石切神社参道となっている西石切町1丁目の市道上に位置し、昼間は徒歩通行者が多いため夜間の調査となった(第60図)。調査地のすぐ南では、共同住宅建設に伴う調査(神並遺跡第10次調査)が行われ、平安時代前期の掘立柱建物が1棟検出されている。このため、本調査は遺構の確認を主目的とし、少面積にもかかわらず遺構検出を第一とした。

発進坑は鋼矢板打設時に立会して本調査を行い、到達坑は径約2 mのライナープレート工法のため掘削に立ち会い土層観察を行った。期間は1992年10月24日から10月25日である。発進坑をA地区、到達坑をB地区とし、以下に調査成果を略述する。

なお水準高は石切神社前のK.B.M.を基準としたT.P.値を用い、国土座標は移設しなかった。このため図中の方は磁北を示す。



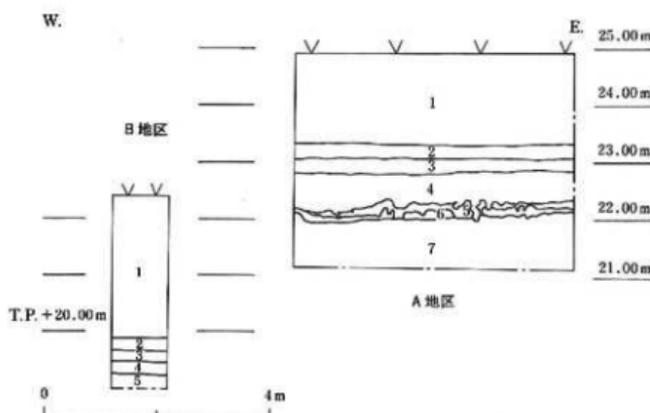
第60図 神並第16次調査地位位置図(S=1/2500)

2 調査概要

1) A地区(第61・62図)

本調査区の層位は上層から順に下記の通りであった。

- 第1層 アスファルト及び盛土。
- 第2層 黒灰色砂混砂質シルト層。旧表土と考えられる。
- 第3層 褐灰色砂礫混中粒砂層。
- 第4層 黒色砂礫混粘土層。
- 第5層 黄褐色シルト質細砂層。
- 第6層 暗灰黄色シルト質細砂層。
- 第7層 黄褐色砂礫混シルト層。



第61図 神並第16次土層断面図(S=1/100)

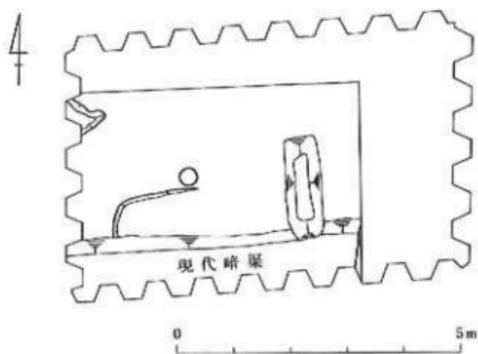
第3層の褐灰色中粒砂層から土師器細片が出土したほかに遺物はない。出土遺物の中に円化可能なものはなく、時期も不明である。調査は第3層中までを機械によって掘削したのち、人力によって6層上面を精査した。

結果、楕円形状

2) B地区(第61図)

本調査区の層位は上層から順に下記の通りであった。

- 第1層 アスファルト及び盛土。
- 第2層 黒灰色砂混砂質シルト層。旧表土と考えられる。
- 第3層 褐灰色砂礫混中粒砂層。A地区第3層相当層。
- 第4層 黒色粘土混砂礫層。こぶし大の礫を含む。A地区第4層相当層。
- 第5層 黄褐色砂礫混シルト層。A地区第7層相当層。



第62図 神並第16次A地区第6層上面遺構平面図(S=1/100)

各層から遺物は出土せず、遺構は検出されなかった。本地区の第3層から第4層も流水による堆積と考えられる。

3) 遺構(谷) (第63図)

A、B両地区とも流水による堆積層が検出された。A地区では砂礫が小さく、第5、6層の状況から流れの縁辺部に近いことがうかがわれる。B地区ではこぶし大の礫を

含むなど、流水中心部の堆積状況を示す。以上のことから、調査地の市道を中心に北東から南西方向に流れる自然流路=谷が存在したと思われる。

3 まとめ

今回の調査では住居跡などの遺構を検出することはできなかったが、谷地形を確認することができた。堆積土から土師器細片が出土しただけで、遺物によって埋没した時期を特定することはできなかった。肩部を検出することができず、規模を明らかにすることもできなかった。しかし、近鉄東大阪線建設に伴う調査や第二阪奈有料道路建設に伴う調査によって検出されている谷地形は、奈良時代頃に浅くなり、中世には完全に埋没している。また、今回の調査地の東約200mには白鳳期創建と考えられる法通寺跡(現在の石切神社)が存在する。南の第10次調査地では平安時代前期の掘立柱建物が検出されている。このように周辺の状況からみると、今回の調査によって検出された谷地形も同様に、奈良時代前後にはすでに埋まり、中世には完全に埋没している可能性が高い。

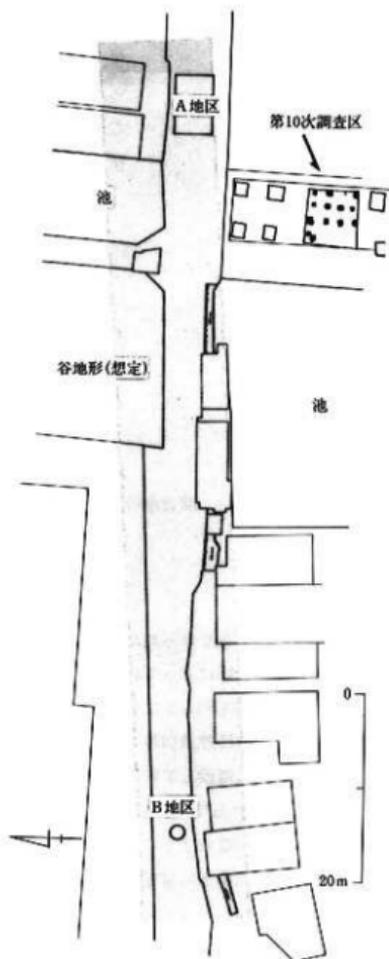
註)

(1) 未報告

(2) 大阪府教育委員会『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要・I』1984

財団法人東大阪市文化財協会『西ノ辻遺跡第10次現地説明会資料』1984

財団法人東大阪市文化財協会『西ノ辻遺跡第16・17次現地説明会資料』1985



第63图 谷状地形概念图(S=1/600)

第12章 参考資料・若江遺跡第52次調査報告

1 はじめに

若江遺跡の第52次発掘調査地点は、東大阪市若江北町3丁目53番地に位置する。ちょうど蓮浄寺南側から府道大阪東大阪線(四条長堂線)までの長さ約30mの南北方向の道路にあたる。今回の発掘調査は、そこに下水道の排水管を埋設する工事に伴って実施した。

調査の地区割は、排水管1本分(長さ約4m掘方幅約75cm)を1区画として、北から南へ52-A~Jまでの10区画に区分し、1日2区画(排水管2本分)の工程で調査を進行した(第64図)。

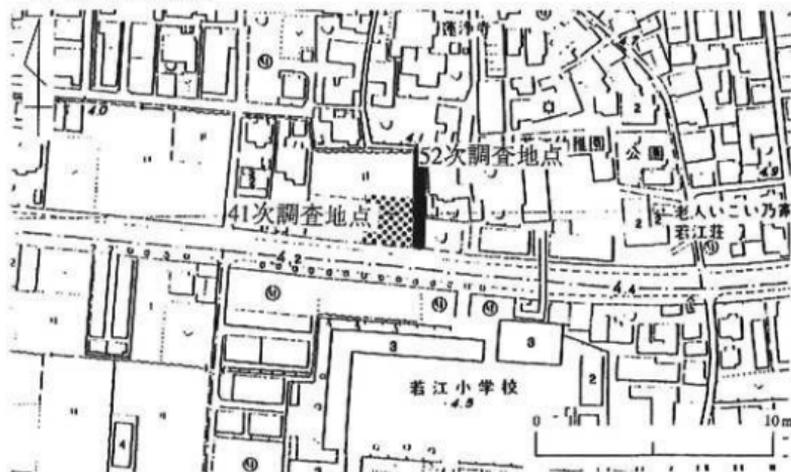
掘削方法は、種々の事情により管底(深さ120~160cm)まで機械によって掘削し、主として上層断面の観察を中心に調査を行なった。ただし、機械によって掘り上げられた土は、舗装・盛土・攪乱土と遺物包含層とを別置し、包含層に関しては遺物の採集を行なった。

また調査区の南端は、若江遺跡第41次調査地点が隣接し、その成果によって今回の調査でも若江城の塼が検出されると予想されたので、この部分は人力で掘削した。

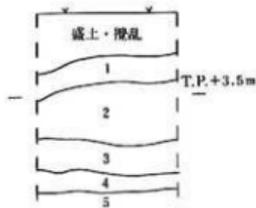
なお遺構実測の基準には、国上座標第Ⅵ系を使用した。水準高はT.P.値を用いた。また土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準じた。

2 調査概要

1) 基本層序(第65図)



第64図 若江第52次調査地位位置図(S=1/2500)



第65図 基本層序

2) 遺構

主な遺構は、52-F区で近世の井戸、また52-H・I・J区では、若江遺跡第41次調査で検出された若江城の堀と同じ堀を検出した。このことによって、若江城の堀は、さらに東へ伸びるものと推定できる。以下各遺構について述べてゆくことにする。

井戸1 素掘りの井戸である。直径1.6m、深さ1.3m以上を測る。上部は攪乱によって削りとられており、掘り込まれた遺構面はあきらかでない。埋土には瓦が含まれており、この瓦は近世のもので、人為的に構築されたのではなくて、投げ込まれた様相を呈していた。このコンテナ3箱分以上の瓦以外に出土遺物はない。よってこの井戸は近世に属するものと考えられる(第66図)。

若江城の堀については、3条(堀1・堀2・堀3)を検出した。以下各堀について述べてゆく(第68図)。

堀1 幅4.4m深さ0.5m以上を測る。堀内の堆積層は4層以上に分けられる。まず中世の段階で、植物遺体を多く含む暗青灰色シルト混粘土(7層)が堆積し、その後オリーブ黒色シルト混粘土(6層)、細礫を少し含む暗青灰色中粒砂混極細粒砂(5層)、炭を少し含む灰オリーブ色細粒砂混シルト(4層)の順に堆積し、この堀は埋没したものと考えられる。

堀2 幅1.4m深さ0.6m以上を測る。この堀は埋没の最後の段階で灰色粘上混シルト(8層)が堆積した。

堀3 幅1.8m深さ0.2m以上を測る。この堀は埋没の最後の段階で中粒砂を少し含む灰色極細粒砂(10層)が堆積した。

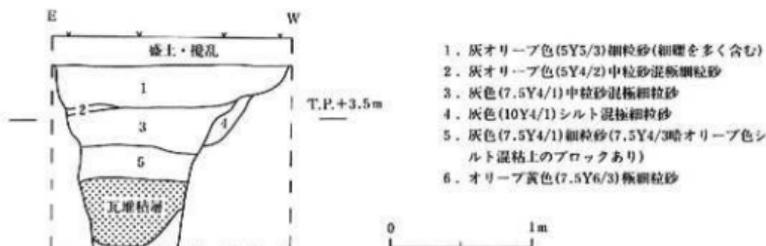
これらの堀が設けられた順序は、最初に堀2と堀3が設けられ、ほぼ同時期にある程度埋没した段階で堀1が堀2を切り込んで設けられたと推定される。その後この堀1もある程度埋没した後、しばらくの間は窪地ようになっていたようだが、近世になってから中粒砂を少し含む灰色シルト混細粒砂(3層)と細礫を多く含む灰オリーブ色細粒砂混中粒砂(2層)が堆積して完全に埋没した。しかしまだこの段階では北から南に向かってわずかに下る地形であったのが、灰色細粒砂混極細粒砂(1層)の堆積によって現在に見る平坦な地形になったものと考えられる。

3) 遺物

今回の調査によって出土した遺物は、中世から近世にわたる各時期の土器・陶器・磁器・瓦

アスファルト・盛土・攪乱層・近現代の堆積土

- 1 灰オリーブ色(5Y5/2)細粒砂(細礫を少し含む)
- 2 にふい黄色(2.5Y6/4)中粒砂混粘土
- 3 灰オリーブ色(7.5Y6/2)粗粒砂
- 4 灰オリーブ色(5Y5/2)細粒砂
- 5 灰色(5Y5/1)粘土混シルト(炭を少し含む)



第66図 若江第52次井戸1断面図(S=1/40)

類などがある。ここではそれら出土遺物のうち図化できたものを掲げる(第67図)。

なお、出土遺物のうち、土師器皿の型式分類は、古村博忠氏の若江遺跡第25次発掘調査報告⁽¹⁾に従い、羽釜の型式分類と編年に関しては森島康雄氏の年代観に従った⁽²⁾。以下各遺物について述べてゆく。

1は瓦質の深鉢である。底径20.5cm、残存高8.1cmを測る。復原すると器高は約20cmになるものと思われる。形態は、底部が平底で逆台形の脚が3個所に付く。体部は直線的でわずかに外傾し口縁部に至るものと思われる。胎土は密で、直径0.2mmの白色砂粒をわずかに含む。調整は体部内外面共にナデで、体部と底部との接合部には強いナデを施す。また脚部は指押さえによって接合している。焼成は良好で十分に薫焼されている。色調は外面が黒色(N1.5/)、で内面は黒色(10Y2/1)からオリーブ黒色(5Y3/1)、また断面は灰白色(7.5Y7/2)を呈している。15世紀頃のものと考えられる(遺物包含層出土)。

2は瓦質の羽釜である。口径29.2cm、残存高8.6cmを測る。形態は球形の胴部に短い鈎を付け、口縁部は段を持ちわずかに内傾する。口縁端部は外方へ少しつまみ上げ気味におさめ、内傾するなどらかな面を持つ。胎土はやや粗く、直径0.2~1mm大の砂粒を多く含む。調整は、外面口縁部および鈎接合部に強いナデを施し、体部は篋削りを施す。また内面には刷毛目を残す。焼成は良好である。器表面は、特に外面の剥離が著しい。色調は外面が黒褐色(2.5Y3/1)から黒色(N3/)で、内面は暗灰色(N3/)から黒色(N2/)である。また断面は灰白色(5Y8/2)からいり褐色(7.5YR5/3)を呈する。なお内面の一部に暗赤褐色(7.5YR3/1)の炭化物が薄く付着している。この羽釜はH型式で、時期は15世紀の後半と考えられる(堀1内出土)。

3も瓦質の羽釜である。口径22.4cm、残存高10.4cmを測る。形態は、内傾する口縁部の外面に2条の凹線を持ち、端部は短く上方に折り曲げて少し直立し、尖り気味に丸くおさめる。また鈎の先端部も口縁端部と同様にやや尖り気味に丸くおさめる。胎土は非常に緻密で、よく水篋されていることをうかがわせる。調整は内外面共に丁寧なナデを施す。特に内面は平滑に仕上げられている。焼成も非常に良好で、十分に薫焼されている。その色調は、外面が暗灰色(N3/)から黒色(N2/)、内面は暗灰色(N3/)から黒褐色(5YR3/1)で断面は灰白色(7.5YR8/2)を呈する。非常に丁寧に作られた羽釜で、I型式のうちでも大和産のものと考えられ、時期は15世紀中頃と思われる(遺物包含層出土)。

4は土師質の羽釜である。口径25.8cm、残存高は6.1cmを測る。形態は口縁部の外面に段を持ち、端部は面をもっておわる。また鈿の端部は丸くおさめている。調整は外面の剥離が著しくその調整痕を認めにくい、鈿の接着部には強いナデを施している。また内面は横方向の刷毛目が施されている。焼成は良好である。色調は、外面が灰白色(10YR8/2)から淡橙色(5YR8/4)で内面はにぶい橙色(5YR6/3)から褐灰色(5YR5/1)、断面は灰色(N5/)を呈している。この羽釜はG型式で、15世紀中頃のものと考えられる(遺物包含層出土)。

5は土師器褐色系の小皿である。口径8.5cm、器高2.1cmを測る。形態は、平面をなす底部より体部が外反して立ち上がり、口縁部に至る。端部は少し立たせておさめる。胎土は密で、金雲母・石英・角閃石を少し含む。色調は、外面がにぶい褐色(7.5YR6/3)、内面はにぶい橙色(7.5YR7/3)からにぶい褐色(7.5YR6/3)で、断面もにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。この皿は小皿Gで、時期は15世紀後半頃と考えられる(遺物包含層出土)。

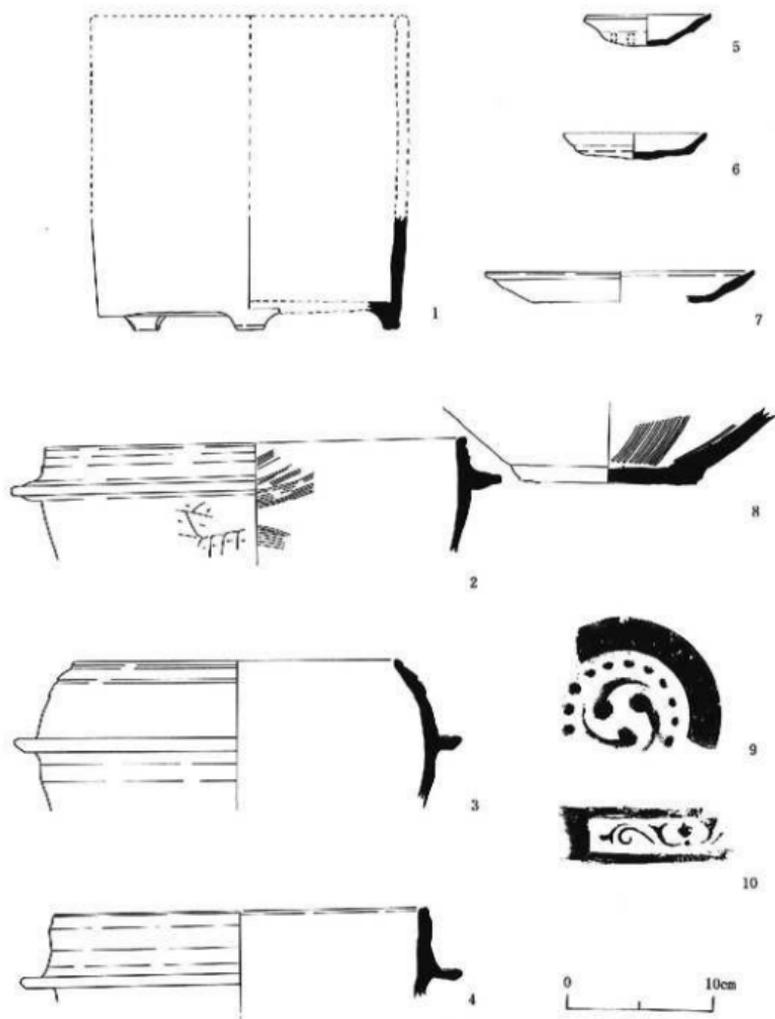
6は土師器褐色系の中皿である。口径9.8cm、器高は1.8cmを測る。形態は浅い凹面を持つ底部から体部が屈曲して外上方に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は少し立たせて丸くおさめる。胎土は密であり金雲母・角閃石を少し含む。調整は底部外面に指押しえ痕が残り、他は内外面共にナデを施している。焼成は良好で、色調は内外面および断面共ににぶい黄橙色(10YR7/3)を呈している。型式は中皿Cで、15世紀中から後半頃のものと考えられる(52-E区遺物包含層出土)。

7は土師器白色系の大皿である。口径が18.6cm、残存高は2.1cmを測る。形態は、ゆるやかな凹面を持つ底部より体部が屈曲して丸みを持ちながら外上方に立ち上がり、口縁端部は少し尖らせながらおさめる。胎土は密である。調整は底部外面に指押しえ痕が残り、他は内外面共にナデを施している。焼成は良好である。色調は内外面および断面共に灰白色(10YR8/1)を呈している。型式は大皿Eで、時期は15世紀後半頃と考えられる(堀1内出土)。

8は備前焼播鉢の底部である。底径12.4cm、残存高5.7cmを測る。形態は、平坦な底部から直線的に約35度の角度で体部に至る。すり目は10条1単位で、この1単位の幅は3.4cmを測る。胎土は密であり、直径1～2mm大の白色砂粒を数個含む。焼成は良好である。色調は、外面が赤褐色(10R5/3)、内面はにぶい赤褐色(7.5R4/3)から暗灰色(N3/)で断面もにぶい赤褐色(7.5R4/3)を呈している。16世紀頃のものと思われる(遺物包含層出土)。

9は近世の巴文軒丸瓦の瓦当部である。直径14.2cm、内区直径5.8cm、蓮珠直径0.6cm、周縁幅2.8cm、周縁高は0.7cmを測る。形態は右廻りの三つ巴文を内区に配し、外区には11個の蓮珠が認められる。復原すると16個の蓮珠が配されていたと思われる。調整は瓦当面・瓦当裏面共にナデが施されている。焼成は良好である。色調は表面が暗灰色(N3/)、断面は灰白色(10Y8/1)を呈している(井戸1出土)。

10は唐草文軒平瓦である。退化した均整唐草文で、その時期は近世である。瓦当高4.0cm、頸幅2.5cm、周縁高0.6cm、周縁幅0.7cmを測る。瓦当面には左右対象の唐草文を配し、中心部には三葉の蓮華文を配す。胎土は粗く、直径0.1～1mm大の白色砂粒を多く含み、また直径0.1～0.3



第67图 若江第52次出土遺物実測図(S=1/4)

mm人の気泡も多く存在する。調整は、全体的に横位のナデが施されているが、特に平瓦部と頸部との接着面には非常に強い横位のナデが認められる。焼成は良好である。色調は、瓦当面が灰色(N4/)で瓦当裏面も灰色(N5/)、断面は灰白色(10Y8/2)を呈している。この種の瓦は、若江遺跡第38次調査の他、大坂城三の丸跡など各地で出土している(井戸1出土)。

以上、出土遺物のうち代表的なものについての観察をした。その結果この調査で出土した遺物は、だいたい15世紀後半という時期にまとまりをみせている。これは若江城の存続期間内におさまるものであり、これら遺物は、若江城において使用されたものとみて間違いないだろう。

しかし今回の調査では、今までの発掘調査の成果や文献によって確認されている、若江城の廃絶時期に相当すると思われるような遺物は出土しなかった。したがって52-H・52-I・52-J区において検出された堀1・堀2・堀3の廃絶時期についても慎重に考えるべきである。

3 まとめ

今回の調査地点は、かつての若江城城内と推定される地域であり、そこにおいて城に伴う堀を検出することができた。なお今回の調査で検出した堀1・堀2・堀3は、それぞれ第41次調査で検出された堀3・堀6・堀8に相当するものである。

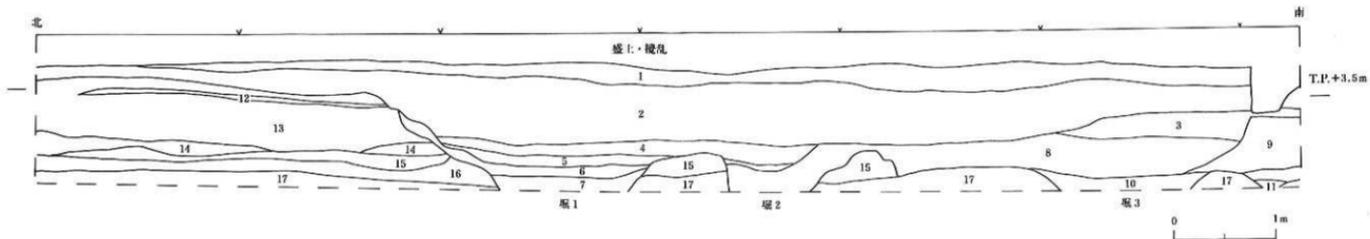
若江城については、いままでの調査・研究の成果によって、14世紀終わり頃に畠山氏によって築かれ、文明9(1477)年までは河内国の守護所となり、守護代として遊佐氏が居城し、その後永禄11(1568)年に三好長慶の養子、義継によって再び築かれ、織田信長によって義継が滅ぼされた後は、整備されて池田教正に譲られたとされている。この城の最後は、天正8(1580)年頃廃城になったと推定されている。

いっぽう、若江寺に関する遺構・遺物は、今回の調査で確認することができなかった。しかし今までの調査で出土した遺物等によってこの寺が、白鳳期には存在していたと推定されている。また文獻(『尊意贈僧正傳』)によれば、元慶年間(877~885)には延暦寺の末寺であったこともわかっている。また中世には、天台浄土系の平等院の末寺になっていたらしい。特に若江寺に関しては、今後の調査成果に期待される。

註)

- (1) 財団法人東大阪市文化財協会「若江遺跡第25次発掘調査報告」1987
- (2) 森島康雄「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究VI』1990

X = -149,480



- | | |
|-----------------------------------|--------------------------------|
| 1. 灰色(SY4/1)細粒砂混極細粒砂 | 10. 灰色(10Y5/1)極細粒砂(中粒砂を少し含む) |
| 2. 灰オリーブ色(SY5/2)細粒砂混中粒砂(細粒を多く含む) | 11. 灰オリーブ色(SY5/3)細粒砂 |
| 3. 灰色(7.5Y4/1)シルト混細粒砂(中粒砂を少し含む) | 12. 褐色(10YR4/4)細粒砂(マンガン粒を多く含む) |
| 4. 灰オリーブ色(SY4/2)細粒砂混シルト(炭を少し含む) | 13. オリーブ黄色(SY6/3)極細粒砂混シルト(礫地層) |
| 5. 暗青灰色(2.5Y4/2)中粒砂混極細粒砂(細粒を少し含む) | 14. 灰オリーブ色(SY6/2)粗粒砂 |
| 6. オリーブ黒色(SY3/1)シルト混粘土 | 15. 灰オリーブ色(SY6/2)粗粒砂 |
| 7. 暗青灰色(5BG4/1)シルト混粘土 | 16. 灰色(10Y5/1)シルト混粘土 |
| 8. 灰色(7.5Y4/1)粘土混シルト | 17. 灰オリーブ色粗粒砂 |
| 9. 黒色(10Y2/1)極細粒砂混粘土 | |

第68図 若江第52次横断面図(S=1/40)

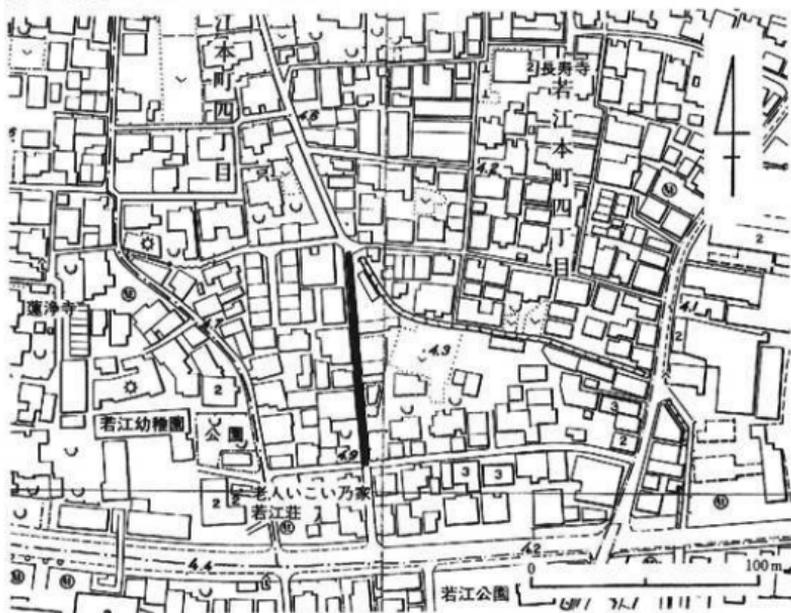
第13章 参考資料・若江遺跡第55次調査報告

1 はじめに

本調査は下水道部排水設備課の担当する下水管渠築造工事に伴うものである。調査地は東大阪市若江本町4丁目地内の私道で総延長約85m、幅約1m、現地表下約1.8mまでの開削工事に並行して実施した(第69図)。現地調査は中断を含め1991(平成4)年11月5日から11月19日まで行い、調査面積は約85㎡である。

これまで排水設備課担当の管渠築造工事については掘削の深度が浅いこともあり、本格的な発掘調査をほとんど必要としなかった。しかし今回の地点は若江遺跡中心部に位置し、遺物包含層が現地表直下に濃厚に遺存していることが明らかにされていた。このため関係機関の協議の結果、機械力と人力を併用する調査を行うこととなった。調査は土層堆積状況の把握と包含層の確認を目的とし、土層図の作成に力を注いだ。以下に調査成果を略述する。

なお実測の基準には国土地標第Ⅶ系を、水準高にはT.P.値を用いた。図中の方位は特に表記がないかぎり国土地標北を示す。また上色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準十色帖』に準じた。



第69図 若江第55次調査地位置図(S=1/2500)

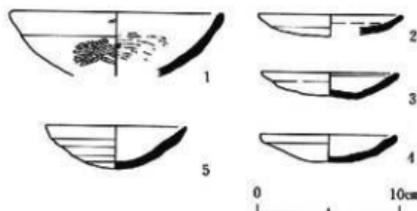
2 調査結果

調査区内の基本的な層位は上層から、アスファルト、盛上、旧耕土、近世遺物包含層(旧床上)中世遺物包含層、黄色細砂層の順であった(第70図)。中世包含層は3時期の整地層で構成されている。出土遺物から上・中層は16世紀頃、下層は13世紀頃の堆積と思われる(第72・73図)。近世包含層上面と各整地層上面と整地上層の下面で遺構を確認した。黄色細砂層から遺物は出土しなかったが、これまでの調査結果から、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての流水作用による堆積層と考えられる。

遺構はピット・上墳・落ち込み・流路等がある。多くは包含層と一緒に掘削したため詳細な規模等は明らかにしない。

調査区南部のSX01は整地中層上面から掘られており、西壁断面で約13m、深さ約0.5m以上を測る。埋土の状態から人為的に埋められたと思われる。SX02は整地上層から掘りこまれている。断面で7m以上、深さ約0.5mを測る落ち込みである。北半は撓乱のため不明である。埋土はいくつかに分層でき、その状況から一挙に埋められたものと思われる。

調査区中部のSK01は黄色細砂層上面で検出した。楕円形の土壌の東半分を検出したと思われる。



第71図 若江第55次SK01出土遺物(S=1/4)

南北3m以上、東西60cm以上、最深は約40cmを測る。瓦器や土師質皿が出土し、12世紀後半頃に埋まったと考えられる(第71図)。SK02も黄色細砂層上面で検出した上墳で、南北約100cm、東西40cm以上、最深約20cmを測る。二段落ちになっていることから柱穴と考えるべきかもしれない。黒色土器A類

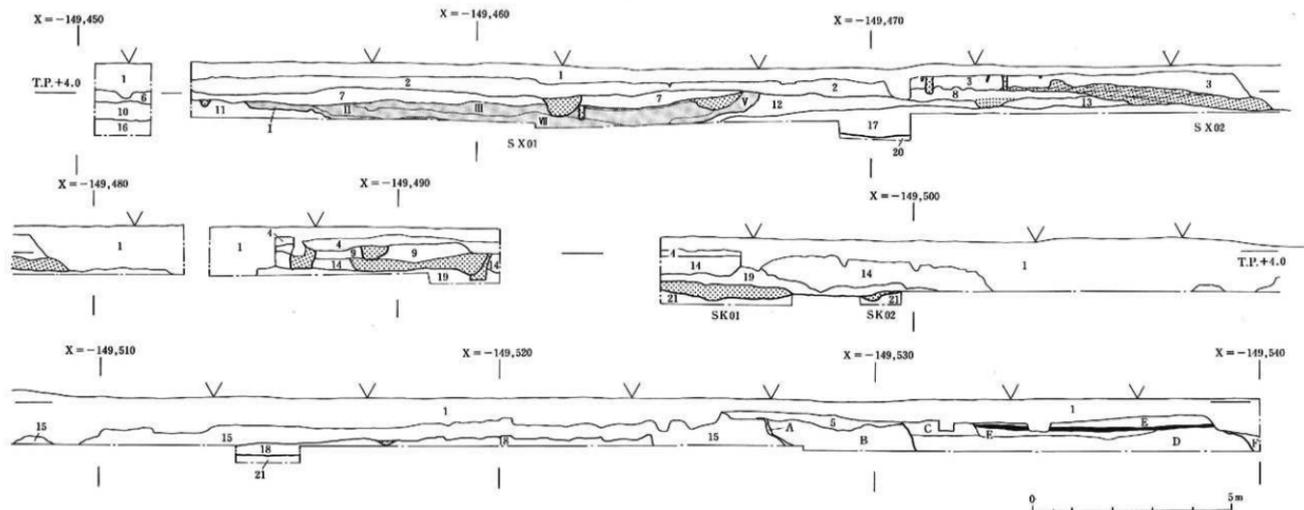
(内黒)や灰釉陶器等が出土した。平安時代前半に埋まったと考えられる(第72図)。

調査区北部では流路を検出した。調査地の北を流れる美女堂川の旧流路あるいは氾濫時の堆積と考えられる。重複から4時期に分けられ、最も古いものは整地中層上面から認められる。北端の堆積が最も新しく、現状のように暗黒化される以前と思われる。遺物は出土しなかった。

出土遺物のほとんどは13から16世紀にかけての土師質皿等で占められる。瓦類は非常に少ない。木製品は漆が土に貼りついた状態で遺存していた漆器碗を1点検出したのみである。実測図については一覧表を参照されたい。なお、鍋台としたものは七輪等のコンロの上に鍋を置く時に使用される器台である。上に向かって開く形で図にしたが、天地が逆かもしれない。

3 まとめ

幅1mという狭い範囲の調査であったが、若江遺跡を解明する重要な資料を得られた。特に古代の遺構はこれまで検出例がほとんどなく、貴重な資料となった。今後の調査や資料整理によって、さらに若江の歴史がはっきりとされることを期待したい。



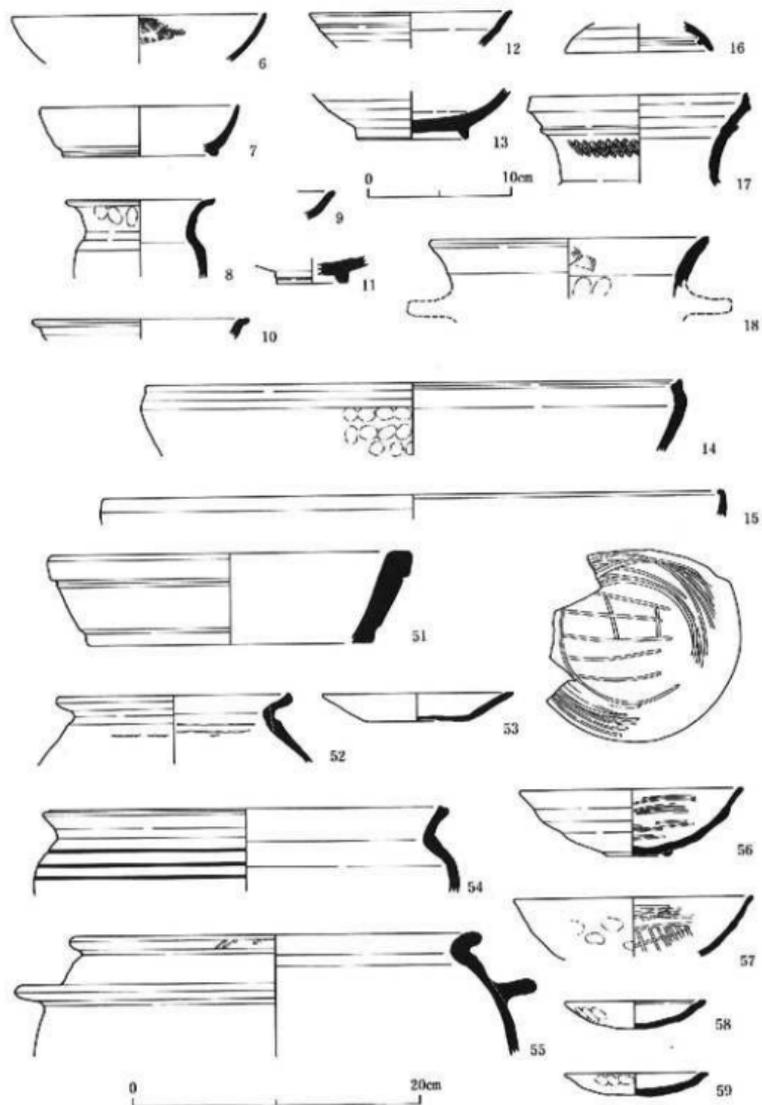
1. アスファルト・盛土・山崩土・擁壁
2. 近世包含層2.5Y5/2暗灰黄色砂混砂質シルト
3. 近世包含層10YR5/4に黄褐色砂混砂質シルト(ややしまる)
4. 近世包含層7.5Y3/2オリーブ黒色細粒砂
5. 近世包含層2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混細砂
6. 整地上層2.5Y4/2暗灰黄色中粒砂混極細粒砂
7. 整地上層2.5Y7/3浅灰黄色砂混砂質シルト
8. 整地上層10GY4/1暗緑灰色シルト混中粒砂(シルトブロック含む)
9. 整地上層2.5Y4/2暗灰黄色中粒砂混細粒砂
10. 整地中層2.5Y4/2灰オリーブ中粒砂
11. 整地中層10YR3/1黒褐色細砂～中粒砂

12. 整地中層10YR4/3に黄褐色砂混砂質シルト(薄い層を含む)
12. 整地中層2.5GY4/1暗オリーブ灰色中粒砂～シルト(灰色、黄色粘土ブロック含む)
13. 整地中層5GY4/1中粒砂～シルト(灰色、黄色粘土ブロック含む)
14. 整地中層2.5Y4/2暗灰黄色超粒砂混細粒砂
15. 整地中層10GY4/1暗緑灰色中粒砂
16. 整地下層5Y6/3オリーブ黄色粗粒砂
17. 整地下層2.5Y5/3灰褐色シルト混中粒砂～細砂
18. 整地下層7.5Y4/1灰色細粒砂混シルト(灰色粘土ブロック、炭を含む)
19. 整地下層5Y3/1オリーブ黒色細粒砂～中粒砂
20. 黄色砂混黄褐色中粒砂(炭分の比率が著しい)
21. 黄色細粒層

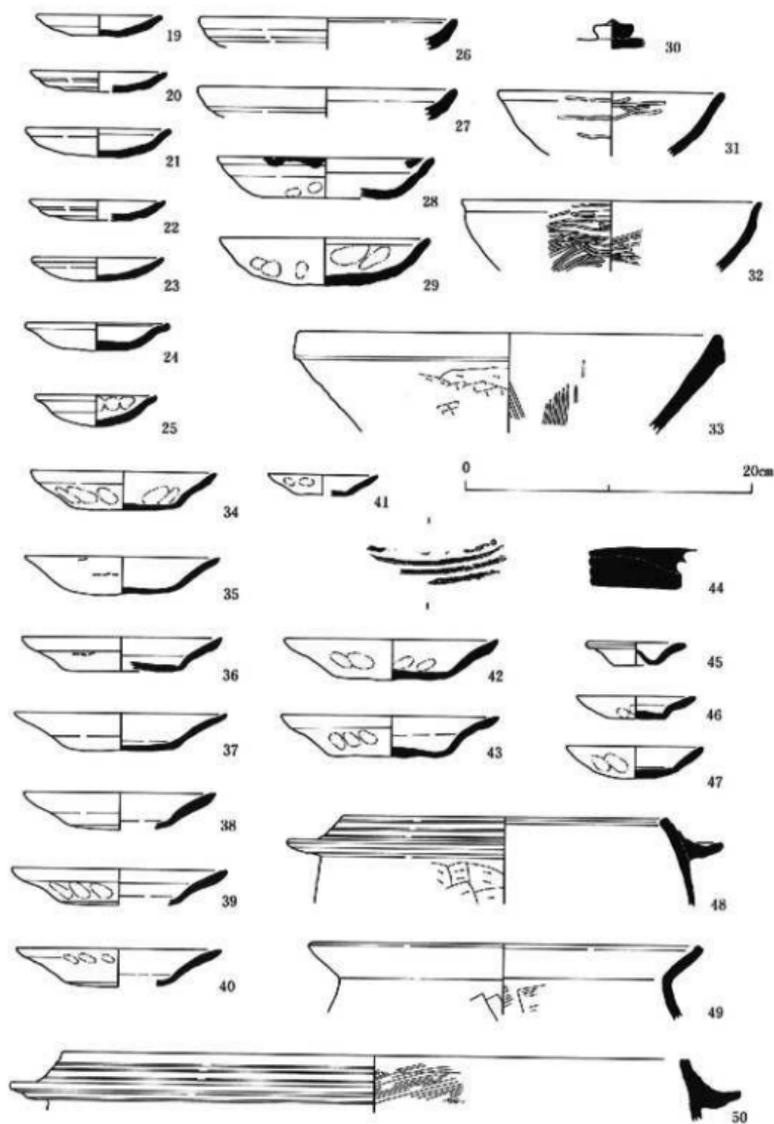
- SX01
- I. 10YR2/2黒褐色シルト～細砂
 - II. 10YR3/2暗褐色中粒砂～シルト
 - III. 2.5Y7/4浅黄色細砂～シルト
 - IV. 2.5Y7/4浅黄色中粒砂～細砂
 - V. 2.5Y8/8黄色粘土ブロックと中粒砂の混合
 - VI. 黒色中粒砂
 - VII. 2.5Y3/1黒褐色砂質シルト
- SX02
- 5Y4/1～10Y4/1灰色砂混砂質シルト 分層可

- 流跡
- A. 10YR4/2灰黄褐色中粒砂混シルト
 - B. 2.5Y4/2暗灰黄色中粒砂混シルト
 - C. 7.5GY5/1緑灰色粘土混シルト(細砂含む)
 - D. 2.5GY4/1暗緑灰色粘土混細粒砂
 - E. 10GY4/1暗緑灰色細粒砂～中粒砂
 - F. 5GY1緑灰色粘土混細粒砂

第70図 若江第55次土層断面図(S=1/100)



第72図 若江第55次SK02及びび包含層出土遺物実測図(S=1/4)



第73图 若江第55次包舍层出土遗物实测图(S=1/4)

図	番号	種類・器種	口径×器高	図化	色調(外面)	出土位置	備考
71	1	瓦器碗	14.8×・	反転	灰色	SK01	和泉型
71	2	瓦器皿	10.0×・	反転	灰色	SK01	内面みがき有
71	3	土師質皿	9.5×1.8	完形	浅黄橙色	SK01	底部外面接合痕有
71	4	土師質皿	9.6×1.9	完形	灰白色	SK01	底部外面接合痕有
71	5	土師質碗?	18.4×3.4	反転	橙色	SK01	古墳時代土師器
72	6	黒色土器碗	17.8×・	反転	浅黄色	SK02	A類(内黒)
72	7	土師器环	13.8×3.5	反転	淡黄色	SK02	摩耗顕著
72	8	土師器壺	10.2×5.5	反転	橙色	SK02	
72	9	土師質皿	・×・	・	浅黄橙色	SK02	反転復元不可
72	10	土師器皿	15.1×1.4	反転	明赤褐色	SK02	
72	11	白磁碗	・×・	反転	灰白色	SK02	
72	12	灰釉陶器碗	14.0×・	反転	灰白色	SK02	
72	13	灰釉陶器碗	・×・	反転	灰白色	SK02	
72	14	土師器鉢	37.0×・	反転	にふい橙色	SK02	小片、口径不安有
72	15	土師器鉢	42.9×・	反転	橙色	SK02	小片、口径不安有
72	16	須惠器蓋	10.0×・	反転	灰色	SK02	小片、口径不安有
72	17	須惠器壺	15.0×6.2	反転	灰色	SK02	外面に波状文
72	18	土師器羽釜	19.2×4.3	反転	にふい橙色	SK02	小片、口径不安有
73	19	土師質皿	8.1×・	反転	にふい黄橙色	整地下層	摩耗顕著
73	20	土師質皿	9.5×・	・	浅黄橙色	整地下層	
73	21	土師質皿	10.0×2.0	完形	灰白色	整地下層	焼成硬質
73	22	土師質皿	9.5×・	反転	浅黄橙色	整地下層	
73	23	土師質皿	9.1×1.7	反転	浅黄橙色	整地下層	焼成やや軟質
73	24	土師質皿	10.0×2.0	完形	灰白色	整地下層	焼成硬質
73	25	土師質皿	8.2×2.2	反転	浅黄橙色	整地下層	焼成やや軟質
73	26	土師質皿	17.8×・	反転	明褐灰色	整地下層	
73	27	土師質皿	17.8×・	反転	明褐灰色	整地下層	
73	28	土師質皿	15.0×・	反転	灰白色	整地下層	口縁煤付着
73	29	土師質皿	14.6×3.3	反転	にふい黄橙色	整地下層	焼成やや軟質
73	30	須惠器蓋	・×・	完形	灰白色	整地下層	古代須惠器

第4表 若江第55次出土遺物一覧表1

図	番号	種類・器種	口径×器高	図化	色調(外面)	出土位置	備考
73	31	瓦器碗	15.5×・	反転	灰色	整地下層	摩耗顯著
73	32	瓦器碗	20.6×・	反転	灰色	整地下層	小片、口径不安有
73	33	瓦質摺鉢	29.0×・	反転	灰色	整地中層	外面けずり
73	34	土師質皿	13.0×・	完形	浅黄橙色	整地中層	焼成硬質バリバリ
73	35	土師質皿	13.6×2.8	完形	浅黄橙色	整地中層	煤付者バリバリ
73	36	土師質皿	14.0×・	反転	灰白色	整地中層	焼成硬質バリバリ
73	37	土師質皿	14.8×2.6	反転	灰白色	整地中層	重ね焼痕バリバリ
73	38	土師質皿	13.4×・	反転	浅黄橙色	整地中層	焼成硬質バリバリ
73	39	土師質皿	15.0×・	反転	灰白色	整地中層	焼成硬質バリバリ
73	40	土師質皿	14.0×・	反転	浅黄橙色	整地中層	焼成硬質
73	41	土師質皿	7.6×・	反転	灰白色	整地中層	摩耗顯著
73	42	土師質皿	14.9×・	完形	灰白色	整地中層	焼成硬質バリバリ
73	43	土師質皿	15.0×2.4	完形	灰白色	整地中層	焼成硬質バリバリ
73	44	軒平瓦	・×・	・	灰白色	整地中層	焼成須恵質
73	45	土師質皿	6.5×1.6	完形	白クリーム色	整地中層	焼成硬質バリバリ
73	46	土師質皿	8.2×・	完形	灰白色	整地中層	摩耗顯著
73	47	土師質皿	9.4×・	反転	浅黄橙色	整地中層	焼成硬質バリバリ
73	48	土師質釜	22.6×・	反転	黄灰色	整地中層	外面煤付着
73	49	土師器甕	16.7×・	反転	灰白色	整地中層	古代土師外面はけ
73	50	瓦質釜	43.6×・	反転	灰色	整地中層	小片、口径不安有
72	51	土師質鍋台	24.8×6.45	反転	灰白色	層位不明	外面雲母付着
72	52	土師質釜?	16.0×・	反転	浅黄橙色	層位不明	大和型? 焼成硬
72	53	土師質皿	13.2×2.0	反転	灰白色	層位不明	焼成硬質
72	54	須恵器甕	27.0×・	反転	灰白色	層位不明	体部みがき状沈線
72	55	土師質釜	27.8×・	反転	橙色	整地下層	口縁部内面黒色強
72	56	瓦器碗	・×4.7	合成	灰色	整地下層	
72	57	瓦器碗	17.0×・	反転	灰色	整地下層	口縁一部みがき有
72	58	土師質皿	9.7×2.0	反転	灰白色	整地下層	焼成硬質
72	59	土師質皿	9.7×1.7	完形	浅黄橙色	整地下層	焼成やや硬質

第5表 若江第55次出土遺物一覧表2

※・は計測不可を表し、完形は図化部分が遺存、合成は一部を反転復原し図化したもの。

圖 版

1. 12次A地区
調査地近景



2. 12次A地区
調査風景



3. 12次A地区
土層断面





1. 12次B地区
土層断面



2. 13次
調査地近景



3. 13次
土層断面

1. A地区
調査風景

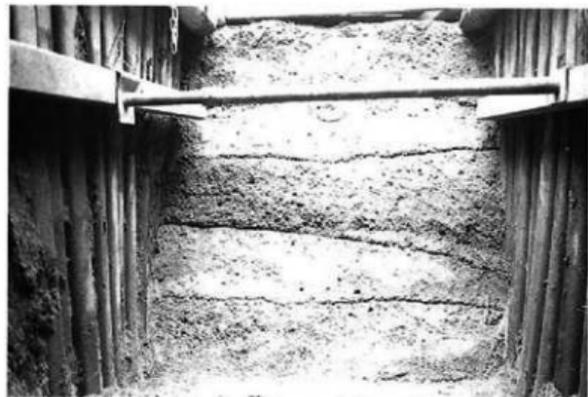


2. A地区
ビット1



3. A地区
南壁土層断面





1. C地区
南壁土層断面



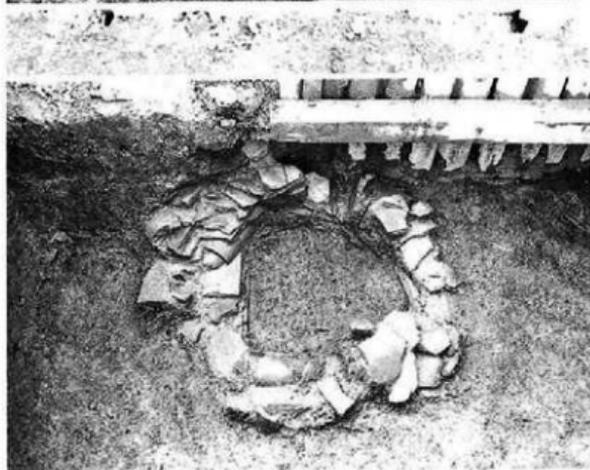
2. C地区
土塊2



3. C地区
土塊2断面



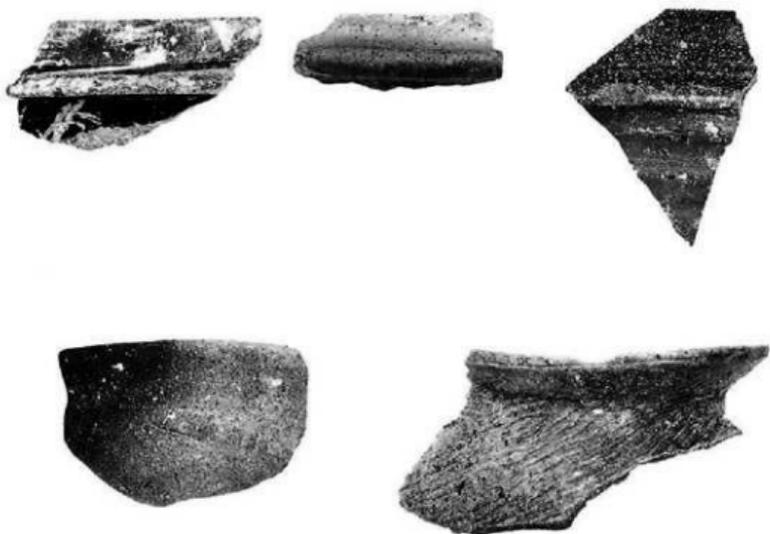
1. C地区
溝2



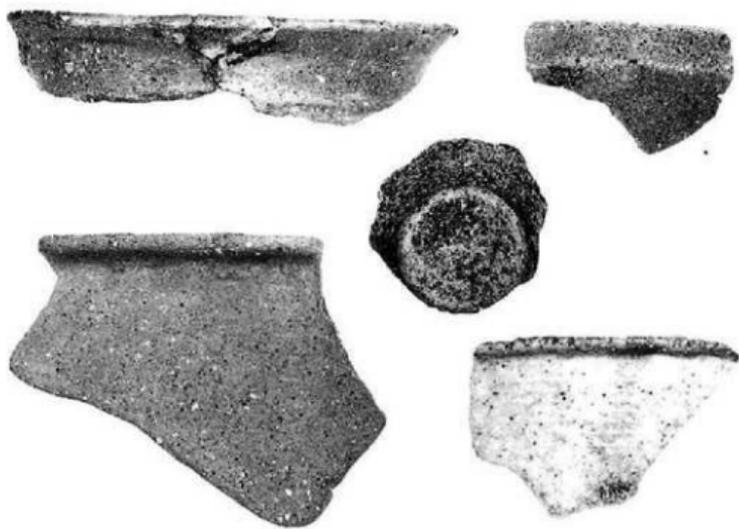
2. C地区
井戸2



3. C地区
井戸2断面



1. A地区出土土器1



2. A地区出土土器2

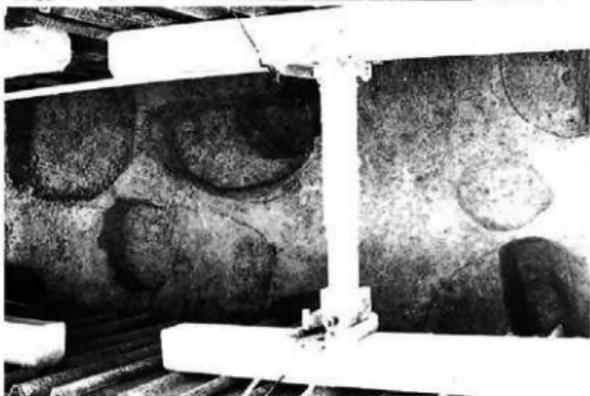
1. 調査風景

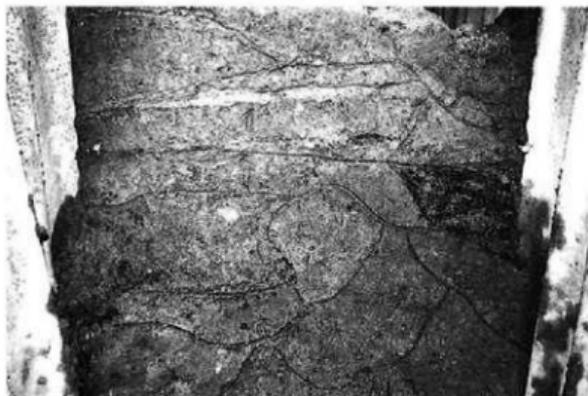


2. 立会地点
土層



3. 遺構
掘削状況





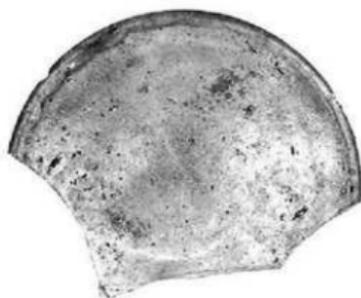
1. 調査区南部土層



2. 調査区南部
遺構検出状況



3. 緑釉陶器出土状況



1



1'



1''



2



1. 出土緑釉陶器
2. 出土黒書土器
3. 遺構検出状況



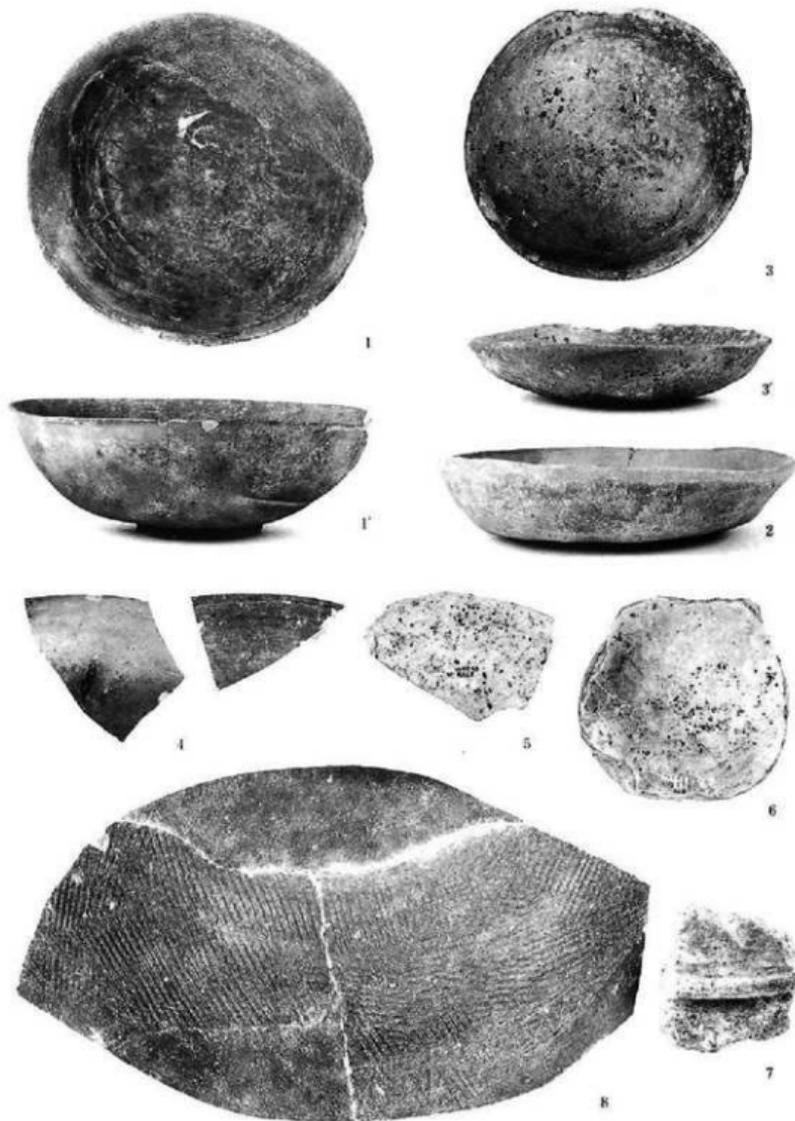
1. 調査風景



2. 土壁断面



3. ヒット(SP01)



出土遺物



1. C地区遺構状況



2. C地区南北溝



3. C地区土層断面

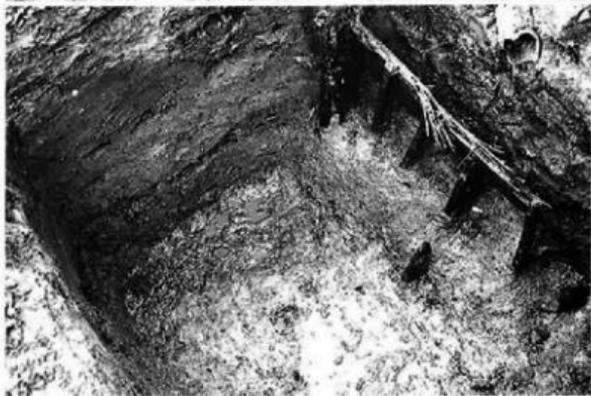
1. D地区
調査風景



2. D地区
杭出土状況



3. D地区
護岸施設





1. E地区
東西溝



2. E地区
堀西平



3. E地区
堀東付

1. F地区
掘出土状況



2. F地区
南北溝

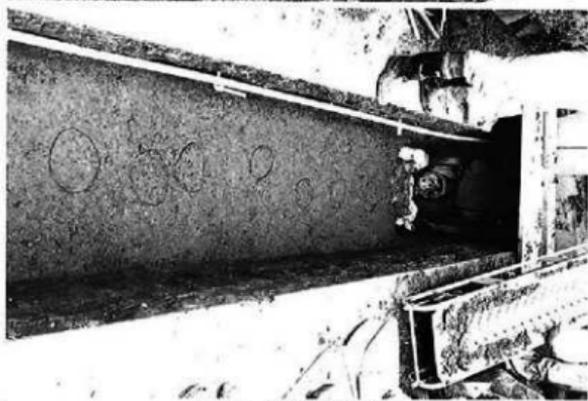


3. F地区
土器出土状況





1. D地区
立会地点土層



2. F地区近世
遺構検出状況



3. F地区
土層断面



1. F地区
調査風景



2. G地区
東西溝断面



3. G地区近世
落ち込み



1. 日地区
調査風景



2. 日地区
本層検出状況



3. 日地区
土層断面

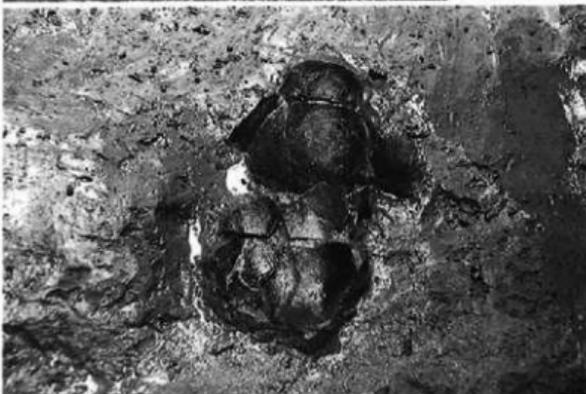
1. A地区
調査風景



2. A地区北壁
土層断面



3. A地区
土器出土状況





1. A地区北壁
上層断面



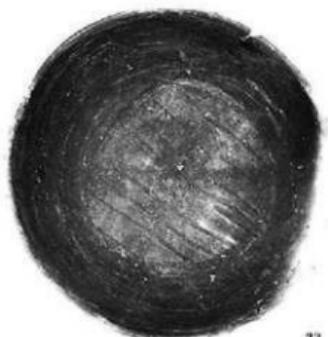
2. A地区
井戸



3. B地区
落ちこみ1検出状況



20



23



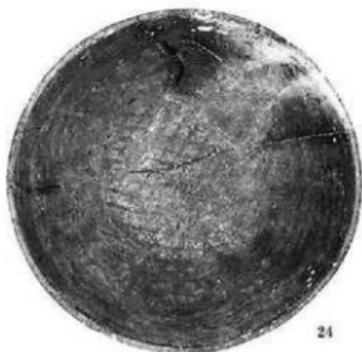
20'



23'



21



24



21'



24'



1



6



1



7



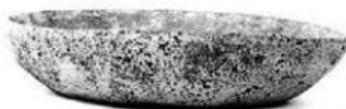
2



8



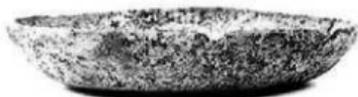
3



9



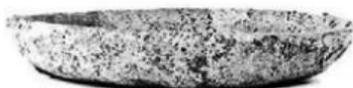
4



10



5



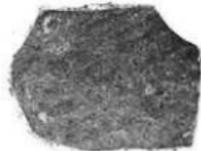
11



17



22



19

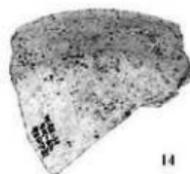


18

1. 落ち込み2出土遺物3



13



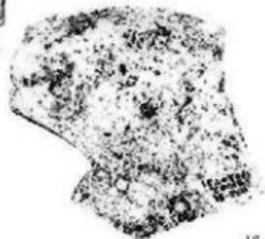
14



12



15



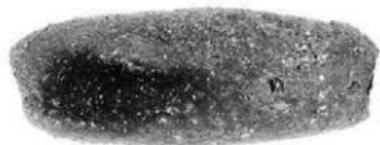
16

2. 落ち込み2出土遺物4



1. A地区
測量作業風景

2. A地区
上層断面



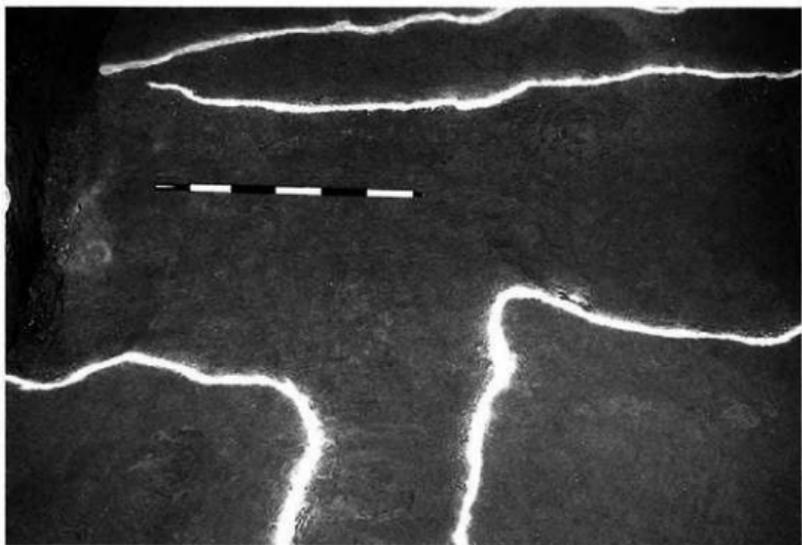
3. 試掘時出土の
土錘



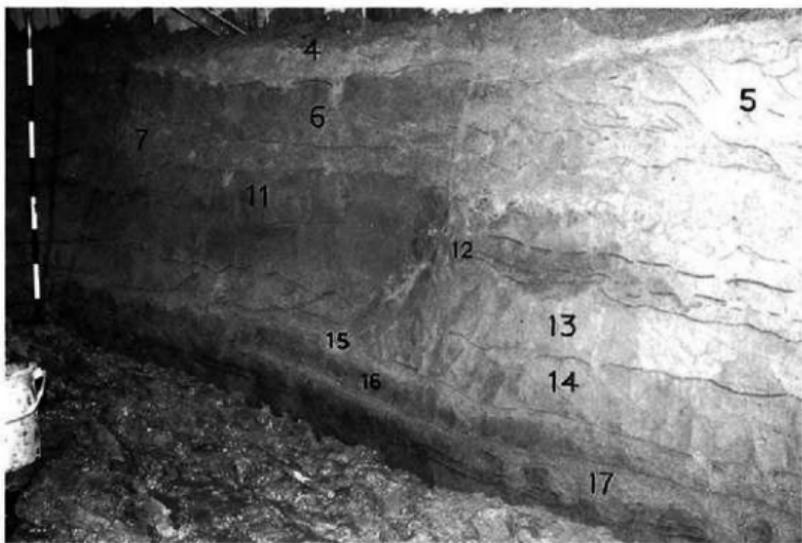
1. 調査区東半で検出された杭列をともなう畦畔と凹形のピット。畦畔はほぼ南北方向にのびる。13世紀代の道構と考えられる。写真左方が南。



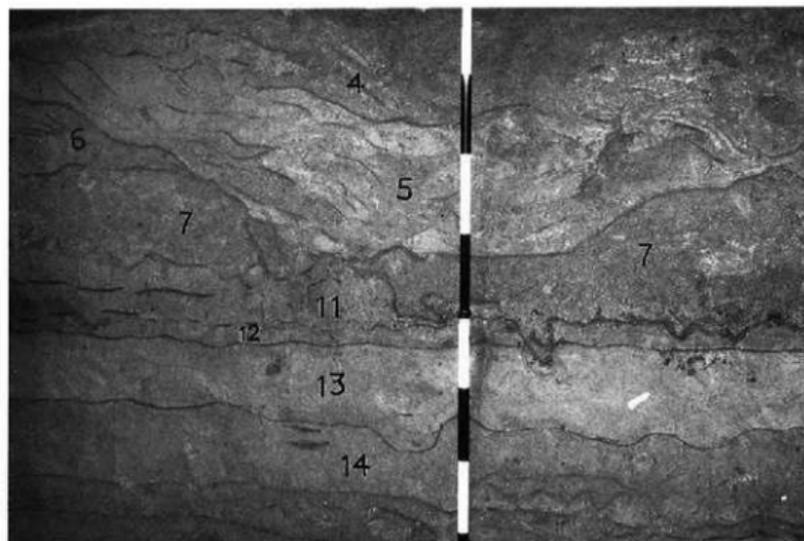
2. 南北方向の畦畔と調査区西北部で検出された丁字状の溝。溝は畦畔の西側の傾斜面をテラス状に残し、さらに一段掘り下げて形成されている。写真左方が南。



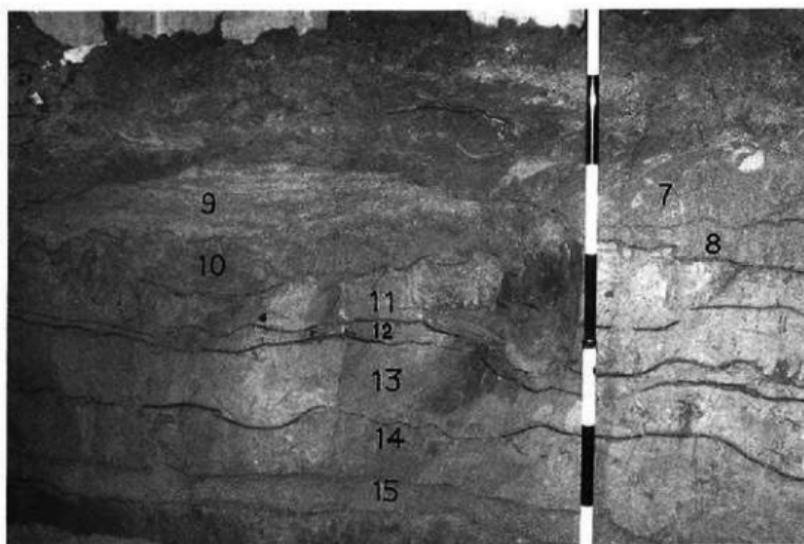
1. 調査区北西部で検出されたT字状の溝。写真左方が北。



2. 東壁土層断面。断面の上端はT.P.約3.3m。写真中の数字は図3・4の層番号に対応する。



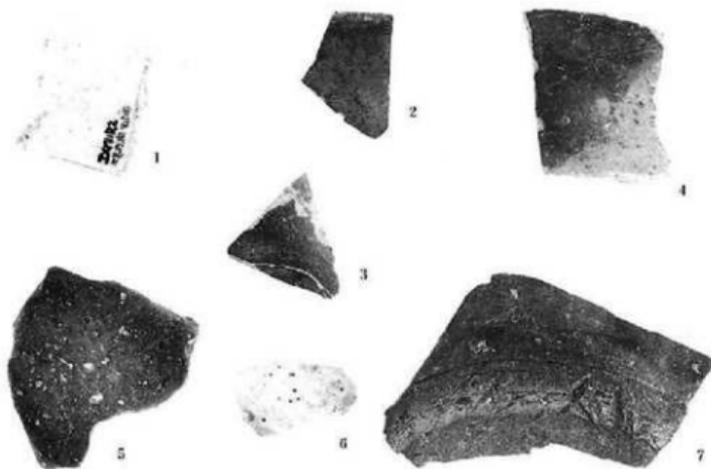
1. 東壁土層断面南端の小流路跡。周囲から砂泥が流入し、短時間で埋積されたと思われる。



2. 北壁土層断面中央部。断面上端はT.P.約3.1m。写真左上上部に唾吐の断面がみられる。数字は層番号に対応する。



1. 第18層上面で検出されたヒトの足跡。



2. 出土遺物。 1-3 瓦器輪破片、4 瓦器羽釜破片、
5-6 土師器破片、7 摺鉢破片

1. A地区
近景



2. A地区
道構状況



3. A地区
北壁上層





1. B地区
調査風景



2. B地区
調査近景



3. B地区
土層断面



1. 調査地近景



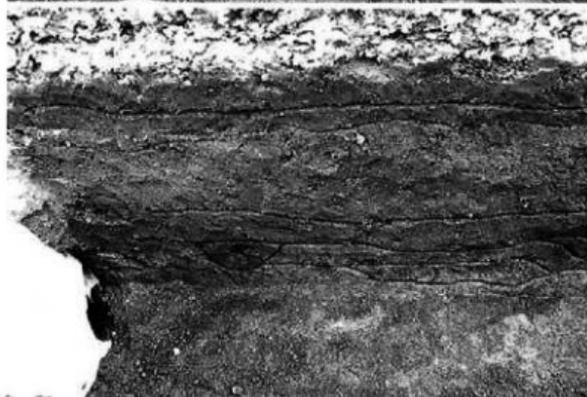
2. 調査風景



3. 堀断面



1. 調査風景



2. 土層断面1



3. 土層断面2



1. 土層断面 3



2. 土層断面 4



3. 土層断面 5



4



3

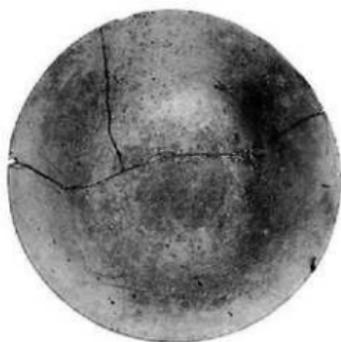


4'

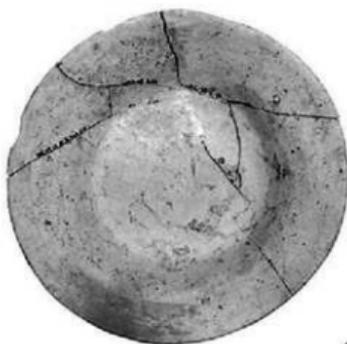


3'

1. SK01出土遺物



35



43



35'



43'

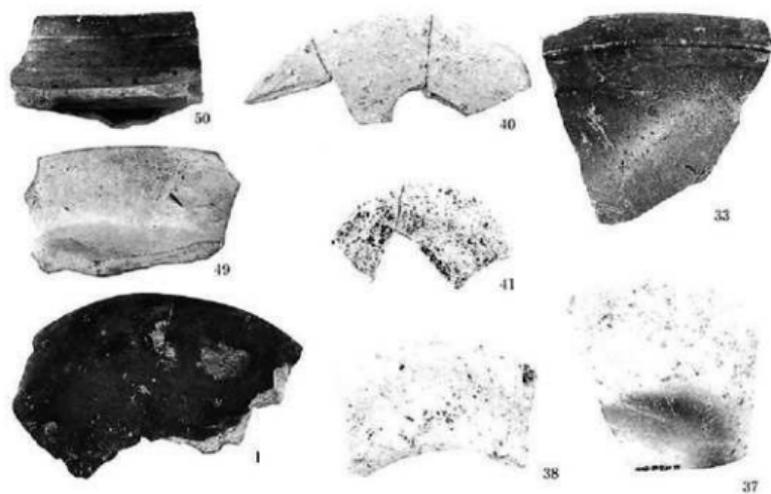


36

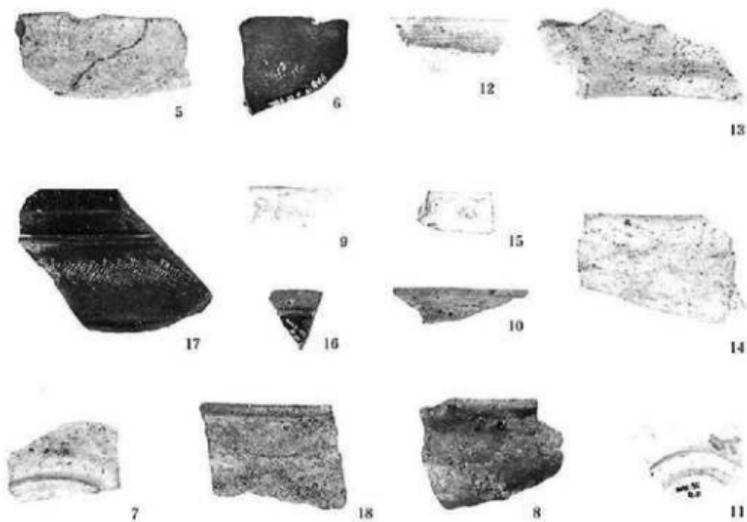


47

2. 包含層出土遺物



1. SK01・包含層出土遺物



2. SK02出土遺物



45



46



45'



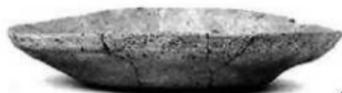
46'



31



42



31'



42'



44



21



25



24



23



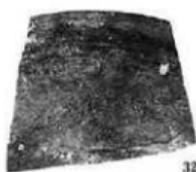
29



24



30



32



31



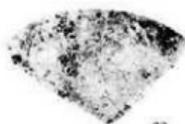
2



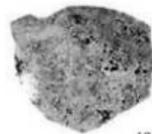
26



28



22



19



56



59



58



56



53



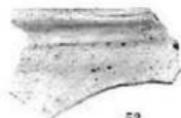
48



51



57



52



54



55

東大阪市下水道事業関係
発掘調査概要報告

—1992年度—

1994年3月31日

発行 財団法人東大阪市文化財協会
東大阪市荒川3-28-21
TEL 06-736-0346

印刷 ドウミ印刷広研社